



大学教育再生加速プログラム

文部科学省大学教育再生加速プログラム (AP)  
Acceleration Program for University Education Rebuilding

テーマV 卒業時における質保証の取組の強化

# 事業報告書

(平成 29 年度)



高知大学  
Kochi University

# 目次

## はじめに

### 第1章 大学教育再生加速プログラム（AP）の概要

1.1 事業概要	1
1.2 平成29年度までの大学全体の教育改革に関する取組状況	2
1.2.1 AP事業開始までの大学全体の教育改革に関する取組状況と課題	2
1.2.2 AP事業開始以降に得られた成果	2
1.2.3 テーマにおける必須指標	3
1.3 本事業の実施体制	4
1.3.1 学内の組織的な実施体制	4
1.3.2 評価体制	5
1.4 最終年度に向けて	6

### 第2章 平成29年度大学教育再生加速プログラム（AP）の具体的な取組と実績概要

2.1 I. 教育改革に向けた意識改革	7
2.1.1 目的	7
2.1.2 主な取組内容	7
2.1.3 成果	9
2.1.4 具体的な取組内容	10
2.1.4.1 平成29年度アクティブ・ラーニング科目の実施状況調査の実施	10
2.1.4.2 グッドプラクティス集の作成	12
2.1.4.3 FD・SDウィーク（授業公開週間）の実施	13
2.1.4.4 平成29年度高大接続の視点による授業公開と授業協議会の実施	16
2.1.4.5 学生面談に関わるFDの開催	17
2.1.4.6 外部講師によるFD「大学・高校教員のための協同学習ワークショップ」の開催	18
2.1.4.7 高知大学全学FDフォーラム2018の開催	21
2.1.4.8 全学共通授業アンケート「Reflective Monitoring」の作成	25
2.1.4.9 授業科目における成績評価分布の公表	27
2.2 II. 多面的評価指標を外部と共同開発する	29
2.2.1 目的	29
2.2.2 主な取組内容	29
2.2.3 成果	30
2.2.4 具体的な取組内容	31
2.2.4.1 学修ポートフォリオ（e-ポートフォリオ）の開発及び運用開始	31
2.2.4.2 プレ・ディプロマ・サプリメントの作成	34
2.2.4.3 多面的評価指標開発研究会の開催	38
2.2.4.4 多面的評価指標の試行モデルの実施	41
2.2.4.5 外部アセスメントテストの実施 大学生基礎力レポート	42
2.2.4.6 10+1の能力に関する到達度評価の実施に向けた体制整備	52
2.3 III. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する	54

2.3.1	目的	54
2.3.2	主な取組内容	54
2.3.3	成果	56
2.3.4	具体的な取組内容	57
2.3.4.1	卒業生調査及び卒業生就職先調査の実施	57
2.3.4.2	卒業生及び就職先企業へのインタビュー調査の実施	64
2.3.4.3	リフレクションセミナーの実施	66
2.3.4.4	大学教育の質保証に関するアンケートの実施	67
2.3.4.5	外部アセスメントテストの実施 ALCS学修行動調査	70
2.3.4.6	学修成果と学生生活のデータの分析及び検証	73
2.3.4.7	平成29年度外部評価委員会の開催	74
2.4	AP事業の情報発信	78
2.4.1	平成28年度AP事業報告書及びその他刊行物の発刊	78
2.4.2	AP事業ホームページでの情報発信	80
2.4.3	SPODフォーラム2017でのポスター発表	81
2.4.4	シンポジウムの開催	84
2.5	先進モデル校の視察	89

### 第3章 資料集

3.1	本報告書で使用する用語・略語	93
3.2	AP事業の取組内容とスケジュール	94
3.3	平成29年度FD・SDウィーク報告書	96
3.4	セルフ・アセスメント・シート様式	102
	・平成29年度入学生用	102
	・平成30年度入学生用	103
3.5	10+1の能力に関する到達度評価実施要領	105
3.6	リフレクション面談実施要領	107
3.7	卒業生インタビュー調査成果報告	108
3.8	シンポジウム資料	109
	・開催案内	109
	・ポスターセッション発表テーマ一覧	110
	・アンケート結果	111
	・講演資料	116

## 学長挨拶

高知大学は、地域に根差し、地域と共に発展することで、不断に進化する国立大学 "Super Regional University" を目指しています。平成27年度に地域協働学部を新設するとともに教員養成に特化した教育学部に改組しました。また、平成28年度には農学部が海底資源管理までを視野に入れた農林海洋科学部に、人文学部は人文科学と社会科学の総合力を増強した人文社会科学部に、さらに、平成29年度には理学部から、地球環境防災を補強し、より地域のテクノロジーをサポートできる理工学部へと改組をしました。いずれも、Super Regional Universityとなるためのエンジンを備えるための改組でした。

組織改革だけではありません。高知大学では教育の柱として、「総合的教養教育」と「地域協働による教育（地域協働型教育）」を置いています。前者では『知識・技能を学生の内面で統合し、世に働きかける能力を育成すること』を、後者では『状況に応じて知識・技能を使いこなす「統合・働きかけ能力」すなわち「メタ・コンピテンシー」を活用する能力を育成すること』を主眼としています。

平成28年度の文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」に採択された本学の取組は、「地域協働型教育」の展開と学生の能力を育成することに加えて、①「教育」に対する教職員の意識改革、②「多面的評価指標」の開発、③地域と社会と協働した「学生の成長の検証」を3本柱とし、教育の質保証の仕組みを構築するものであり、「地域活性化の中核拠点」のモデルとなり、"Super Regional University" としての評価を不動のものとするを旨としています。

皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

高知大学

学長 櫻井 克年

## 事業実施本部長挨拶

Society5.0という用語を最近よく聞く。これは第5期科学技術基本計画の中で提唱された未来社会のコンセプトを表す（日本の）造語である。5.0というバージョンを意味すると思われる数字は社会の基盤様式または文明の程度を示し、Society1.0の段階は狩猟・採集社会、2.0は農耕社会、3.0は工業社会、4.0は現代の情報社会のそれぞれの水準を指すという。Society5.0で実現する社会では、人々とPCや家電製品などのモノとがインターネットでつながり（IoT）、それらの使われ方を含め、地球上のあらゆる事象や人間活動の情報が自動的にくまなく継続的にビッグデータとしてサーバーに集まる。そして、そのビッグデータを人工知能（AI）が解析し、その結果、AIがロボットを操り、人間の役に立つ仕事をするという。職種によっては、現在人間がしている仕事をAIとロボットが乗っ取り、2045年にはAIの能力が人間の能力を上回る転換点（シンギュラリティ）がやってくるという、私にはにわかに信じがたい予測がある。

上記のように予測される近未来の社会状況と文明の変化について、当然その変化をもたらす、変化に適応していくのは人間自身である。しかし一方では、現在すでに表出している地球環境問題等を含め、これから急速に変化・変質していく社会で新たに惹起する様々な問題も平行して解決していかなければならないのも人間である。人間はいつの時代もその時宜に応じて高度な智慧と創造力、行動力、そしてたくましく幸福に生きていく力を身につけることが求められる。大学はそのような知識と能力をもつ人材を育成する責任がある。

大学は常に社会に対して教育の成果を説明しなければならない。設定したDPを実現するため、CPを組織的に実行していることの点検・評価はもとより、個々の教員の授業内容やアクティブラーニングを含む教育方法、成績評価のありかたを、学生の授業アンケートやFD、教員同士のピアレビューによって恒常的にチェックして改善し、公表するのは当然のことである。

教員が行う授業は重要であるが、大学の教育は授業だけで成り立っているわけではない。サークル活動やボランティア活動、インターンシップ、アルバイトを通じ、実際、学生は社会で必要とするコミュニケーション能力や倫理観などを養っている。正課と課外にかかわらず、何よりも大切なのは、学生が自律的・主体的に活動し、その中で学生自身が成長することである。そして、学生自身が自分の成長を実感し、「新たに知る・体験する」という喜びと達成感をもつことが最も大事なことであり、それがひいては教育の成果につながっていくのではないかと考える。

本AP事業には、学生に自分の成長の度合いを自ら評価させるしかけがある。知識・技能は教員によって評価されるものの、社会でたくましく生きていく力や社会人基礎力に相当する資質は、学生自身が評価する。一人ひとりの学生が定期的に自分を振り返って諸能力の改善点と向上点を自分の物差しで測定し、4年間の成長をe-ポートフォリオに記録し、最終的には独自のディプロマ・サプリメントを作成していくのである。その過程で、人間の能力をどのような基準でどのように評価するかというアセスメントの基礎的なスキルが学生の中に芽生える可能性がある。

平成29年度に本AP事業の中間評価が実施された結果、本学は最高レベルの「S」評価を受け、当初計画を越えた取組状況であると認められた。後半の2年間も引き続いて本学における教育の質の向上と保証および学修成果の可視化を目指し、全学をあげて取り組んでいく所存である。

高知大学大学教育再生加速プログラム事業実施本部長  
国立大学法人高知大学理事（教育・国際担当）・副学長

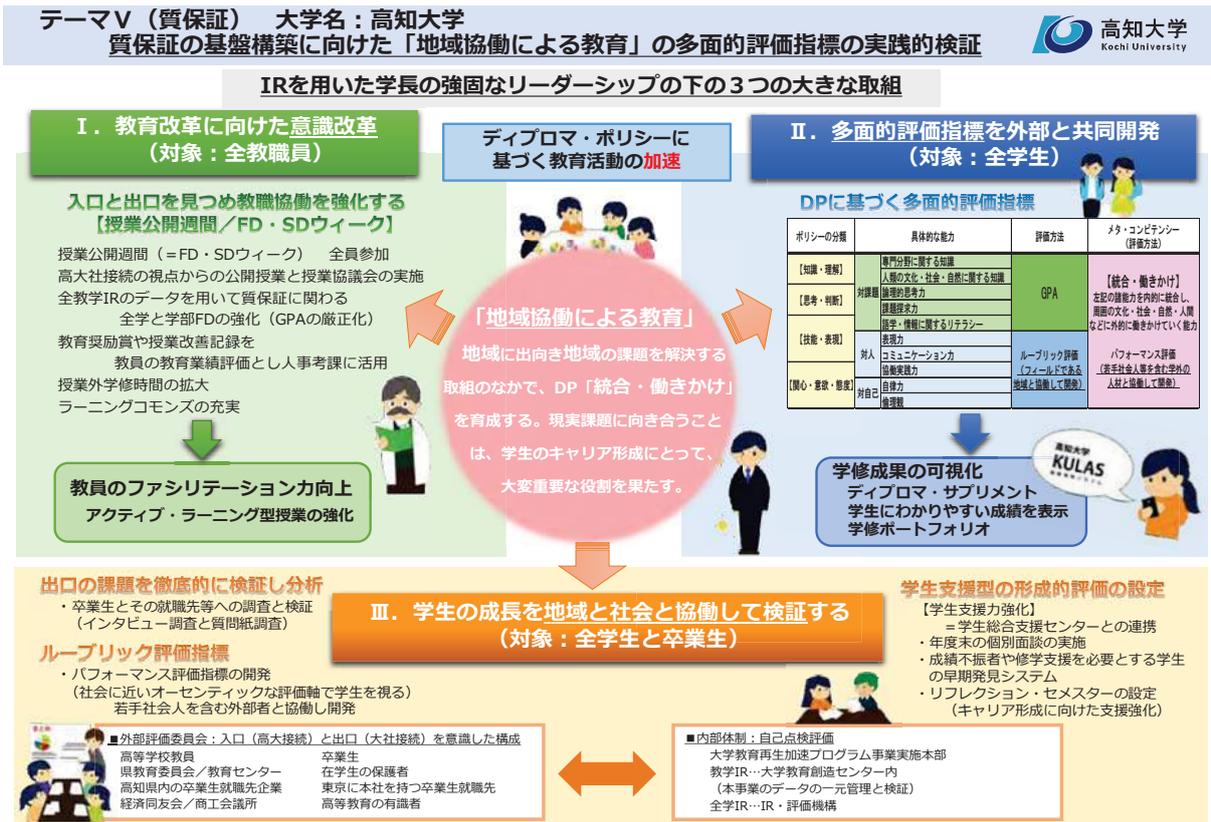
奥田 一雄

# 第1章 大学教育再生加速プログラム（AP）の概要

## 1.1 事業概要

平成28年度「大学教育再生加速プログラム」に採択された本学の取組は、「地域協働による教育」の展開と、それによる学生の能力の育成を中心に、「Ⅰ. 教育改革に向けた意識改革」、「Ⅱ. 多面的評価指標を外部と共同開発」、「Ⅲ. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する」の3本の柱で教育の質保証のための仕組みの構築を目指すものである。

これを可能にする取組として、FD・SDウィークの設定による教職員の意識改革、10の具体的能力及びメタ・コンピテンシーを用いたディプロマ・ポリシー（DP）の定義付け、ルーブリック評価やパフォーマンス評価などの多面的評価の実施、高大接続及び社会との接続の観点から社会人と共同で評価指標の開発等を行う。また、学生との面談及びリフレクション・セメスターの設置と形成的評価の導入によりキャリア形成支援を強化し、卒業生の活動状況調査により教育の検証を行う。こうした活動全体をIRデータにまとめ可視化し、卒業時までの教育の質保証のための仕組みの構築を目指す。



## 1.2 平成29年度までの大学全体の教育改革に関する取組状況

### 1.2.1 AP事業開始までの大学全体の教育改革に関する取組状況と課題

本学は、平成17年度の「高等教育の将来像」答申に従い、第2期中期目標・中期計画期間において総合的教養教育を推進することを掲げた。本学の総合的教養教育とは、さまざまな知識や技能が学生自身の内部で統合され、世の中に働きかける能力を育成する教育と定義し、一般的な教養教育とは一線を画すものである。その第2期に掲げた総合的教養教育を推進するために教育力向上3か年計画を2期にわたって継続し、1年次の課題探求実践セミナー（PBL型授業）を全学必修化とするなど総合的教養教育を展開してきた。しかしながら、取組は十分とは言えない状況である。平成28年度に実施した3年生を対象とする外部の客観テストにおいて、対人に関わるコンピテンシーが弱いことが明らかになった。また、第2期の当初においては、現実の社会において必要とされる、修得した知識や技能を状況に応じて使いこなす「統合・働きかけ」（メタ・コンピテンシー＝個々の能力要素（コア・コンピテンシー）を活用するコンピテンシー）の能力をディプロマ・ポリシーとして掲げておらず、この理念が教員間で十分に共有されていなかった課題も見えてきた。平成28年度より始まった第3期中期目標・中期計画においては、この総合的教養教育を基盤とし、「地域協働による教育」を目標に掲げたが、平成27年度終了時点で「地域協働による教育」を全面的に展開していたのは地域協働学部のみであった。

そのため、本AP事業においては、「統合・働きかけ」を育成する場として「地域協働による教育」を選択し、地域に出向き地域の課題を解決する取組のなかでこの「統合・働きかけ」を育成することを目標に掲げた。

### 1.2.2 AP事業開始以降に得られた成果

#### (1) 3つのポリシーに基づく教育活動の実施

本学では、ディプロマ・ポリシーと体系的・組織的な教育の一体性・整合性を整備するため、平成28年度に全学教育機構会議の下に「ポリシー見直しワーキング・グループ」を設置し、ディプロマ・ポリシー（以下「DP」という。）、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーについて見直しを行った。

また、そのポリシー見直しワーキング・グループにおいて、「知識・理解」「思考・判断」「関心・意欲・態度」「技能・表現」の4領域で定義してきたDPを、平成28年3月に本学教育組織改革実施本部「総合的教養教育ワーキング」において示された、全学共通の本学の学生が修得すべき10の能力（専門分野に関する知識、人類の文化・社会・自然に関する知識、論理的思考力、課題探求力、語学・情報に関するリテラシー、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、倫理観）及びその諸能力を統合し他者に働きかける力「統合・働きかけ」（以下「10+1の能力」と言う。）に結び付け、本学が育成すべきかつ学生が身に付けるべき能力の定義を明確にし、全学で体系的・組織的な教育の整合性を図った。

更に、全ての学部・学科・コースにおいて、DPにおける学生が身に付けるべき能力を明確にした能力指標を作成し、これらの指標は平成29年4月にホームページ上に公表した。

#### (2) 能力評価指標の運用

学生が身に付けるべき能力を社会との接続の視点から捉え直し、大学と社会の大社接続において、企業や学校関係者等の学外の社会人と共同して、上述の10+1の能力を用いたアセスメ

ント項目を開発し、詳細な検討を重ねて、平成29年4月に、全学の1年生を対象に、新版セルフ・アセスメント・シートとして実施した。

さらに、「統合・働きかけ」については、10+1の「統合」を検証するために、パフォーマンス科目を各学部・学科・コースで選定し、「統合」を測定するための手法について検討を重ねてきた。

従来の成績評価では、GPAを用いて学生の評価を行ってきたが、10+1の能力の明確化と能力指標の作成により、GPAに加え、多面的な評価軸を用いて、卒業段階で学生がどれだけの学修成果を身に付けたのかを客観的に評価するための取組を開始した。

### (3) 学生のための学修成果の可視化

本事業を契機に、既存の教務情報システムと連動したe-ポートフォリオを、学修成果を可視化し、学生が自己の学修成果を常に捉えることができるように再構築した。e-ポートフォリオには、学業成績に加え、AP事業で開発した評価指標やリテラシーとコンピテンシーを測定する外部客観テストの結果を掲載するとともに、目標や振り返り、課外活動の記録を入力できる仕組みを構築し、学生がいつでも自身の学修成果を一目で確認できるように設計した。

#### 1.2.3 テーマにおける必須指標

本事業で定められている必須指標について、本学が掲げている目標数値及び平成28、29年度の実績は以下のとおりである。

テーマにおける必須指標	H28		H29		H30	H31
	目標	実績	目標	実績	目標	目標
学生の成績評価 [GPA 平均]	2.20	2.25	2.00	2.24	2.10	2.20
学生の授業外学修時間 [時間数 (1週間当たり (時間) ]	6.0時間	10.7時間	8.0時間	14.0時間	10.0時間	12.0時間
進路決定の割合 [% ((就職決定者数+ 進学者数) / 卒業者数)]	90.0% (973/1081)	89.3% (981/1098)	91.0% (984/1081)	91.0% (970/1066)	92.0% (995/1081)	93.0% (1005/1081)
事業計画に参画する教 員の割合 [% (参画教員数 / 在籍 教員数)]	73.0% (444/608)	74.2% (451/608)	75.0% (456/608)	75.3% (469/623)	78.0% (474/608)	80.0% (486/608)
質保証に関する FD・SD の参加率 [% (参加教職員数 / 在 籍教職員数)]	58.0% (506/873)	60.6% (578/954)	60.0% (524/873)	76.1% (730/959)	65.0% (567/873)	70.0% (611/873)
卒業生追跡調査の実施 率 [% (調査回答者数 / 卒 業者数)]	12.0% (133/1110)	19.6% (210/1071)	15.0% (166/1110)	13.8% (152/1098)	18.0% (200/1110)	20.0% (222/1110)

## 1.3 本事業の実施体制

### 1.3.1 学内の組織的な実施体制

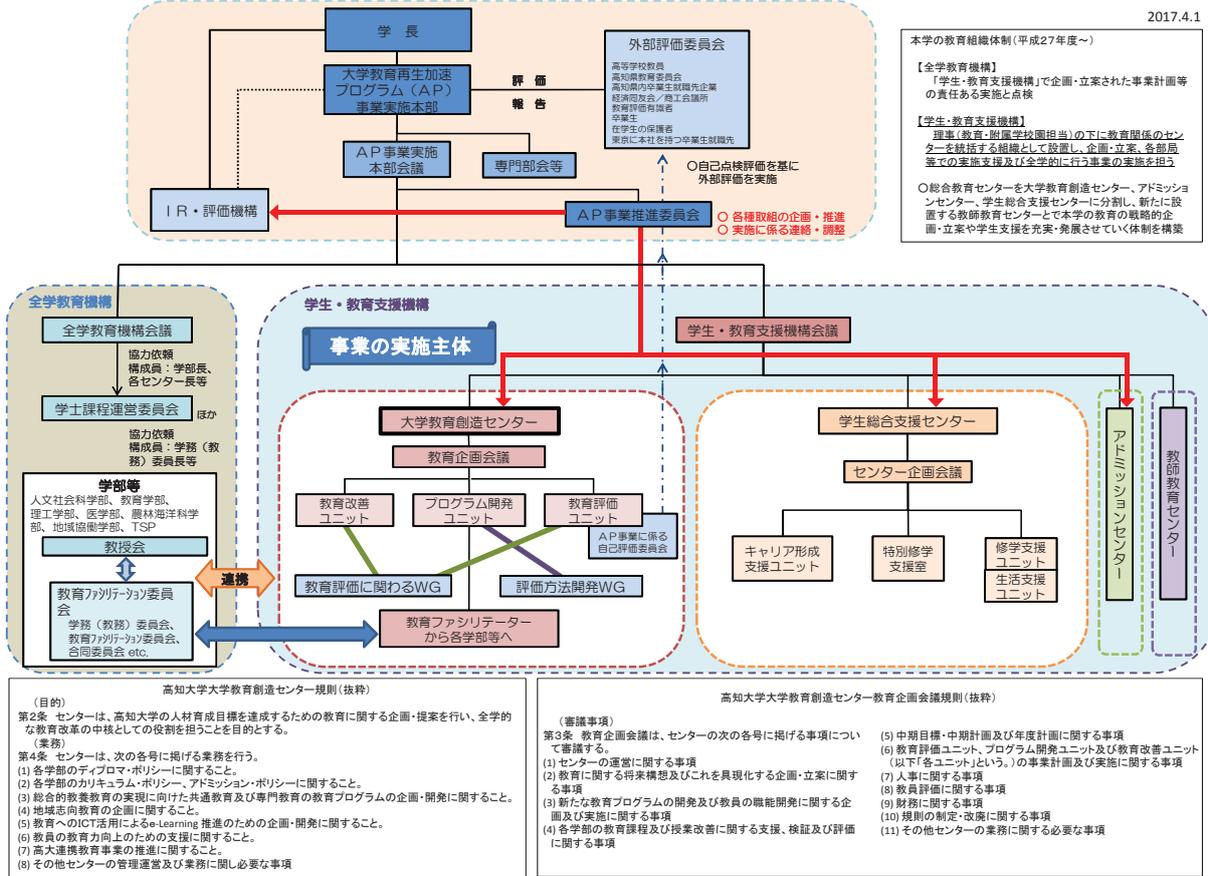
学長のリーダーシップの下、事業全体及びその成果と課題を可視化できる組織体制を構築するため、平成28年度に、中心拠点として、理事（教育・附属学校園担当）兼副学長を本部長とした「大学教育再生加速プログラム事業実施本部」（以下「実施本部」という。）を設置した。実施本部は事業の運営について必要な事項を定めるとともに、本学における本事業の取組を総合的かつ一体的に推進するための役割を持つ。また、その直下にIR・評価機構、大学教育創造センター、学生総合支援センター、アドミッションセンターから選出された教員及び学務部長等で構成された「大学教育再生加速プログラム事業推進委員会」を設置し、学生・教育支援機構が一体となって本事業の各種取組の企画・推進、連絡・調整を行うことができる体制を整えた。

本事業は大きく分けて2つのグループにおいて展開を図っており、1つ目は、学生・教育支援機構の大学教育創造センターと学生総合支援センターを中心としたグループである。本グループは、教員のファシリテーション力の向上、アクティブ・ラーニング型授業を実践する教員の教育力の強化、学生支援型の形成的評価システムの設計と運用に向けた取組を行っている。また、多面的評価指標の開発と統合等のために大学教育創造センター内に、本事業に関わる「評価方法開発ワーキンググループ」及び「教育評価に関わるワーキンググループ」を設置した。この2つは、大学教育創造センター教員と学部長の推薦により各学部から選出された「教育ファシリテーター」で構成されており、事業実施主体と各学部の連携、学部間の連携・調整並びに各学部の本事業への理解促進に繋がるものと位置付けている。

2つ目は、全学教育機構を中心とした各学部における教育体制である。従来より全学教育機構は、学生・教育支援機構で企画・立案された事業計画等の実施組織として機能しているが、全学規模での教員の意識改革を図るため、各学部の学務（教務）委員会及び本事業を推進するために各学部到新設された「教育ファシリテーション委員会」等において、質保証に係るFD事業の推進・強化を行っている。

この2つの組織が絶えず連携を図ることにより、これまで以上に緊密に教育に関わる連動を加速させ、本事業を全学体制で実施している。

大学教育再生加速プログラム (AP) 事業実施体制図



1.3.2 評価体制

本事業の取組に対する自己評価については、自己点検・評価体制（学内組織）と外部評価委員会による外部評価体制の2つで構成している。

学内の自己点検・評価体制は、従来から組織している大学教育創造センターの教育評価ユニットを基軸にしており、平成28、29年度は、教育評価ユニットが質保証に関わる検証を行い、月1回定例で開催される大学教育創造センター教育企画会議及び高知大学大学教育再生加速プログラム事業実施本部会議（以下「実施本部会議」という。）において報告を行った。上記の教育企画会議及び実施本部会議において、申請時に提出した申請書と計画調書を共有し、常に自己点検・評価を行い事業にあたっており、今後も継続して行う。

外部評価体制としては、本事業の実施状況や成果に関して適切性や達成状況を客観的・総体的に検証するため、学外の第三者機関として平成28年度から外部評価委員会を設置している。委員は、入口（高大接続）から出口（大社接続）までを意識して、企業等関係者、本学の卒業生及び高等教育機関の有識者等で構成されている。評価は、本事業の取組毎にA～E（A:十分適切といえる～E:まったく適切といえない）までの5段階評価で行い、評価結果については、教育企画会議及び実施本部会議において報告し、事業の改善に向けた検討を行う体制としている。

## 1.4 最終年度に向けて

平成28年度「大学教育再生加速プログラム」に採択され、「地域協働による教育」の展開と、それによる学生の能力の育成を中心に、「Ⅰ. 教育改革に向けた意識改革」、「Ⅱ. 多面的評価指標を外部と共同開発」、「Ⅲ. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する」の3本の柱で教育の質保証のための仕組みの構築を目指して取り組んできた。

「Ⅰ. 教育改革に向けた意識改革」については、①本学の現状把握としてアクティブ・ラーニング型授業の実施状況調査を実施し、②FD・SDによる教職員の意識改革として各種FDやSDを開催している。さらに③自己点検ができる体制の整備として全学共通授業アンケート様式の作成や成績評価分布の公表を行った。アクティブ・ラーニングに関して共通認識を持つ場の設定が必要なこと、FD・SDの参加者数を拡大するための方策について検討する必要があること、さらには成績評価分布を公表することが教員にとってどんなメリットがあるかの検討と情報発信が必要である等の課題はあるが、次年度以降もこのサイクルを継続して教職員の意識改革を推進していく予定である。

「Ⅱ. 多面的評価指標を外部と共同開発」については、①卒業時にどれだけの力を身に付けたのかを多面的に評価する仕組みとして、多面的評価指標開発研究会での議論を踏まえて多面的評価指標試行モデルや外部アセスメントテストを実施し、②学生の学修成果をより目に見える形で社会に提示するための手法として、学修ポートフォリオ（e-ポートフォリオ）を開発し、e-ポートフォリオの中に「プレ・ディプロマ・サプリメント」を作成して、学生が日常的に振り返り、PDCAサイクルを自律的に回せるよう支援した。また、本学が卒業までに身に付けてほしい力として定めている「10+1の能力」の評価方法を決定し、実施要項を策定することにより、平成30年度からのパフォーマンス評価の実施にむけて全学的な体制整備を行った。これらの取組については次年度以降も継続して実施する予定である。

「Ⅲ. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する」については、卒業生及び卒業生就職先調査、在学生への調査を実施し、これらのデータ分析を通して学生の成長を検証した。卒業生及び卒業生就職先調査は実施率が目標値に達していないという課題があるが、原因分析を行い改善にむけた対応策を講じた上で、今後も継続して実施する予定である。さらに、外部評価委員による評価も実施しており、課題を明確にしたうえで、適切に事業を実施していくこととしている。

最後に、本事業は実施するだけでなく本学が行った質保証の成果を社会に示すことが大切であると考えている。そのために、現在ディプロマ・サプリメントの構築を進めている。

## 第2章 平成29年度大学教育再生加速プログラム（AP）の具体的な取組と実績概要

### 2.1 I. 教育改革に向けた意識改革

#### 2.1.1 目的

教育改革に向けた意識改革では、平成19年度から行ってきた教育改革「高知大学の教育力向上計画」を再生し加速させるために、教員のファシリテーション力向上と、教員のアクティブ・ラーニング型授業の強化を目指す。本学では、新しい教育力として、これまで学生の自主性や学ぶ意欲を向上させながら授業を進める「ファシリテーション力」の育成に力を入れてきた。そのことから、アクティブ・ラーニングで求められるファシリテーション力の進化と深化を目標に掲げて事業に取り組んでおり、平成29年度は下記の取組を行った。

#### 2.1.2 主な取組内容

##### （1）平成29年度アクティブ・ラーニング科目の実施状況調査の実施

全学部を対象に、アクティブ・ラーニングを取り入れている授業科目について調査を行った（平成28年度からの継続実施）。本年度は、アクティブ・ラーニングの定義として、文部科学省が発信する用語集の定義を用い、その授業形態・手法については、大学教育創造センター内で検討を重ね、8種類とその他に分類し提示した。調査対象は、平成29年度に開講したすべての授業科目とし、アクティブ・ラーニング科目の該当の有無と授業形態・手法の分類について確認した。調査の結果、開講3,089科目のうち1,221科目（39.5%）でアクティブ・ラーニングを実施していた。なお、結果については、全学的な会議でフィードバックを行った。

##### （2）グッドプラクティス集の作成

教員の授業改善のため、授業デザイン、アクティブ・ラーニング等において先進的な取組を実施している授業から、6授業を対象にビデオ撮影を行い、編集を加え、グッドプラクティス集として4つの映像に纏めた。また、グッドプラクティス集は、情報共有を図るため、Learning Management System（高知大学moodle）上で全教職員を対象に公開した。

##### （3）FD・SDウィーク（授業公開週間）の実施

アクティブ・ラーニング技法の共有と質保証に関わる全学的なFD及びSDとして、FD・SDウィーク（＝授業公開週間）を設け、本年度は第1学期に42科目（延べ99回）の授業を50日間にわたり公開した（平成28年度からの継続実施）。

昨年度の参観申込者は353名（教員132名、職員221名）、本年度は355名（教員107名、職員248名）であり、昨年度と同様、全学から多数の参加があった。職員が大学の授業を参観するのは昨年度が初めての試みであったが、本年度の職員の参加申込率は対象職員の3/4であり、関心の高さが伺えた。一方、教員の参加率が伸びておらず、今後は教員の参加率の向上のために検討を行っていく必要がある。

##### （4）平成29年度高大接続の視点による授業公開と授業協議会の実施

高大接続の視点から、高知県内の高等学校教員を対象に3科目の授業公開とその授業に関わる授業協議会を開催し、高等学校教員から見た大学の授業の授業形態・授業方法について高等

学校教員と大学教員が意見交換を行った（平成28年度からの継続実施）。

高知県教育委員会の後援を受けて本事業について高等学校に呼びかけ、高知県教育委員会から2名、高知県内の県立・私立高等学校から6名の教員が参加した。授業は「教育の方法・技術」、「植物系統学」、「非営利組織マネジメント論」が公開された。授業参観後に、授業協議会が開催され、授業担当教員から授業の進め方や当日の授業について説明がされた後、①アクティブ・ラーニングと高校教員、②授業のターゲットと授業方法を考える、③PCを用いた授業のねらい、の3つの柱で協議した。

高等学校教員が大学の授業を見ることにより、大学教育におけるアクティブ・ラーニング等の知見を共有できたとともに、高等学校の教育現場でのアクティブ・ラーニング等のねらいや指導方法について意見交換することができた。

#### （5）学生面談に関わるFDの開催

学生面談の円滑な実施のために、面談に関わる基礎的な知識を共有するためのFDを開催した（平成28年度からの継続実施）。これまで学生面談は、教員個人の力量にゆだねられていたが、FDを開催することにより、学生面談の基礎的な知識を教員間で共有することができ、共通理解につなげることができた。

本年度は、各学部と調整を行い4月に学部別FDを実施したことで、参加者は昨年度を大幅に上回る371名（教員346名、事務系職員25名）となった。各教員が実践しやすいものであることを心掛けて構成し、①学生との初めての面談に必要な準備・心得、②成績不振・欠席の多い学生との面談の留意点、③トラブル回避のための留意点、の3つのパートに分けてFDを行った。

#### （6）外部講師によるFD「大学・高校教員のための協同学習ワークショップ」の開催

能動的学習（アクティブ・ラーニング）を授業に導入し促進させるために、グループ学習の代表格である協同学習の基本的な知識と技法の獲得を目指したワークショップを開催し、学内外から12名が参加した。今回は、AP事業テーマI「アクティブ・ラーニング」の採択校である創価大学の関田一彦教授を講師として招聘した。ワークショップでは、学生の主体的な学びをデザインするためのアイデアや協同学習の様々な手法等について学び、学習効果が高まる学習方法の理論について理解を深めた。

#### （7）高知大学全学FDフォーラム2018の開催

「教育の内部質保証に関するガイドライン」（大学改革支援・学位授与機構 質保証システムの現状と将来像に関する研究会 平成29年3月）を受けて、本学における内部質保証の体制構築に向けて理解を深め、情報共有を図るために、高知大学全学FDフォーラム2018を開催し、72名が参加した。

「教育の内部質保証に関するガイドライン」に関わる政策動向についての濱名篤氏（関西国際大学学長、中央教育審議会大学分科会制度・教育改革ワーキンググループ委員）による基調講演を始め、本学の教学IRに関する取組について報告を行い、内部質保証のシステム構築に向けた議論を行った。

#### （8）全学共通授業アンケート「Reflective Monitoring」の作成

本学における教育の質保証の基礎となる個々の授業科目について、学生の授業に関する振り返りを促し、それに基づいた教員による授業改善を図るために、全学共通授業アンケートとし

て「Reflective Monitoring」を作成した。本年度第2学期に教員6名が10授業科目で実施し、平均回答率は66.0%であった。また、学修ポートフォリオ（以下、「e-ポートフォリオ」と称する。）上に「Reflective Monitoring」「授業評価アンケート」「授業改善5週目・15週目アンケート」を格納し、e-ポートフォリオを活用してアンケートを実施できる環境を整えた。

### （9）授業科目における成績評価分布の公表

平成29年度から、原則として受講者（成績評価者）数が10名以上であった授業科目について、e-ポートフォリオ内で成績評価分布の公表を開始した。

本取組により、学生は、自己が履修した修得科目（公表対象科目のみ）の成績評価分布、評価平均点、標準偏差を確認することができるようになり、学修の到達度や成果について客観的に自己評価を行うことが可能となった。また、公表により、成績評価の透明性、公平性の担保及び厳正なる成績評価の推進がなされ、教育の質の保証と向上に繋がるものと期待できる。

### 2.1.3 成果

教職員の意識改革は、効果的かつ継続的に推進できるよう、①本学の現状把握、②FD・SDによる教職員の意識改革、③自己点検ができる体制の整備、の3つの観点で取組を実施した。

①本学の現状把握として、（1）アクティブ・ラーニング科目の実施状況調査を実施し、本学の授業にどの程度アクティブ・ラーニングが浸透しているかを調査した。結果は39.5%であり、全学部等である程度アクティブ・ラーニングが浸透していることが伺えた。しかし、学部間の差が認められ（学部特性の考慮は必要であるが）、アクティブ・ラーニングに関する知識の提供の場が必要であると思われた。

②FD・SDによる教職員の意識改革として、（2）から（7）の各種FD・SDに取り組んだ。特に、アクティブ・ラーニング科目の実施状況調査結果を受けて、アクティブ・ラーニングに関する理解を深めるための様々なFD・SDを実施した。結果、FD・SDウィークでは、延べ355名の教職員の参加があり、全学のFD・SD参加教職員の約49%がFD・SDウィークに参加していた。このことは、本事業が全学的な教職員の意識改革に寄与していることを示すものである。また、本年度は本学で先進的な取組をしている授業からグッドプラクティス集を作成し、これらの映像コンテンツをWebで閲覧できる環境を整えた。これにより各人の都合に合わせてFD・SDを実施することが可能となった。

③自己点検ができる体制の整備として、（8）全学共通授業アンケート様式の作成、（9）成績評価分布の公表を行い、各教員・組織の両面から現状把握を自主的に行い、授業を振り返り、ブラッシュアップさせていくことができる仕組みを構築した。なお、成績評価分布は、最終受講者数が10名以上であった授業科目（一部除外有）を平成29年度第1学期成績から公表することとし、成績の公表に合わせて、厳正・適正な成績評価のための申合せ「公正な成績評価の実施に向けて」を制定した。このことにより、成績評価の透明性・公平性の担保や厳正なる成績評価の推進が図られたほか、教員だけでなく学生にも公表することで、学修の到達度や成果について客観的に自己評価を行うことが可能になった。また、厳正・適正な成績評価ができているかを検証するため、平成29年度のGPAの分析を行った結果、全科目で2.24であった。平成28年度のGPAの値が2.25であり、この値と比べて年度ごとの変動が少ないことから、概ね適切にGPAの運用ができていると推察される。

次年度以降もこのサイクルを継続し、教員の意識改革を推進していく予定である。

## 2.1.4 具体的な取組内容

### 2.1.4.1 平成29年度アクティブ・ラーニング科目の実施状況調査の実施

#### (1) 趣旨・目的

本学の第3期中期目標・中期計画において、「「地域協働」を核とした教育を実施し学生の能動的学修の促進を図り、その質を保証するため、学修の成果や到達度を客観的に評価するルーブリックを平成31年度までに開発し、全学的に実施する。また、能動的学修を支援するため、ラーニング・コモンズやメディア学修環境等の整備を行う」ことを掲げており、これに基づき平成29年度の年度計画では、「施設整備計画案に基づき、ラーニング・コモンズ等を整備するとともに、アクティブ・ラーニング型授業モデルの実施状況とそれに関わる教室の稼働について確認し、検証を行う」ことを計画した。

本調査は、第3期中期目標・中期計画期間中において毎年度末に実施し、上記計画の達成に向けた指標とするとともに、調査結果をもとに教育の検証、改善につなげることを目的とする。

#### (2) 取組内容

本学において、どの程度アクティブ・ラーニングが実施されているかについて、全学部を対象に、文部科学省の定義を基に調査を実施した。文部科学省の発信する用語集によると、アクティブ・ラーニングは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」と定義されている。この定義から想定できる授業形態を9類型に分類し、本年度開講された3,089科目の実施状況について、調査を実施した。また、本学では、授業のいずれかの回に上記定義に該当する内容を取り入れている場合、授業回数に関わらず、アクティブ・ラーニング科目として扱うこととした。

#### (3) 結果

##### 1) アクティブ・ラーニング科目の実施科目数

本年度開講された3,089科目の内、1,221科目でアクティブ・ラーニングを実施しており、全体の39.5%であった。学部（1教育プログラムを含む）ごとの内訳は以下のとおりである。

学部等	アクティブ・ラーニング 科目		該当しない 科目	合計
共通教育	254	48.3%	272	526
人文学部	67	27.8%	174	241
人文社会科学部	50	16.2%	259	309
教育学部	153	19.1%	648	801
理学部	121	40.1%	181	302
理工学部	24	42.1%	33	57
医学部	180	73.8%	64	244
農学部	192	61.5%	120	312

農林海洋科学部	53	36.1%	94	147
地域協働学部	74	96.1%	3	77
土佐さきがけプログラム	53	72.6%	20	73
合計	1,221	39.5%	1,868	3,089

※上表は2) 授業形態・手法の①～⑨のいずれかに該当する科目を集計（受講生0の科目を除く）

## 2) 授業形態・手法（学部別）

授業形態・手法別の集計結果としては、プレゼンテーションを取り入れた科目が最も多く、次にグループワークを取り入れた授業科目であった。

### <結果一覧表>

#### <授業形態・手法の分類>

- ① 課題解決型授業（PBL）
- ② 反転授業を取り入れた授業科目
- ③ グループワーク（ディベート等）を取り入れた授業科目
- ④ プレゼンテーションを取り入れた授業科目
- ⑤ ピアティーチング（学生同士の学び合い）を取り入れた授業科目
- ⑥ 体験学習・フィールドワークを取り入れた授業科目
- ⑦ フィードバック（振り返り）を実施している授業科目
- ⑧ ICTを活用した授業科目
- ⑨ その他

学部等	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
共通教育	49	99	137	130	100	80	74	93	5
人文学部	13	3	45	57	19	10	15	8	6
人文社会科学部	6	0	25	27	16	9	17	12	4
教育学部	56	17	98	96	57	48	70	20	15
理学部	34	13	39	37	18	25	51	33	1
理工学部	4	1	9	2	1	11	11	5	1
農学部	54	1	69	132	74	126	41	11	0
農林海洋科学部	6	3	16	10	14	29	17	11	0
地域協働学部	44	8	60	60	1	26	62	8	7
土佐さきがけプログラム	21	0	24	17	0	12	24	10	3
合計	325	157	641	682	383	474	464	234	49

※複数回答可

学部毎の実施率は、学部の特性によって差が出たが、地域協働学部、農学部、医学部は、体験学習・フィールドワークを行う授業が学部の特色であることから、実施科目数も必然的に多くなる。従って、数値だけに目を向けずに、学部の特色も踏まえて検証を行うことが必要であると思われる。

次に授業形態・手法（学部別）の分類から見てみたい。⑨その他を除く8項目の中で、実施科目数が多いアクティブ・ラーニングは、④プレゼンテーションを取り入れた授業科目（682科目）、続いて、③グループワーク（ディベート等）を取り入れた授業科目（641科目）であった。反対に実施科目数が少ないのは、②反転授業を取れ入れた授業科目（157科目）と⑧ICTを活用した授業科目（234科目）であった。

本結果から次回調査への課題として挙げられるのは、先述のように学部別の実施率には学部教育の特性が影響しているということと、反転授業等単語の知名度が低いものがあることである。2点目については、項目に事例等の具体的な記述を入れて、回答の際にイメージが湧きやすい工夫を行う等の配慮を行っていく必要があると考えられる。

#### 2.1.4.2 グッドプラクティス集の作成

##### (1) 趣旨・目的

AP事業の一環として、教員の授業改善のために、優れた取組を行っている授業をビデオ撮影し、これを編集して「高知大学グッドプラクティス集」を作成する。

##### (2) 取組内容

本学において、優れた取組を行っている教員6名の実際の授業を録画し、大学教育創造センターが授業方法や学生への働きかけ等について、グッドプラクティスにあたる部分を取り上げ、分類して4つの映像に編集した。また、「高知大学グッドプラクティス集」は本学の教育改善と教育への理解を深めることを目的として、高知大学moodle上で本学の教職員・学生に対して公開した。

#### <グッドプラクティス集対象授業>

科目名	授業担当者	教室	撮影日
家庭科指導法A	小島 郷子	教育21番講義室 (教育学部2号館1F)	6月20日(火) 13:10~14:40
基礎ゼミナール	島内 理恵	共通講義室1 (理学部2号館)	6月23日(金) 6月30日(金) 13:10~14:40
人事管理論	中川 香代	125教室 (共通教育1号館2F)	6月27日(火) 13:10~14:40
物理学I	関 安孝	第3講義室 (医学部講義棟2F)	7月3日(月) 14:50~16:20

水産物利用学	足立 享介	3-1-11番教室 (農林海洋科学部3号館1F)	7月14日(金) 10:30~12:00
地域計画論	松本 明	グループワーク室2 (総合研究棟1F南)	7月24日(月) 14:50~18:00

### (3) 結果

作成したグッドプラクティス集を本学の教職員及び学生全てが閲覧することができる高知大学moodle上で公開することにより、場所や時間の制限なく、自由に授業見学ができるようになった。特に、教員にとっては、本取組を実施したことにより、他の教員がどのような資料を用いているのか、学生に対してどのような声掛けをしているのか等、本学で実際に行われているアクティブ・ラーニングの授業形態に触れることが可能となり、教員の自主的で日常的なFD活動につながった。

#### 2.1.4.3 FD・SDウィーク（授業公開週間）の実施

##### (1) 趣旨・目的

教育改善に関する教職員の意識改革の一環として、従来の相互授業参観を見直し、各学部等5授業程度を選び、全教職員を対象に公開することにより、授業参観の機会を増やす。これによって、

- ① 授業公開者の授業改善を行う。
  - ② 授業参観を通じて参観する側の教員が授業についての内省を通じた教育改善を図る。
  - ③ 職員は授業参観を通じて、大学の授業について理解する第一歩とし、業務への反映を図る。
- ことをめざす。

##### (2) 取組内容

###### 1) 実施期間と開講科目数

期 間 平成29年6月12日(月)～平成29年7月31日(月)

科目数 42科目(延べ99回開講 ※eラーニング科目は1回として集計)

###### 2) 申込方法

昨年度に引き続き、公開授業の参加申込みの受付から参観後のコメント記入までを一括して専用サイトで行った。

**高知大学 FD・SD取組  
授業参観登録ページ**

[ 学組別一覧 ]   [ 一覧印刷 ]

トップページ > イベント > 授業参観・リフレクション閲覧      こんにちは      [ ログアウト ]

**授業感想・リフレクション閲覧**

授業基礎情報		授業計画情報	
開講年度	2016年度	開講日	2017年01月13日
学期	第2学期	曜日	水曜日
学部	共通教育	時間	4時限(14:50~16:20)
キャンパス	朝倉キャンパス	担当教員	
講義種	共通教育種	参観者 コメント入力期限	2017年02月01日
教室	034番教室	授業公開者 コメント入力期限	2017年02月21日
時間割コード	02037	参観人数	6/20人
科目名	文学と社会	備考	

**リフレクション**

参観者へのコメント、気づきや振り返り(リフレクション)

右側11字を参照していただき、ありがとうございます。  
授業担当者は日本文学(近世文学特に(国語史))を先行する旨ですが、この授業ではそのした専門分野はほとんど変わらず、「国語の成立」「伝統の継承」といった近代化の問題を、専門である近代史の視点から取り上げています。  
教室はグループワークに適した構造ではないため、ほとんど机を動かしてのcaw2していません。本時は、特等caw2機を動かしてのcaw2としてい  
た。

### 3) 申込者数及び参観者数

	参観申込者数	コメント登録者数
教員	107人	87人
職員	248人	219人
全体	355人	306人

### (3) 結果

参観後のアンケート調査を実施した結果、下記の意識改革につながったかを問う質問に対して、「強くそう思う」、「そう思う」と答えた人数は教員が81人(93%)、職員が175人(80%)であり、本取組が教員にとっては授業改善や意識改革に役立ち、職員にとっては大学教育への理解や自分を見つめ直す機会になったと捉えていることがうかがえた。

#### <アンケート質問項目>

教員：この取組は、あなたの授業改善や教員としての意識改革に役立つものでしたか。

職員：この取組はあなたの大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となりましたか。

区分	回答数	比率
強くそう思う	58	19%
そう思う	198	65%
どちらとも言えない	42	14%
そう思わない	7	2%
強くそう思わない	1	0%
総数	306	100%

また、本企画の趣旨や目標に対する成果として、対象者別では、次のようにまとめられる。

### 1) 授業公開教員

アクティブ・ラーニングを取り入れている授業の比率が多かったようで、これまでの授業改善の取組が成果を上げている様子がうかがえる。また、参観した教職員から様々なコメントがあり、特に職員のコメントは具体的で学生目線に近いと感じられるものが多く、授業公開教員が授業改善の検討を行う上で参考になる資料が得られたと思われる。

実際に授業改善に結びつけるのかは授業公開教員に委ねられているため、事後アンケートの実施も必要かもしれない。

### 2) 授業参観教員

今回の参観授業では、意識改革に役立つものだったかという問いに、93%が肯定的な回答をしており、アクティブ・ラーニングを取り入れていると思われる授業が多かったことも、その要因の一つであると考えられる。また、eラーニング科目についてもこの企画で初めて観た、知ったという教員も多かったようで、効果的なeラーニングの利用についてもコメントが書かれていた。今後もこれらの新しい手法が授業公開教員と授業参観教員の間で共有されていくことが期待される。

### 3) 職員

授業参観を業務に関連づけて考えていた者が多数いた。例えば、教室の整備にかかわる者や、学生対応窓口で業務をしている者にとっては教室での学生の様子などは直接業務に関連する内容として感じ取ったようである。また、業務内容と授業内容が関連していて、もっと授業を聞きたかったというようなコメントもあった。アクティブ・ラーニングの授業を参観した職員の中には、SDの研修方法として授業の進め方に関心を持った者もいた。

他方で、少数ではあるが、業務に関係を感じないとコメントした者もいた。大学は学生を育てる機関であり、全ての業務はそこに直接的、または間接的に必ず結びついている。そのことを理解してもらうための工夫が今後必要かもしれない。

(平成29年度FD・SDウィーク報告書：資料集P96～)

<参観の様子>



## 2.1.4.4 平成29年度高大接続の視点による授業公開と授業協議会の実施

### (1) 趣旨・目的

AP事業における高大接続改革推進の取組として、大学の授業を高等学校教員に公開し、授業参観と授業協議会を通じて、授業方法、育成すべき能力等についての意見交換を行う。

### (2) 取組内容

1) 日 程 平成29年7月10日（月）～平成29年7月13日（木）

#### 2) 公開授業科目

日 時	科目名	授業担当者	教 室	授業協議会
7月10日（月） 16:30～18:00	教育の方法・技術	杉田 郁代	222教室 (共通教育棟2号館2階)	18:10～18:40 125教室
7月11日（火） 8:50～10:20	植物系統学	松井 透	共通講義室第3 (理工学部2号館4階)	10:30～11:00 理工学部第1会議室
7月13日（木） 14:50～16:20	非営利組織 マネジメント論	上田 健作	125教室 (共通教育棟1号館2階)	16:30～17:00 125教室

### 3) 授業協議会

授業終了後に、授業担当教員と参加者によって授業協議会を開催した。

【テーマ】 「高等学校教員から見た大学の授業の授業形態・授業方法について」

- ① 各授業のねらいについて説明（授業担当教員）
- ② 意見交換

### (3) 結果

授業参観へは、高知県教育委員会から2名、高知県内の県立・私立高等学校から6名の教員の参加があり、参加後に行ったアンケートによると、全体を通して満足度の高い結果が得られたことがわかった。また、参加者からは「大学生が授業を受けている姿が見られたのがすごく新鮮でした」「県から10年目研修のひとつとして取り入れるなど、働きかけてもらってもいいくらいの価値がある」「高校側はもっと参加を」等の感想が寄せられたほか、「学生の様子も含め全体を見るため後ろの席にしてほしい」等の改善要望が寄せられた。

### <公開授業の様子>



### <授業協議会の様子>



## 2.1.4.5 学生面談に関わるFDの開催

### (1) 趣旨・目的

本学では、学生対応について「日頃から学生の様子を気にか  
け、気がかりを感じる学生がいた場合には、教職員が主体的に  
考え行動することによって支援をはじめられるようにする」こ  
とを基本理念としている。しかし、教職員に対応方法や対応範  
囲について迷いがあり、学生対応が遅れている現状があり、早  
期支援開始につながる取組が必要とされている。

以上の現状を踏まえ、本取組では、学生と面談を行うアドバ  
イザー教員を主な対象として、学生対応や面談方法等について  
研修を行うことで、早期支援開始につなげ、学生対応の質を向  
上させることを目的として実施する。

### (2) 取組内容

学生総合支援センター修学支援ユニットが主体となり、各学部  
のアドバイザー教員を主な対象として、以下のテーマと3つの大  
枠についての研修を行った。

テーマ：面談に必要な準備と心得－限られた時間で質の高い面談を行うために－

- 1) 学生との初めての面談に必要な準備・心得
- 2) 成績不振・欠席の多い学生との面談の留意点
- 3) トラブル回避のための留意点

**学生対応(面談) & Moodleに関する  
医学部FD研修会**

日時:平成29年4月28日(金) 18:00~19:00  
場所:医学部実習棟3階第2講義室  
講師・演題

学生総合支援センター 特任講師 坂本 智香 先生  
演題①:『面談に必要な準備と心得』  
(18:00~18:30)

大学教育創造センター 准教授 立川 明 先生  
演題②:『Moodleについて』  
(18:30~19:00)

対象:医学部教員  
【面談に必要な準備と心得】  
⇒アドバイザー教員等対象  
【Moodleについて】  
⇒ Moodleに興味をお持ち  
の教員対象

【Moodle(ムードル)】  
主に以下のことができる  
Webシステムです。  
・教材や資料を閲覧  
・試験の実施  
・課題の提出 等

★演題①に関しては、可能な限りアドバイザー教員の出席をお願い  
いたします(修業等の場合除く)。  
★演題②に関しては、現在オンライン学習支援システムをお使い  
の方、Moodleにご興味をお持ちの教員の出席をお願いします。  
もっと詳しく知りたい方は終了後個別の質問をお受けいたします。  
★各自該当の所属を選んで出席をお願いします。

主催:高知大学 学生総合支援センター/大学教育創造センター  
連絡先:学生課事務係(担当 野口) TEL:088-880-2252(内線22420)

### (3) 結果

開催日時及び参加人数は下記のとおりである。

参加者数：371名

対 象	日 時	場 所	参加人数		
			教員	事務	計
地域協働学部	4月12日 (9:00-9:30)	教授会会場	24	0	24
理工学部	4月12日 (13:00-13:30)	教授会会場	79	0	79
教育学部	4月12日 (13:30-14:00)	教授会会場	65	0	65
人文社会科学部	4月12日 (14:00-14:30)	教授会会場	58	4	62
農林海洋科学部	4月18日 (13:10-13:40)	教授会会場	65	0	65
事務系職員	4月27日 (15:30-17:00)	メディアホール (メディアの森6階)	6	15	21
医学部	4月28日 (18:00-18:30)	医学部実習棟3階 第2講義室	49	6	55
		計	346	25	371

FD講演後の質疑応答では、講演中に紹介した面談シートや、新入生とアドバイザー教員が別々のキャンパスに所属している場合の面談方法について質問が寄せられ、面談シートの改善点や、面談の環境整備のあり方について重要な示唆を得ることができた。

また、後日、学生のあらゆる疑問・悩みに対応する窓口として本学に設置している「学生何でも相談室」より、FD講演がきっかけとなり、アドバイザー教員の学生対応に関する問題が解決したとの報告があった。学生対応の状況は学部等により異なるため、今後も継続して学部教授会でのFD講演を企画し、学生対応の心構えも含めた有用な情報を発信し続けていくことの必要性を強く感じた。

#### 2.1.4.6 外部講師によるFD「大学・高校教員のための協同学習ワークショップ」の開催

##### (1) 趣旨・目的

アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）への関心が高まり、日々の実践においても、以前よりも活動性の高い授業が実施されている。本研修は、高知県教育委員会の後援により、創価大学教育学部教授の関田一彦氏を講師として迎え、“アクティブ・ラーニング”にチャレンジした経験がある教員を主な対象に、参加者がそれを支える基礎理論としての協同学習の考え方や方法を学び理解し、自身の教授活動で実施できるようになることを目的として実施する。

## (2) 取組内容

- 1) 日 時 平成30年3月8日(木) 10:00~17:00
- 2) 場 所 高知大学朝倉キャンパス 共通教育棟210教室
- 3) 対 象 高知大学教員、SPOD加盟校教員、高知県内の高等学校教員
- 4) 講 師 関田 一彦氏(創価大学 教育学部 教授)

## 5) テーマ

主なテーマは以下のとおりである。

- ・アクティブ・ラーニングの視点
- ・協同学習とグループ学習
- ・ジョンソンたちの協同学習の定義
- ・自己評価と相互評価
- ・グループ活動の効果を阻む潜在的な障壁
- ・フリーライダーを抑えるアプローチ

## (3) 結果

ワークショップは当日の参加者の経験や関心を踏まえながら柔軟な展開で進行し、全体を通して協同学習を行いながら協同学習について学んだ。

研修後、参加者12名(高知大学9名、高等専門学校1名、高等学校2名)にアンケートを行った結果、ワークショップが自分の業務に活かせる内容であったかの問いに「そう思う」と答えた人数が11名、「どちらかといえばそう思う」と答えた人数が1名であり、参加者全員が肯定的な回答をしていた。

また、ワークショップを通しての気づきについて(自由記述)では、下記のコメントが寄せられた。

設問：本日のワークショップには、どんな「気づきや学び」がありましたか？

(印象に残っている点、覚えておきたいこと、参加しての成果や得たこと等)

協同学習とはどのようなものかについて、具体的に体験しながら学ぶことができ、とても有意義であった。今後、自らの授業のどの場面で今回学んだ内容を活かすことができるかを考えながら今回のワークショップの内容を振り返ってみたい。
明日にでも使えるテクニックを学べました。
メンバーからの意見や議論の中で自分の考えをさらに発展させることができた。さらに深い問いが芽生えた点、協同学習を実感できた。班間の学びの差をどのように扱っていくか考えたい。
グループ学習と協同学習は違う、ということからはじまり、いろいろ気づきがありました。今後、自分の授業にとり入れてみたいことがありました。楽しい一日でした。
学び甲斐というわかりやすい表現で協同学習を捉えること。体験的に学べたこと。
ペアやグループでの活動のすすめ方。

「学びに向かう力」は、自分が大学教育の中で学生に身につけてもらいたい力はこれだったのだと改めて思いました。また今までは、学習目標のみ設定していたので、これからは態度目標も設定して、授業設計を考えていこうと思います。

授業で使えるTipsがあり、有用であった。同じTBLの実践者と交流でき、自信を深めることができ、改善点も明らかになった。

協同学習といえるほどの授業はしていませんが、これからすぐにでも活用できそうなことを学ぶことができたように思います。課題（適切な選択）、進行（時間配分等）、勉強になりました。ありがとうございました。

協同学習とグループ活動のちがいを。自分が行ってきたグループワークは協同学習となっていなかったことの気付きと、どこを改善したらよいかのヒントをいただき、すぐに授業で実践させていただきたいと感じました。

タイムマネジメントの重要性に気づきました。

<ワークショップの様子>



## 2.1.4.7 高知大学全学FDフォーラム2018の開催

### (1) 趣旨・目的

高知大学全学FDフォーラム2018は、「教育の内部質保証体制の構築にむけて－内部質保証ガイドラインと教学IR－」と題し、濱名篤氏（関西国際大学学長、中央教育審議会大学分科会制度・教育改革ワーキンググループ委員）を迎え、「教育の内部質保証ガイドライン」に関わる政策動向について講演いただくとともに、本学のAP事業のうち、特に教学IRに関する取組について報告を行い、内部質保証のシステム構築に向け議論を深める。

### (2) 取組内容

- 1) 日 時 平成30年1月31日（水）13：30～16：50
- 2) 場 所 高知大学朝倉キャンパス 共通教育棟1号館127教室
- 3) 対 象 本学教職員
- 4) 講 師 濱名 篤 氏（関西国際大学学長、中央教育審議会大学分科会制度・教育改革ワーキンググループ委員）
- 5) スケジュール
  - 13：30 開会
  - 13：40 基調講演 濱名 篤 氏  
「教育の内部質保証をめぐる政策動向」
  - 14：40 AP事業報告Ⅰ 藤田 尚文（理事（教育・附属学校園担当））  
「卒業時における質保証のための教学IR」
  - 15：10 休憩
  - 15：25 AP事業報告Ⅱ 小島 郷子（副学長（教育・附属学校園担当）大学教育創造センター長）  
「高知大学における質保証の取組」
  - 15：40 パネルディスカッション  
パネラー：濱名 篤 氏、藤田 尚文、小島 郷子【IR関係者】  
進 行：塩崎 俊彦（大学教育創造センター）
  - 16：40 閉会挨拶

高知大学全学FDフォーラム2018

2018年 1/31(水) 13:30~16:50

※ 同席・物部キャンパスへ 遠隔配信します。

会場：実習棟3階第2講義室

講師：濱名 篤氏 (はなな あつし)  
関西国際大学 学長  
中央教育審議会 委員

プログラム

- 開会 (13:30~13:40)
- 基調講演 (13:40~14:40)  
「教育の内部質保証体制の構築にむけて(Ⅰ)」  
講師 濱名 篤氏
- AP事業報告Ⅰ (14:40~15:10)  
「卒業時における質保証のための教学IR」  
講師 藤田 尚文 (高知大学理事(教育・附属学校園担当))
- 休憩 (15:10~15:20)
- AP事業報告Ⅱ (15:20~15:40)  
「高知大学における質保証の取組」  
講師 小島 郷子 (高知大学副学長(大学教育創造センター長))
- パネルディスカッション (15:40~16:40)  
パネラー 濱名 篤 (関西国際大学 学長)、藤田 尚文 (高知大学理事(教育・附属学校園担当))、小島 郷子 (高知大学副学長(大学教育創造センター長))  
進行 塩崎 俊彦 (高知大学大学教育創造センター)
- 閉会挨拶 (16:40~16:50)

お申込みはこちらまで ⇒ [y-spod@kochi-u.ac.jp](mailto:y-spod@kochi-u.ac.jp)

### (3) 結果

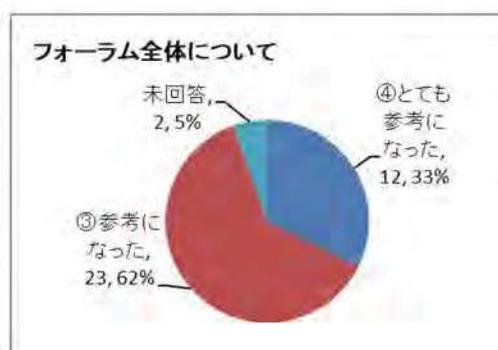
本フォーラムへは、本学の教員32名、職員39名、学外者1名の計72名が参加した。基調講演では、大学教育の内部質保証をめぐる政策動向と関西国際大学における質保証の取組が紹介され、アセスメント・プランの策定に関して、何をどのような尺度を用いて評価するかについて学内議論の必要性が説かれた。また、教学IRの意義について、多様な学生を受け入れて、どのように教育するかを検討するための材料となるとの指摘があった。GPAの考え方については、本学が採用するGPAの特色について指摘があり、100点満点で評価することとの連動を捨象して検討することが説かれた。

また、パネルディスカッションでは、基調講演後に行った本学のAP事業報告に基づき、1) 本学のAP事業と内部質保証の取組について、2) 教学IRの活用についての二つの論点から濱名篤氏よりコメントをいただき、議論を行った。

本学の内部質保証については、一元的な尺度ではなく、どのように多面的な観点から学生のパフォーマンスを評価するかについて議論がなされ、教学IRについては、学生データの利用の可能性と活用の事例について議論が交わされた。

フォーラム終了後に参加者へ実施したアンケート調査では、フォーラム全体について、アンケート回答者37名のうち、35名が「とても参考になった」、「参考になった」と回答しており、特に参考になったものとして、基調講演と回答した人が多かった。

選択肢	回答数	割合
④とても参考になった	12	32.4%
③参考になった	23	62.2%
②どちらともいえない	0	0.0%
①参考にならなかった	0	0.0%
未回答	2	5.4%
合計	37	100%

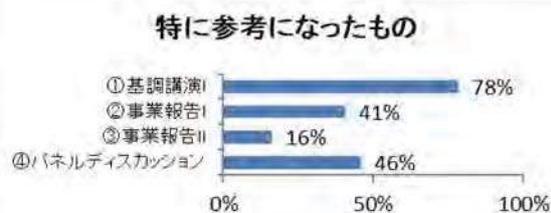


#### 「フォーラム全体について」回答理由

内部質保証についてしっかりした話を聞いたのは初めてであったから。
濱名学長の講演では、現在の教育行政の動向がよく分かり、本音トークなどもあってとても参考になった。
教育の質保証に関する今後の方向性と関西国際大学での活用事例、教学IRの活用方法（何を調べてどう活かすのか）、AP事業実施内容など、日頃お伺いできる機会がないので、参考になり、今後の取組の方向性について、考えることができた。
現在の政策動向について理解できた。
AP事業に関する知識が深まった。

選択肢	人数	割合
①基調講演	29	78%
②事業報告 I	15	41%
③事業報告 II	6	16%
④パネルディスカッション	17	46%

※複数回答可

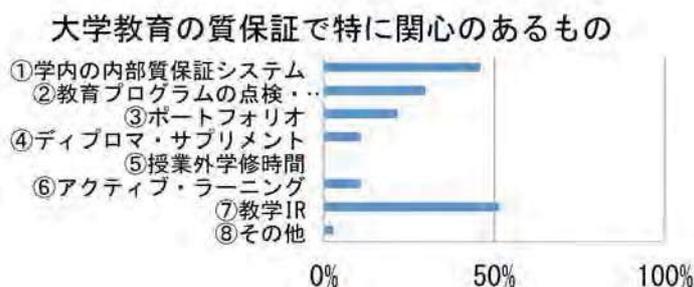


「特に参考になったもの」回答理由

①基調講演 ②事業報告 I ③事業報告 II ④パネルディスカッション ⑤その他

①	②	③	④	⑤	理由
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				成績データの分布から修学支援のためのヒントが満載であったから。
<input type="radio"/>					濱名学長の講演では、現在の教育行政の動向がよくわかり、本音トークなどもあって、とても参考になった。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		政策の方向性と具体的事例の組み合わせのバランスがよく、分かりやすかった。本学で実施していることについても AP 事業や教学 IR など日常業務のみで知ることができないことまで、知ることができ、参考になった。
			<input type="radio"/>		前半の報告は学生の教育効果を意識したものか、学外の目を意識したものかわかりにくい部分もあったが、パネルディスカッションではそれがすっきりわかりやすくなった。内容も具体的であった。
	<input type="radio"/>				教学 IR のデータに予想外の事柄が多く、大変参考になった。
<input type="radio"/>			<input type="radio"/>		外部の識者による高知大学の取り組みの問題点の指摘が有益であった。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				具体的な IR の結果を聞いた。
<input type="radio"/>			<input type="radio"/>		濱名先生の本質的な指摘により本学の取組の「まだまだ感」が浮き彫りにされ、問題点に気づかされた。
				<input type="radio"/>	問題点、目指すべきもの等討論により理解が深まった。

また、大学教育の質保証で特に関心のあるものについての質問では、数学IRへの関心が最も高く、次いで学内の内部質保証システムについての関心が高かった。

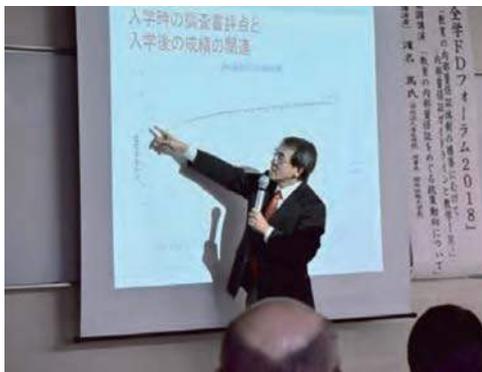




関西国際大学学長 濱名 篤 氏



会場の様子



藤田尚文理事



小島郷子副学長



パネルディスカッションの様子

#### 2.1.4.8 全学共通授業アンケート「Reflective Monitoring」の作成

##### (1) 趣旨・目的

本学における教育の質保証の基盤となる個々の授業科目について、学生の授業に関する振り返りを促し、それに基づいた教員による授業改善を図るために、全学共通の授業アンケートを作成する。また、既存の2種類のアンケート様式と共にe-ポートフォリオに格納し、授業担当教員が授業の特性等に応じて自由にアンケートを実施できる環境を整備する。

e-ポートフォリオに格納したアンケートは以下のとおり。

- ① Reflective Monitoring（新規）
- ② 授業評価アンケート（授業最終回に行うアンケート、共通教育実施委員会のフォーマットによる）
- ③ 授業改善5週目・15週目アンケート（アクションプランによる授業改善のためのアンケート、共通教育実施委員会のフォーマットによる）

全学共通授業アンケートを実施することで、以下のようなことが期待される。

- 1) 学生は、個々の授業における到達度・理解度などについて振り返りを行うことで、ディプロマ・ポリシーの到達度、身につけた知識・能力・スキルなどについて自己評価を行い、次の学びに向けた目標をたて実行する機会とすることができる。
- 2) 教員は、学生のモニタリングを通じて、個々の授業について振り返り、授業改善を行うことができる。
- 3) 学部・学科・コースでは、モニタリングの結果を、ディプロマ・ポリシーを達成するためのプログラム・レビューの基本データの一つとし、カリキュラム等の改善に利用することができる。

##### (2) 取組内容

全学で実施されている授業アンケートを調査し、新たに全学共通様式を作成した。新たに作成したReflective Monitoringの設問構成は以下のとおり。

- 1) ～ 8) : 全学共通項目
  - 9) ～ 11) : 各授業の到達目標の達成度（シラバスに示された到達目標の達成度についての設問）
  - 12) ～ : 授業担当者独自の設問
- ※ 1) 3) 以外は、記述欄の有無を選択できる。

なお、Reflective Monitoringの回答結果は、受講生の授業の振り返りと担当教員の授業改善のために、教員と学生で共有するものとし、e-ポートフォリオ上で自動集計されグラフで表示することとした。

## Reflective Monitoring

- 1) あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？（カッコ内は週 2 回の授業の場合）  
⑤ 15 回（30 回）出席 ④ 13 回～14 回（26 回～29 回）出席  
③ 11 回～12 回（22 回～25 回）出席 ② 10 回（20 回～21 回）出席 ① その他
- 2) この授業では、あらかじめ示された授業の到達目標や成績評価基準を意識して授業に取り組むことができましたか？  
⑤ 強くそう思う ④ そう思う ③ どちらともいえない ② そう思わない ① 全くそう思わない  
〔回答の理由〕
- 3) あなたはこの授業のために、1 回分の授業について、授業期間を通じて平均どのくらい授業外学修時間をとりましたか？  
（授業外学修時間には、授業の予習・復習時間、課題・レポートの作成時間、試験等のための学習時間、フィールドワークのための時間、グループワークのための打ち合わせの時間などがあります）  
⑦ 5 時間以上 ⑥ 4 時間以上～5 時間未満 ⑤ 3 時間以上～4 時間未満  
④ 2 時間以上～3 時間未満 ③ 1 時間以上～2 時間未満 ② 1 時間未満 ① 0 時間
- 4) あなたがこの授業のためにとった授業外学修時間は、授業内容の理解やスキル、技術の習得にとって適切なものでしたか？  
⑤ 強くそう思う ④ そう思う ③ どちらともいえない ② そう思わない ① 全くそう思わない  
〔回答の理由〕
- 5) あなたにとってこの授業の難易度はどの程度でしたか？  
⑤ とても難しかった ④ 難しかった ③ ちょうどよかった ② 易しかった ① とても易しかった  
〔回答の理由〕
- 6) この授業で使用された教科書や配付資料、Web 教材などは、あなたの理解を促進する上で効果的でしたか？  
⑤ 強くそう思う ④ そう思う ③ どちらともいえない ② そう思わない ① 全くそう思わない  
〔回答の理由〕
- 7) この授業では、受講生の理解を促進するために、授業方法や授業時間外に行う課題などについて工夫や配慮がなされていましたか？  
⑤ 強くそう思う ④ そう思う ③ どちらともいえない ② そう思わない ① 全くそう思わない  
〔回答の理由〕
- 8) この授業では、シラバスの到達目標に示された知識や技能、思考方法やスキルなどが身につき、総合的に満足できましたか？  
⑤ 強くそう思う ④ そう思う ③ どちらともいえない ② そう思わない ① 全くそう思わない  
〔回答の理由〕
- 9) あなたは、この授業の到達目標 1 「〇〇〇ができる」が達成できましたか？  
⑤ 強くそう思う ④ そう思う ③ どちらともいえない ② そう思わない ① 全くそう思わない  
〔回答の理由〕
- 10) あなたは、この授業の到達目標 2 「●●●ができる」が達成できましたか？  
⑤ 強くそう思う ④ そう思う ③ どちらともいえない ② そう思わない ① 全くそう思わない  
〔回答の理由〕
- 11) あなたは、この授業の到達目標 3 「□□□ができる」が達成できましたか？  
⑤ 強くそう思う ④ そう思う ③ どちらともいえない ② そう思わない ① 全くそう思わない  
〔回答の理由〕
- 12) （担当教員独自設問）

### (3) 結果

全学共通授業アンケートの実施状況は下記のとおりであった。

(平成29年度第2学期)

アンケート名	科目数	実施 教員数	履修人数 (延べ人数)	回答人数 (延べ人数)	平均回答率
Reflective Monitoring	10科目	6名	638人	263人	66.0% (100%~4.8%)
授業評価 アンケート	1科目	1名	71人	69人	97.2%

平成29年度第2学期に新様式を開発しe-ポートフォリオに実装したため、実施教員数は少なかったが、実施者からは、スマートフォンでも回答できることや、リアルタイムで集計結果が見られること等について、好意的な意見をもらうことができた。

今回授業アンケートの項目と実施方法の見直しを図り、全学共通の様式を作成したことにより、学生の授業評価を共通の基盤に基づいて可視化していく環境が整った。また、e-ポートフォリオに実装したことにより、教員は、従来アンケート集計に費やしていた時間の短縮を図ることができ、学生は、授業の振り返りが容易となり、大学全体としては、授業改善の意見が全学共通の様式で検証できるようになったことが成果である。

#### 2.1.4.9 授業科目における成績評価分布の公表

##### (1) 趣旨・目的

授業科目における成績評価分布を公表することで、学生は学修の到達度や成果について客観的に自己評価を行うことが可能となる。また、公表による成績評価の透明性、公平性の担保及び厳正なる成績評価の推進により、教育の質の保証と向上が期待できる。

##### (2) 取組内容

平成29年度以降に開講され、成績評価が行われた全授業科目のうち、最終受講者（成績評価者）数が10名以上であった授業科目を対象とし、成績評価分布を公表した。

ただし、卒業論文・卒業研究及び非常勤講師が担当する専門教育の集中講義は、公表対象科目から除外した。平成29年度第1学期の学生への成績公開日（平成29年8月25日(金)）に合わせて公表し、以後、学期ごとの成績公開日に公表する。

公表項目は、公表対象科目における成績評価（秀・優・良・可・合・不可）ごとの人数内訳、評価平均点及び標準偏差であり、e-ポートフォリオ上に下記のとおり掲載した。

また、学生に対し成績評価の透明性及び公平性を担保するため申合せ「公正な成績評価の実施に向けて」を制定し、成績評価の目安を明らかにした。

#### <教員用ページ>

- ・アドバイザー学生（学部生）が履修した上記公表対象科目に該当する全授業科目の成績評価分布、評価平均点及び標準偏差
- ・教員自身が担当した授業科目の成績評価分布、評価平均点及び標準偏差

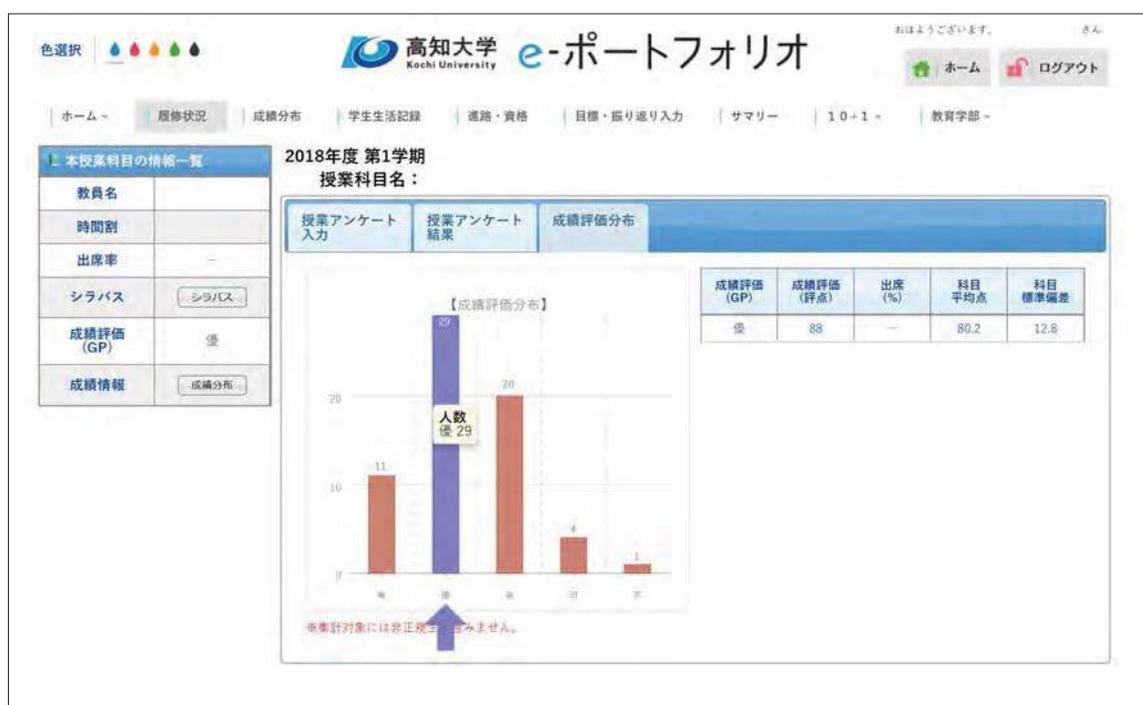
## <学生用ページ>

学生自身が履修した上記公表対象科目に該当する全授業科目の成績評価分布、評価平均点及び標準偏差

### (3) 結果

平成29年度第1学期の成績公表時より、学生は、自身の成績に加え、クラスの平均点や成績分布なども見るできるようになり、振り返りや次の学期の目標を考える上での良い指標となった。また、教員は授業担当科目の自己点検やアドバイザー・学生の面談の資料として活用できるようになり、意識改革の一助となったと思われる。更に、各学部長、各学務（教務）委員長にも開講部局の成績評価分布一覧を開示し、組織的に厳正なる成績評価を推進していく体制を整えた。

## <e-ポートフォリオ成績評価分布画面>



## 2.2 II. 多面的評価指標を外部と共同開発する

### 2.2.1 目的

本学は達成すべき教育目標として、第3期中期目標・中期計画に「総合的教養教育の実現により、各学部・学科等のディプロマ・ポリシーに従いそれぞれの専門性を身につけるとともに、分野横断した幅広い知識・考え方等が学生自身の内部で統合され、世の中に働きかける汎用的な能力にできる人材の育成」を掲げている。AP事業では、本学が掲げるディプロマ・ポリシーに沿った人材育成ができていないかを検証するため、①卒業段階でどれだけの力を身に付けたのかを、多面的に評価する仕組みの構築、②学生の学修成果をより目に見える形で社会に提示するための手法の開発、を行うことを目的としている。平成29年度は、①においては指標の試行モデルの実施及び分析、②においては再構築した学修ポートフォリオ（e-ポートフォリオ）の運用拡充を目標に掲げ、下記の取組を行った。

### 2.2.2 主な取組内容

#### (1) 学修ポートフォリオ（e-ポートフォリオ）の開発及び運用開始

昨年度開発を行ったe-ポートフォリオシステムの基本機能について、平成29年度から全学的に運用を開始した。なお、本年度は新たに①学部独自機能、②全学共通授業アンケート機能、③ポートフォリオサマリー機能の拡充を図り、学生・教員にとってより利用しやすいツールに改良した。

本年度のe-ポートフォリオシステム利用者数は1,870人（実人数）であり、利用率は37.8%であった。また、8月にe-ポートフォリオの機能性・操作性について学生の意見を聴く学生モニター会議を開催し、実際に使用しながらインタビューを行い、今後の運用や開発のための材料を得た。

#### (2) プレ・ディプロマ・サプリメントの作成

ディプロマ・サプリメントの開発に先立ち、学生の日常的な振り返りとPDCAサイクルを自律的に回せるようになることを支援するため、e-ポートフォリオのサマリーという位置づけでプレ・ディプロマ・サプリメントを開発した。

e-ポートフォリオ内にプレ・ディプロマ・サプリメント（「ポートフォリオサマリー」と称する。）を作成し、学生自身の所属情報、学位授与の要件、成績（修得単位数の推移と成績分布、GPA）、TOEIC等の点数、本学が推進する地方創生推進士の資格取得のための科目の単位修得状況、大学生基礎力レポートの結果、10+1の能力の自己診断結果、課外活動の記録等が集約されたページを閲覧・印刷できるようにした。これにより、学業等における各学期の振り返り、各学期の目標設定等を円滑にするための学修成果の可視化が可能となった。

#### (3) 多面的評価指標開発研究会の開催

本学教員、企業及び高等学校関係者等で構成する多面的評価指標開発研究会を、平成29年9月（第3回）と平成30年2月（第4回）に開催した。

開発した多面的評価指標について、企業等の外部の評価作成者とともに検討を行ったことで、大学の評価軸と社会の評価軸を照らし合わせて、評価について検証し、社会で求められる能力の検証のための指標へとチューニングすることができた。その際、地域・企業関係者からは、評価目的や評価指標について学生に周知し、評価について教員と意見交換をするための面

談を設定することが求められ、リフレクション面談実施要領の策定（2.2.4.6参照）とeポートフォリオ内に構築した面談記録様式の変更を行った。

#### （４）多面的評価指標の試行モデルの実施

多面的評価指標の試行的モデルとして平成28年度に開発した「セルフ・アセスメント・シート」による調査を平成29年4月に実施し、回答率は1年生93%、3年生59%であった。また、セルフ・アセスメント・シートの妥当性、信頼性について検証するため、因子分析を行ったところ、「対課題力」「表現力・コミュニケーション力」「協働実践力」「対自己力」の4因子構造が見られ、セルフ・アセスメント・シートが本学が掲げる10+1の能力に対応していることが確認できた。本分析結果と多面的評価指標開発研究会の意見を基に、多面的評価指標の改良を行い、ループリックモデルを開発した。

#### （５）外部アセスメントテストの実施 大学生基礎力レポート

平成29年4月のオリエンテーション時に、全学の1年生と3年生を対象に、ベネッセiキャリア社の大学生基礎力レポートを実施し、1,693名（1年生1,055名、3年生638名）が受検した。翌5月には、全キャンパス（朝倉・岡豊・物部）において、アセスメント結果の返却と解説会を実施し、自己の「強み」と「弱み」を把握するための振り返りを行い、今学期の目標や卒業までの長期目標をeポートフォリオに記入し、自らの成長への動機付けを行った。

また、本アセスメントテストは本学が作成したセルフ・アセスメント・テストの妥当性・有効性の検証にも活用している。詳細は2.3.4.6「学修成果と学生生活のデータの分析及び検証」に記載しているが、よりの確で有効な質保証を実施するためには、社会と同じ物差しで学修成果を示すことが求められる。そのため、内部アセスメントだけでなく外部アセスメントを実施し、絶えずアセスメントの妥当性・有効性の検証を行っていく必要がある。

#### （６）10+1の能力に関する到達度評価の実施に向けた体制整備

ディプロマ・ポリシーに基づいて示された10+1の能力に関する到達度評価を実施するために、10+1の能力の評価方法を決定し、実施要項を策定することにより、平成30年度からのパフォーマンス評価の実施に向けて全学的な体制整備を行った。

また、併せて学生のメタ認知促進のためにリフレクション面談実施要領を定め、全学部でeポートフォリオを用いたリフレクション面談を実施する体制を整えた。

### 2.2.3 成果

①卒業段階でどれだけの力を身に付けたのかを、多面的に評価する仕組みの構築、②学生の学修成果をより目に見える形で社会に提示するための手法の開発、の2つの取組で、ディプロマ・ポリシーに沿った人材育成の検証を行うこととしているが、①の取組として、平成29年度は、平成28年度に地域・企業関係者や高等学校関係者との意見交換を通じて開発した多面的評価（セルフ・アセスメント・シート）を実施し、学生の自己評価の実態を把握した。そして、この多面的評価と外部テストの分析結果を基に、地域・企業関係者や高等学校関係者との議論を重ね、新たにループリック評価指標を開発した。この指標は次年度春に施行し、分析を行う予定である。

また、②の取組として、eポートフォリオの運用を開始し、上記の学生による自己評価と次年度から開始する教員による他者評価、外部テストの結果等を可視化し、学生面談等での指導

に利用する準備を進めた。加えて、利用率向上のために、e-ポートフォリオの学生向け説明会を開催し、新入学生についてはほぼ全学生がe-ポートフォリオにログインし利用した。更に、これらのアセスメントの結果や4年間の学修成果を集約し、簡便な形式で社会に提示するためのディプロマ・サプリメントを開発する前段階として、e-ポートフォリオに蓄積された学生の記録をまとめたプレ・ディプロマ・サプリメントを作成した。

さらに、10+1の能力に関する到達度評価実施要領及びリフレクション面談実施要領を定め、①と②の取組を全学で確実に実施していくための体制を整えた。

## 2.2.4 具体的な取組内容

### 2.2.4.1 学修ポートフォリオ (e-ポートフォリオ) の開発及び運用開始

#### (1) 趣旨・目的

学生の入学から卒業まで4（6）年間の学修のプロセスと成果を蓄積し、学生が自らの学びについて振り返り、次の進路に向けて「大学における学びの統合」を図ることを目的として、平成28年度に「e-ポートフォリオ」システムの開発を行った。平成29年度は機能拡充の年と位置付け、学部独自機能開発に重点を置く。

#### (2) 取組内容

本年度は、4月からの試行期間を経て、5月中旬に全学本格運用を開始した。下記3点の機能を追加・拡充したことにより、学生・教員にとってより利用しやすいツールとなった。

- 1) 学部独自機能
- 2) 全学共通授業アンケート機能 (2.1.4.8参照)
- 3) ポートフォリオサマリー機能 (2.2.4.2参照)

#### (3) 結果

本年度は各学部等の独自機能の開発・運用として、教育学部と地域協働学部の機能の開発を重点的に行った。主に、教育学部では「履修カルテ」、地域協働学部では「地域協働マネジメント力評価」及び「学びの記録（最終成果物の保存）」の項目を開発した。

8月には学生モニター会議を実施し、実際にe-ポートフォリオを使用しながら学生へインタビューを行い、今後の運用や開発のための材料を得た。

また、教員や学生に対して使用方法等の説明会を行い利用の促進を図るとともに、マニュアルを作成し配布した。

e-ポートフォリオの利用率は、説明会参加率が高かった1年生の割合が高く、全体では37.8%であった。本年度、授業アンケート機能やポートフォリオサマリー機能を開発し、説明会やリーフレットの作成を行ったため、今後、他学年の利用率も高くなることが期待できる。

#### <学生利用率（ログイン率）>

学部等	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
							利用者数	学生数	割合
人社・人文	50.4%	49.1%	34.1%	6.4%	-	-	402人	1,226人	32.8%
教育	71.0%	75.6%	54.0%	13.4%	-	-	301人	606人	49.7%
理工・理	86.7%	49.2%	53.7%	11.8%	-	-	535人	1,130人	47.3%
医	69.0%	11.6%	15.6%	17.4%	3.5%	0.9%	203人	956人	21.2%

農林・農	67.6%	41.9%	38.5%	7.3%	-	-	305人	782人	39.0%
地域	69.2%	38.3%	41.9%	-	-	-	94人	187人	50.3%
TSP	50.0%	58.8%	70.6%	6.7%	-	-	30人	63人	47.6%
計	68.1%	44.3%	39.7%	10.5%	3.5%	0.9%	1870人	4,950人	37.8%

<学部独自機能（教育学部一部抜粋）>

<学部独自機能（地域協働学部一部抜粋）>

表示ボタンをクリックすると、以下の指標のポップアップが表示される

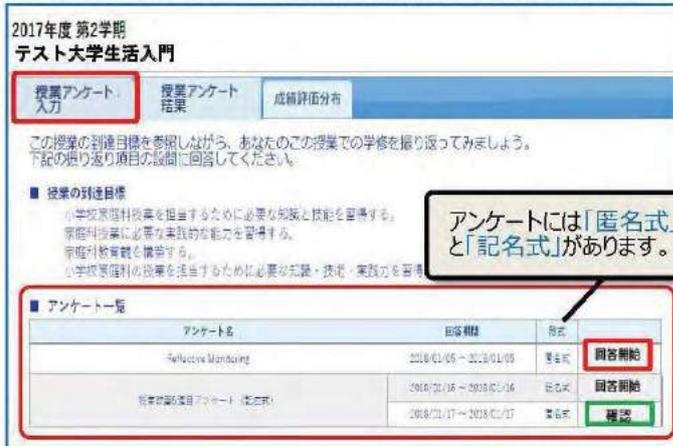
<全学共通授業アンケート機能>

1. 授業アンケートの回答方法 (PC・タブレット版)

- (1) ログイン後のトップページより「履修状況」を選択後、「履修登録科目一覧」から回答希望の授業科目の「アンケート」を選択します。



- (2) 「授業アンケート入力」画面の「アンケート一覧」より、回答希望のアンケートの「回答開始」を選択します。



アンケートには「匿名式」と「記名式」があります。

**【e-ポートフォリオへのログイン方法】**

- 1. 学内からの場合**  
「高知大学公式ホームページ」→「教職員・学生専用」→「学内のページ」→「e-ポートフォリオ【学生用】」  
※学内アクセス用よりアクセスし、全学認証 ID・PW を入力し、「ログイン」ボタンを選択します。
- 2. 学外からの場合**  
「高知大学公式ホームページ」→「教職員・学生専用」→「学外から e-ポートフォリオ (学生用) へアクセスする場合はここをクリック」よりアクセスし、全学認証 ID・PW を入力し、「ログイン」ボタンを選択します。
- 3. e-ポートフォリオの URL からアクセスする場合**  
学生用ログイン URL :  
<https://fdas.kochi-u.ac.jp/Study-portfolio/>

**【参考】**

**回答開始**  
回答期間中のアンケートへの回答ができます。また、入力済みの回答内容の確認や変更ができます。

**確認**  
回答期間の終了したアンケートの回答内容が確認できます。回答内容の変更はできません。

- (3) 各設問に回答後、最後に①「登録」を選択します。



※サンプル図

**【授業アンケートの注意点】**

アンケートには「匿名式」・「記名式」があります。記名式の場合、授業担当教員は履修生の回答・学籍番号・氏名の確認が可能です。ただし、収集した個人情報は、授業改善のために利用します。前述以外の用途には使用しません。

## 2.2.4.2 プレ・ディプロマ・サプリメントの作成

### (1) 趣旨・目的

高知大学では教育の質保証の取組として、卒業時に学びの履歴書“ディプロマ・サプリメント”をもって社会に質保証を担保できるシステムを構築することを目標に掲げ、卒業生全員にディプロマ・サプリメント（現在本学において名称について検討中）を交付することを決定した。

これに伴い、在来生に対しては、卒業時における自身の到達目標について、在学中から強く意識させることが重要と考え、学生のこれまでの学修記録や成果等を可視化し、学業等における各学期の振り返りや次学期への目標の設定等を円滑に行えるよう支援するために、e-ポートフォリオ内にプレ・ディプロマ・サプリメント（以下「ポートフォリオサマリー」と称する。）を構築する。

### (2) 取組内容

e-ポートフォリオ内に蓄積している学生情報から、以下の項目を一画面に集約し、ポートフォリオサマリーとして所定の様式により表示した。成績やセルフアセスメントの結果をグラフ等で表示させ、直感的にわかりやすくなるように工夫した。

表示項目は下記のとおりである。

#### <表示項目>

- ・ 学生情報（氏名・学籍番号・所属学科・コース等）
- ・ 取得予定学位
- ・ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）
- ・ 学位授与の要件（卒業要件）
- ・ 評語
- ・ 成績分布
- ・ GPA・修得単位数の推移（グラフ）
- ・ 通算GPA
- ・ 高知大学が提唱する「身につけてほしい10+1の能力」到達度（各能力値をレーダーチャート表示）
- ・ セルフアセスメントの結果
- ・ パフォーマンス評価の結果
- ・ 大学生基礎力レポートの結果（各経験値をレーダーチャート表示）
- ・ 地域関連科目修得単位数
- ・ 地方創生推進士育成科目修得単位数
- ・ 外国語能力試験等の成績
- ・ 正課外活動振り返り

<ポートフォリオサマリー画面>

ポートフォリオサマリー

ポートフォリオサマリーは、eポートフォリオのデータを基に学修や活動の履歴をまとめたものです。従って、大学が証明する成績等の他、自己の振り返りを基にした自己診断結果、課外活動の記録等も含まれます。自分の経験や強みを活かし、あるいは弱みを克服するために、今後の履修やキャリアを意識した活動の助けとして利用していただくために作成されるものです。

1. 学生情報

(1) 氏名	
(2) 学籍番号	
(3) 所属学科・コース等	

2. 取得予定学位

(1) 学位名	
---------	--

3. 学位授与の要件

(1) 学位授与の方針	<p>【知識・理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多文化し複雑化するグローバル社会の諸相に対応する上で必要十分な、言語・文化・社会に関する専門的知識を身につけ、その知識を局所的なミクロレベルから全体的なマクロレベルに至る連続体として理解し、活用できる。</li> </ul> <p>【専門分野に関する知識】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. グローバル社会の諸相に対応する上で必要十分な、言語・文化・社会に関する専門的知識を修得している。</li> <li>2. 得られた知識を局所的なミクロレベルから全体的なマクロレベルに至る連続体として理解し、活用できる。</li> </ol> <p>【人類の文化・社会・自然に関する知識】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人文・社会・自然の各分野にわたる幅広い教養を修得している。</li> <li>2. 幅広い教養を専門分野の知識と結びつけることができる。</li> </ol> <p>【思考・判断】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多角的価値に基づく複合体としての文化・社会における言語・文化・社会への深い洞察力和人文社会科学の領域横断的・複層的な思考力を涵養し、グローバル社会における諸問題を批判的に考察し、主体的に判断する力を身につけ、活用できる。</li> </ul> <p>【論理的思考力】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 多角的価値に基づく複合体としての文化・社会における言語・文化・社会への深い洞察力を修得している。</li> <li>2. 人文社会科学の領域横断的・複層的な思考力を修得し、活用することができる。</li> </ol> <p>【課題探求力】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. グローバル社会における諸問題を批判的に考察することができる。</li> <li>2. グローバル社会における諸問題について主体的に判断する力を修得し、それを活用することができる。</li> </ol> <p>【活用・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国語の運用能力を身につけ、異文化および自文化への理解を深め、人文社会科学の領域横断的な思考を通じて獲得した成果や意義を、口頭・文章あるいは多様なメディアによって表現する能力を身につけ、活用できる。</li> </ul> <p>【語学・情報に関するリテラシー】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 外国語の運用能力を修得している。</li> <li>2. 異文化および自文化への深い理解力を修得している。</li> </ol> <p>【表現力】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 獲得した成果や意義を、口頭・文章あるいは多様なメディアによって表現する能力を修得し、それを活用することができる。</li> </ol> <p>【コミュニケーション力】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日本語あるいは外国語で他者と意思疎通を図ることができる。</li> </ol> <p>【関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバル社会における諸問題に関心を持ち、局所的なミクロレベルから全体的なマクロレベルに至る多様な視点から比較・検討することで課題解決を実践する態度を身につけ、活用できる。</li> </ul> <p>【協働実践力】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 他者との協働によって様々な問題について多様な視点から比較・検討し課題解決の方法を探ることができる。</li> </ol> <p>【自律力】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. グローバル社会における諸問題について主体的に関心をもつことができる。</li> <li>2. 学習のプロセスを意識し、計画・実行にあたってみずからマネジメントすることができる。</li> </ol> <p>【倫理観】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 文献・資料の引用など研究に際しての倫理的ガイドラインに即して研究する姿勢を身につけている。</li> </ol> <p>【総合・働きかけ】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 特定の課題について「問い」をたて、資料を批判的に検討することによってその論理的な「答え」を見出すことができる。</li> <li>2. 特定の課題に関する「問い」と「答え」を「言葉」によって論理的に表現することができる。</li> </ol>
(2) 学位授与の要件	<p>【初年次科目 (12単位)】</p> <p>大学基礎論、課題探求実践セミナー、大学英語入門、英会話、情報処理、学問基礎論</p> <p>【教養科目 (28単位)】</p> <p>人文、社会、生命・医療、自然の4分野のうち3分野以上から選択 (ただし、「スポーツ科学講義」「スポーツ科学実技」は合計4単位を限度)</p> <p>外国語分野 (ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語 (朝鮮語)、スペイン語から1外国語を4単位必修)</p> <p>キャリア形成支援分野は6単位を限度</p> <p>【ゼミナール科目 (16単位)】</p> <p>ゼミナールIの2単位、ゼミナールIIの2単位、ゼミナールIIIの2単位、ゼミナールIVの2単位、卒業論文・ゼミナールV・VIの8単位</p> <p>【プラットフォーム科目 (30単位)】</p> <p>基礎科目Iリサーチリテラシー2単位必修、A群 (人文科学分野) 及びB群 (社会科学分野) からそれぞれ2単位を含み6単位以上</p> <p>外国語科目14単位以上</p> <p>発展科目「グローバル社会と地域」2単位必修、その他の発展科目6単位以上</p> <p>【選択科目38単位】</p> <p>コース専門科目38単位 (プラットフォーム科目および他コースの専門科目又は他学部の専門科目 (上限8単位) から14単位まで修得を認める) (合計124単位)</p>

4.学修成果

(1) 評語	(2) 成績分布
秀 90点以上 (GP 3.5以上)	秀 20 単位
優 80点以上 (GP 2.5以上)	優 28 単位
良 70点以上 (GP 1.5以上)	良 18 単位
可 60点以上 (GP 0.5以上)	可 4 単位
	合 0 単位
	認 0 単位



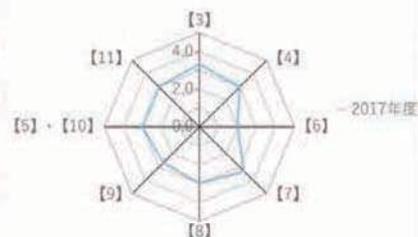
(4) GPA	通算 (全科目) GPA ※不可含む	2.6
	通算 (全科目) GPA ※不可含まない	2.6

(5) 高知大学が提唱する「身につけてほしい10+1の能力」到達度

【1】専門分野に関する知識 … (5)-1 該当科目によるGPA  
 【2】人類の文化・社会・自然に関する知識 … (5)-1 該当科目によるGPA  
 【3】論理的思考力 } … (5)-2 セルフアセスメント  
 【4】課題解決力 }  
 【5】語学・情報に関するリテラシー … (5)-1 該当科目によるGPA (5)-2 セルフアセスメント  
 【6】表現力 }  
 【7】コミュニケーション力 } … (5)-2 セルフアセスメント  
 【8】協働実践力 }  
 【9】自律力 }  
 【10】倫理観 }  
 【11】以上10の能力を統合し、周囲の人や社会に働きかける力(統合・働きかけ) … (5)-2 セルフアセスメント (5)-3 パフォーマンス評価

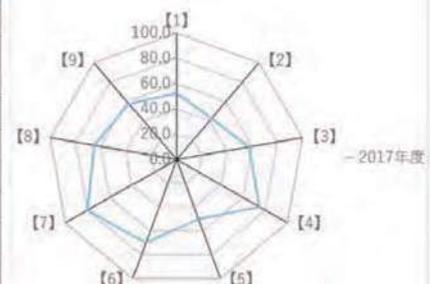
(5)-1 該当科目によるGPA ( )		不可含む	不可含まない
【1】専門分野に関する知識	専門科目 (要卒科目)	-	-
【2】人類の文化・社会・自然に関する知識	共通教育科目 (要卒科目)	-	-
【5】語学・情報に関するリテラシー	外国語科目 (初年次・教養)	-	-

(5)-2 セルフアセスメント	2017年度
【3】論理的思考力	3.3
【4】課題解決力	3.0
【6】表現力	2.0
【7】コミュニケーション力	3.3
【8】協働実践力	3.0
【9】自律力	2.7
【5】・【10】リテラシー・倫理観	3.0
【11】統合・働きかけ	3.0



(5)-3 パフォーマンス評価					
【11】統合・働きかけ					
能力評価指標	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
特定の課題について「問い」をたて、資料を批判的に検討することによってその論理的な「答え」を見出すことができる。	自ら問いを設定することができなかった。設定した問いを自ら持続的に探求することができなかった。	何らかの形で自ら問いを設定し、その問いについて探求して、一定の答えを導いた。	一般的な知見を基に自ら問いを設定し、その問いについてこれまでで学んだ知識や技法を活用して探求し、その探求の内容を口頭発表および論文で表現した。	一般的／専門的な知見を基に自ら問いを設定し、その問いについてこれまでで学んだ知識や技法を活用して探求し、その探求内容を口頭発表および論文で論理的に表現した。	一般的／専門的な知見を基に自ら問いを設定し、その問いについてこれまでで学んだ知識や技法を活用して、既存の知見を基に有意義な統合を行い、あるいは新たな知見を発見して、その成果を口頭発表および論文で論理的に表現した。
特定の課題について「問い」をたて、資料を批判的に検討することによってその論理的な「答え」を見出すことができる。	自分で設定した問いについて、調査研究が行き詰まった際、それ以上に探求することができなかった。	調査研究が行き詰まった際に、資料を検索し直したり調査をやり直したりするなど、リトライすることができた。	調査研究が行き詰まった際に、元々の方法のリトライに加えて、ポードフォリオ等を活用してこれまでの学びを振り返り、異なる分野の資料を検討したり新たな手法で調査を行うなど、研究の質的転換を試みることもできた。	元々の調査研究のリトライや、調査手法の転換に加えて、なぜ既存の調査研究では行き詰まったのか、ポードフォリオ等を活用して振り返って分析し、より的確な問いの探求方法を模索することができた。	リトライや手法の転換、ポードフォリオ等を活用した既存の調査方法の分析・反省からさらに進んで、資料の比較対照・総合や独自の調査の実施、よりの確かな問いの再定式化など、創造的な探求を行った。
特定の問題に関する「問い」と「答え」を「言葉」によって論理的に表現することができる。	ゼミ等において、他の学生や教職員と交流する上での基本的なルールや約束を守ることに困難があった。	ゼミ等において、他者と交流する上でのルールと約束をおおむね大切にしながら、他の学生や教職員と交流できた。例) 他の学生や教職員へのマナーを守る、話しかけやメールにレスポンスを返す、約束やアポイントメントを守る、課題に取り込む、締切を守る、など。	左に加えて、他の学生や教職員との関係を考えながら、自分自身の課題や役割を考えつつ、行動できた。他者の言葉や意見に耳を傾けて、そこから学ぶことができた。	ゼミ等において、自分の課題に十分に取り組んだ上で、状況やニーズに応じて他の学生（後輩含む）や教職員へのサポートを行った。他者が学びうるような形で、自分自身の意見や知見を示すことができた。	ゼミ等において、自分も含めたメンバー相互の利害や価値観の違いを意識し、全体のバランスを考え対話を重ねながら、メンバー全員にとって有益な意見や知見の提示、提案や行動を行うことができた。例) 卒論執筆に向けた自主的な助け合い、行き詰まっている学生へのサポート、卒論発表会のコーディネートなど。
特定の問題に関する「問い」と「答え」を「言葉」によって論理的に表現することができる。	研究やそれを取り巻く環境に関わる困難に、何らかの形で対応する姿勢を持つまでには至らなかった。周囲の助言や手助けを求めるに至らなかった。	研究やそれを取り巻く環境に関わる困難に対して、教職員や他の学生などの助言を受けられた。いくらかなりとも、困難に対応しようとする意思や努力を示した。	研究やそれを取り巻く環境に関わる困難に対して、教職員や他の学生などの助言を受けつつ、その困難に何らかの形で対応する努力を行うことができた。	研究やそれを取り巻く環境に関わる困難に対して、教職員や他の学生などの助言を受けつつ、その困難に対処しつつ研究や生活を前に進めることができた。	研究やそれを取り巻く環境に関わる困難や予想外の状況に直面しても、自らの努力で困難を切り抜けることができた。

(6) 大学生基礎力レポート		2017年度
[1] 挑戦する経験		52.5
[2] 続ける経験		42.5
[3] ストレスに対処する経験		57.5
[4] 多様性を受容する経験		75.0
[5] 関係性を築く経験		50.0
[6] 議論する経験		70.0
[7] 課題を設定する経験		80.0
[8] 解決策を立案する経験		65.0
[9] 実行・検証する経験		57.5



(7) 地域関連科目 修得単位数	課題探求実践セミナー（人文社会科学部）(2)、日本語方言の探究(2)	
(8) 地方創生推進士育成科目 修得単位数	フェーズⅠ(4)、Ⅱ(0)、Ⅲ(0)、Ⅳ(0)、Ⅴ(0)	
(9) 外国語能力試験	TOEIC IP	対象のデータが存在しません。
	TOEIC公開	対象のデータが存在しません。
	TOEFL ITP	対象のデータが存在しません。
	IELTS	対象のデータが存在しません。
(10) その他外国語	対象のデータが存在しません。	

### 5. 正課外活動振り返り

(1) 準正課活動	
(2) 部活動・サークル活動	
(3) ボランティア活動等	
(4) 資格等	

### (3) 結果

ポートフォリオサマリーの構築により、学生は入学後から卒業までの間、e-ポートフォリオの様々な情報をまとめた状態で常時確認、出力することが可能となり、自身の学修の振り返りや目標を設定する際に学修記録の確認が容易になったほか、過去のデータとの比較も各個人で容易にできるようになった。また、アドバイザー教員にもポートフォリオサマリーの情報が共有されるため、指導学生の学業成績の推移やその他学修記録、課外活動記録等を一度に常時確認でき、リフレクション面談における面談資料としての利用や、支援を必要とする学生の早期発見に活用することが可能となった。

#### 2.2.4.3 多面的評価指標開発研究会の開催

##### (1) 趣旨・目的

AP事業では、ディプロマ・ポリシーに沿った人材育成ができていないかを検証するため、高知大学が育成しようとする人材についての能力指標の開発及びこれに基づいた評価の実施を掲げている。この能力指標の開発のために多面的評価指標開発研究会を立ち上げ、高等学校関係者や企業と協働して研究会を開催している。委員は、高知県教育委員会から1名、地域の企業から4名、首都圏の企業から1名を選出し、本学の教員3名を合わせた計9名で構成されている。

##### (2) 取組内容

###### <第3回多面的評価指標開発研究会>

1) 日 時 平成29年9月12日(火) 17:00~18:30

2) 場 所 高知大学朝倉キャンパス 総合研究棟2階会議室3

3) テー マ パフォーマンス評価をどのように行うか

##### 4) 概 要

第3回より新たに委員に加わった、リクルートワークス研究所の豊田義博氏(本学客員教授)より、今回のテーマに関連して、「現在の若手社員が抱える諸課題、それを育成する中堅社員の現状等から、現代社会に求められる能力と大学時代にその能力を育成するための教育・評価方法の在り方」について報告があった。

豊田義博氏による「若手社員の過労自殺」の問題提起のなかで、「新入社員が手応えのある、やりがいがある仕事を担当した場合、圧倒的な業務量やスピード感に押しつぶされてしまうことがある。そうした現状から、若手社員の仕事は細分化、マニュアル化され、手応えのないものになっている」という指摘があった。

また、その背景に、「若手社員がどういう心情で、どういうコンディションで仕事をしているかをマネージャーがわかっていないという、マネジメントの不在があるのではないか」ということも指摘された。これについて、下記のような意見が出された。

- ・若手、1、2年目の社員にも可能な限り積極的に会社の情報を伝える。全体像をある程度わかってやるのと、そうでないのではやりがいが違う。
- ・マネージャーは、若手社員がどれだけの業務量でどこができていないのか、どうしてできないのか、寄り添っていくという姿勢が求められている。

- ・失敗を恐れずにやっていくことが求められる。失敗しながら、謝らせながら、クレームに対し、なぜそうなったかを理解させることが重要。始末書も答えをだすのではなく、本人とマネージャーと一緒に作り上げていくことが望ましい。
- ・共通言語、共通ルールで評価することが難しい。評価基準がきちんとあり、若手がすぐに動けることが大事。

#### <第4回多面的評価指標開発研究会>

1) 日 時 平成30年2月21日(水) 16:00~17:30

2) 場 所 高知大学朝倉キャンパス 共通教育棟1号館多目的室

3) テー マ マネージャーとしての教師に求められていることは何か

#### 4) 概 要

教師には専門的な事柄を教える中で、学生の適性を見極めることや適切な指導・助言ができるマネージャーとしての役割が求められているのではないかという問題意識から、「マネージャーとしての教師に求められていることは何か」をテーマに協議を行った。

まず、本学塩崎大学教育創造センター副センター長より、高知大学で実施しているセルフ・アセスメント・シートの結果から、今回の協議の視点について、以下のような問題提起がなされた。

- ・同じ設問内容でも1年生と3年生では感じ方が違っているが、このことを学生の成長と捉えてもいいのだろうか。
- ・セルフ・アセスメント・シートから、学生の変化は見てきたが、その内実は調査だけではわからないので、学生を一番よく知る教員によるリフレクション面談での指導・助言が重要である。
- ・GPAによる客観評価、セルフ・アセスメント・シートによる自己評価、教員のリフレクション面談による形成的評価の3者をうまく回すためのアセスメント・プランが重要である。
- ・教員がどのような「教育力」を期待され、求められているかが明確に定義されていない。

問題提起を受けて意見交換を行った結果、委員より下記の意見が出された。

- ・セルフ・アセスメント・シートについては、まずは10+1の能力について、なぜそれが必要なかを学生に理解させることが必要で、そのためには教員が理解しておくことが重要である。
- ・10+1の能力について、個々の能力の内容を共通理解させておくことが必要である。
- ・自己評価の方法を学ばせるために、自己評価と他者評価の結果(両者の差)を知らせている。学生は評価を受けた経験が少ないために、自己評価ができないのではないか。
- ・目標設定では「頑張る」ではだめ。最初は物理的に無理な目標を設定してしまいがちであるが、面談を重ねていく中で、次第に目標が具体的になる。
- ・平成29年版学習指導要領では、カウンセリング面接の必要性が謳われていることから、教員には、学生や生徒に目標設定と振り返りの意味を理解させ、面談を実施する能力が求められている。

- ・教員に求められている「異質な他者として学生に強い影響を与え、半年～数年の時間をかけて学生の態度変容を促す力」「『聞く力』『考える力』『やり切らせる力』など、学生を動かす力」「学生を主体的に動かせるために、学生自身に明確な目的を抱かせる『目的設定支援力』」「褒める、叱る」「すべての学生に等しく『期待』のまなざしを持つ」などの力は、良質なマネージャーと本質的には同じである。

### (3) 結果

第3回の研究会での意見を受けて、本事業におけるルーブリック評価及び教員による学生面談の運用にあたって、以下のような点を反映させることとした。

- 1) 評価基準と評価基準のもとになる考え方（DPなど）を学生と教員が共有する。
- 2) 評価は面談とセットのものであり、教員と学生が評価結果について話し合う時間を確保する。
- 3) 評価と面談の結果を受けて、学生が次の目標を立てこれに取り組むことができる環境を整備する。

また、第4回の研究会では上記の結果を踏まえ、教員の役割に焦点をあてて議論を行った結果、本学が実施するリフレクション面談について下記3点の課題が挙げられた。

- ・リフレクション面談の時間をどのように確保するか。
- ・リフレクション面談においては、自己評価と他者評価のズレについて、学生と教員がどのように話し合っていくか。
- ・学生に助言・指導ができる教員のスキルアップが必要である。

以上の課題に対して、10+1の能力を学生と教員に共通理解してもらうためのパンフレットの作成やFD等を通して、形成的評価のためのリフレクション面談の評価視点の共有を図りつつ、本事業における質保証の取組を実施していくことが確認された。

<第3回多面的評価指標開発研究会の様子>



<第4回多面的評価指標開発研究会の様子>



## 2.2.4.4 多面的評価指標の試行モデルの実施

### (1) 趣旨・目的

平成28年度に開発した多面的評価指標について、学生が身に付けるべき能力として本学が定めている10+1の能力との整合性及び社会が求める人材の観点からの指標の妥当性について分析・検証し、チューニングを行う。

### (2) 取組内容

平成29年度に実施したセルフ・アセスメント・シートの結果を用いて、探索的因子分析を行った。また、成績データとの紐づけにより、本指標と成績の関連性について検証を行った。そして、その分析結果及び多面的評価指標開発研究会での議論を基に新たな多面的評価指標モデルを開発した。

### (3) 結果

4月に1年生を対象に行ったセルフ・アセスメント・シートの結果について、探索的因子分析を行ったところ、下記の4因子として解釈することが妥当と考えられた。

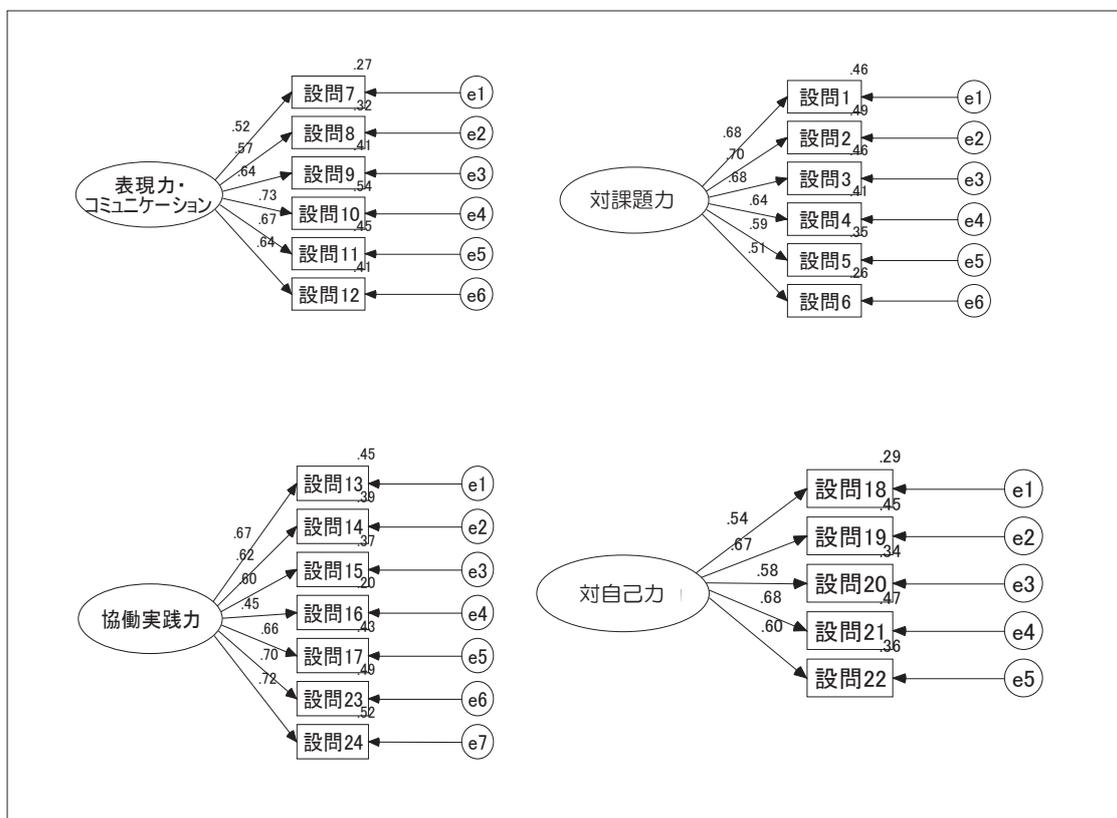
第1因子 対課題力（設問1～6）

第2因子 表現力・コミュニケーション力（設問7～12）

第3因子 協働実践力（設問13～17と設問23・24）

第4因子 対自己力（設問18～22）

（セルフ・アセスメント・シート様式〈平成29年度入学生用〉：資料集P102）



表現力・コミュニケーション力と協働実践力は対人関係力としてまとめられるため、セルフ・アセスメント・シートは、本学が育成をめざす【対課題】、【対人】、【対自己】の10+1の能力を評価する際に有効なものであると考えられる。

また、セルフ・アセスメント・シートと1年次の成績の関係について、A学部を対象として、対課題力、表現力・コミュニケーション力、協働実践力、対自己力をひとまとめにする因子（セルフ・アセスメント・シート）と、平成29年度の評点平均と修得単位数をひとまとめにする因子（1年次成績）をそれぞれ想定し、共分散構造分析をしたところ、0.16というパス係数を得た。ただし、このような分析結果は、すべての学部において得られるものではなく、今後のさらなる検討が必要である。

以上の結果から、本年度試行したセルフ・アセスメント・シートでは、本学が育成をめざす10+1の能力が【対課題】、【対人】、【対自己】のカテゴリーに納まるものであることがわかった。一方で、セルフ・アセスメント・シートは各能力について4段階で自己評価を求めるものであり、そうした自己評価の客観性については、多面的評価指標開発研究会でも指摘されるところであった。

こうしたことから、【対課題】、【対人】、【対自己】のカテゴリーはそのままに、それぞれの能力をより具体的な行動として記述するルーブリック評価を導入することとなった。

ルーブリック作成にあたっては、多面的評価指標開発研究会において意見を聴取し、指標そのものへの意見とともに、その運用にあたって、下記の点に留意することが求められた。

- 1) 評価基準と評価基準のもとになる考え方（DPなど）を学生と教員が共有する。
- 2) 評価は面談とセットのものであり、教員と学生が評価結果について話し合う時間を確保する。
- 3) 評価と面談の結果を受けて、学生が次の目標を立てこれに取り組むことができる環境を整備する。

これらの意見をもとに、平成29年度中に、10+1の能力のうちGPAで評価できる2項目及び更なる検討が必要であった「語学・情報に関するリテラシー」を除いた7項目について全学共通のルーブリックを作成し、+1にあたる「統合・働きかけ」については、学部・学科・コースにおいてルーブリックを作成した。

これらのルーブリックを用いて、平成30年度からは、①学生の自己評価と、②パフォーマンス科目における教員による他者評価、③自己評価と他者評価を学生と教員で共有し、学生の成長を支援するリフレクション面談を行うことによって、より客観的な目で学生の成長を促す仕組みを構築していくこととした（2.2.4.6参照）。

（セルフ・アセスメント・シート様式＜平成30年度入学生用＞：資料集P103）

#### 2.2.4.5 外部アセスメントテストの実施 大学生基礎力レポート

##### （1）趣旨・目的

学生の現時点での協調的問題解決力（チームで問題を解決する力）を能力的評価（1年生：基礎学力、3年生：批判的思考力）及び行動的評価（自己管理、対人関係、計画・実行）により把握し、今後の就学支援・キャリア形成支援に役立てることを目的として、ベネッセi-キャリア社の「大学生基礎力レポート」を実施する。

調査結果は受検者個々に返却し、自分の現状をどのように分析・把握すればよいか、これからの学生生活においてどのようなことを心掛けていけばよいか等を解説し、学生一人ひとりの今後の就学に役立てる。

また、本学が作成したセルフ・アセスメント・テストの妥当性・有効性の検証にも活用することとし、詳細は2.3.4.6で報告する。

## (2) 取組内容

- 1) 実施時期 平成29年4月
- 2) 対象 平成29年度の1年生及び3年生全員
- 3) 場所 高知大学朝倉キャンパス

## 4) 調査内容

- ① 基礎力レポートⅠ：基礎学力、協調的問題解決力・行動力、大学・大学教育への期待、学びに対する意識・行動、大学選択に役に立った情報源、進路に対する意識・行動
- ② 基礎力レポートⅡ：批判的思考力、協調的問題解決力（行動的評価）、大学・大学教育への評価、学習活動・学びに対する意識、進路に対する意識・行動

## (3) 結果

### 1) 受検率

1年生対象の基礎力レポートⅠの受検率は高く、93%の学生が受検していた。大学入学時の新生オリエンテーションで本アセスメントについてアナウンスを行い、授業期間開始前に実施していることから、高い受検率が得られていると思われる。

一方3年生対象の基礎力レポートⅡの受検率は、学部間で大きな差が認められた。各学部において年度当初のオリエンテーションでアナウンスし、授業期間開始前に実施しているが、各学部で本アセスメントの捉え方に差があることが、受検率の差になって表れているのではないかと推察される。このアセスメントは、本学在学中に2回実施し、結果はe-ポートフォリオに掲載されるとともに、今後はディプロマ・サプリメントへの記載も検討されていることから、特に3年生の受検を促すような取組が喫緊の課題である。

### <1年生：基礎力レポートⅠ>

学部等	在学者数	受検者数	受検率	備考
人文社会科学部	284人	218人	77%	
教育学部	138人	138人	100%	
理工学部	255人	252人	99%	
医学部	174人	170人	98%	
農林海洋科学部	210人	207人	99%	左記には、4年生1名を含む
地域協働学部	65人	60人	92%	
土佐さきがけプログラム	14人	10人	71%	
合計	1,140人	1,055人	93%	

## < 3年生：基礎力レポートⅡ >

学部等	在学者数	受検者数	受検率	備考
人文学部	290 人	80 人	28%	
教育学部	139 人	22 人	16%	
理学部	284 人	210 人	74%	左記には、4年生1名を含む
医学部	199 人	173 人	87%	
農学部	169 人	121 人	72%	
地域協働学部	62 人	27 人	44%	
土佐さきがけプログラム	17 人	5 人	29%	
合計	1,160 人	638 人	55%	

## 2) 基礎力レポートⅠ

基礎力レポートⅠの結果について全国と高知大学全体の値を示す。

### ① 基礎学力

社会で必要とされる汎用的な知的能力の基礎となる学力について測定している。測定分野は「英語運用」「日本語理解」「判断推理」の3つの尺度である。

- ・英語運用：英語の聴き取り・会話ができるためのベースとなる、文法力・語彙力・読解力があるか
- ・日本語理解：様々な能力を身につけ、豊かな感性、幅広い知識や教養を身につけるためのベースとなる日本語能力があるか
- ・判断推理：日常生活やビジネスシーンで生じる課題や問題を正確に合理的に処理するために必要な数学的な力が身につけているか

また、判断推理の内容は、以下のとおり「数的処理」「空間把握」「資料解釈」の尺度で測定している。

数的処理	規則性を見つけたり、その規則にしたがって数値を求めたりする力。代数、関数、数・量・図形、N進法など
空間把握	図形の状況を把握し、状況が変化した場合を推測する力。平面・空間図形
資料解釈	グラフや資料を正しく読み取り、物事を整理して考える力。場合の数、資料の整理

本学の偏差値は下図に示すとおりであり、全国と比較すると本学の偏差値は大きく上回っていることがわかった。



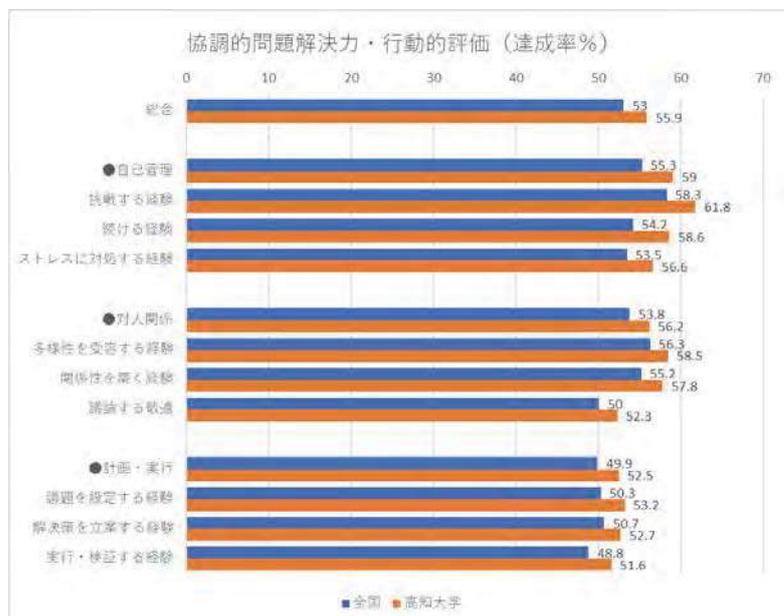
## ② 協調的問題解決力・行動力

社会で必要とされる「協調的問題解決力」の行動的評価として、以下のとおり「自己管理」「対人関係」「計画・実行」という3つの分野でそれぞれの経験・行動を測定している。

自己管理	目標を掲げ、自分の感情や行動を適切にコントロールしながら、達成に向けて粘り強く行動する	挑戦する経験
		続ける経験
		ストレスに対処する経験
対人関係	自分と異なる意見や価値観、行動のしかたの違いを受け入れ、他者との合意を形成しようとする	多様性を受容する経験
		関係性を築く経験
		議論する経験
計画・実行	問題解決に必要なプロセスを適切に運用する	課題を設定する経験
		解決策を立案する経験
		実行・検証する経験

結果は達成率で評価し、全項目に「とてもよくやっていた」と回答した場合を満点とし、満点に対しどれだけ得点できたかを達成率として表している。結果は下図に示すとおりである。

総合をはじめ、全ての項目において全国平均より本学の達成率が上回っていた。本学の結果を「自己管理」「対人関係」「計画・実行」の3項目で比較すると、「計画・実行」の達成率が低いことがわかった。



### ③ 大学・大学教育への期待

大学選択時の意識を、「大学で学ぶ目的」「大学の魅力（大学全体について）」「大学の魅力（学問内容や学び方について）」「大学選択に役立った情報源」の尺度で測定している。

#### ●「大学で学ぶ目的」

「大学で学ぶ目的」は、各項目の選択率（1つ選択）で表している。

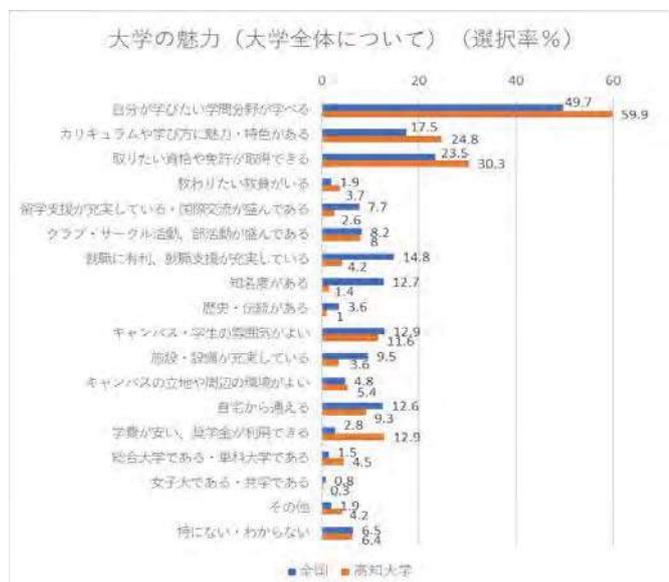
結果は、多い順に「将来なりたい職業に就くために必要な資格や免許を取る」（24.2%）、「将来なりたい職業に就くために役立つ専門知識や技術を身につける」（23.4%）、「興味や関心のあることを深く追究する」（22.3%）であった。この結果は全国と比較しても同様の傾向である。一方、全国と比較して本学が明らかに低い結果であったのは、「さまざまなことを幅広く学ぶ（教養を身につける）」「社会に出た時に役立つ知識や技術を身につける」の2項目であった。就職に必要な資格や免許、さらに専門的知識や技術の習得を目指して大学に入学してくるが、幅広い教養や社会人として必要な知識や技術の習得を目指して本学へ進学してきている学生は1割程度であることが明らかとなった。



#### ●大学の魅力（大学全体について）

「大学の魅力（大学全体について）」は、下記の選択肢の中から上位2つを選択させた結果を示している。

「自分が学びたい学問分野が学べる」（59.9%）が最も高率であり、次いで、「取りたい資格や免許が取得できる」（30.3%）、「カリキュラムや学び方に魅力・特色がある」（24.8%）と続いた。国際交流やクラブ・部活動については魅力を感じている学生は少ないことがわかった。全国と比較すると、就職支援や知名度という点においては魅力を感じておらず、学費が安い・奨学金が利用できる点は魅力を感じている学生が多かった。このような結果は、地方国立大学ならではの傾向であるかもしれない。

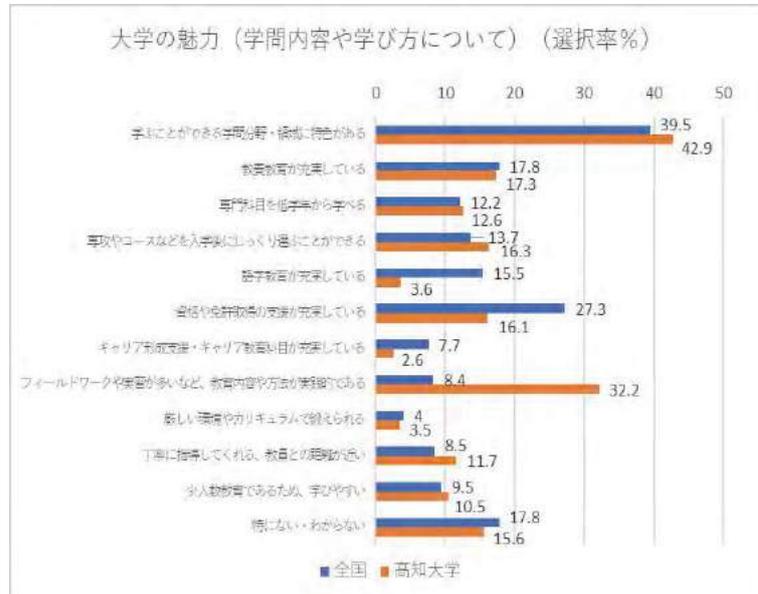


●大学の魅力（学問内容や学び方について）

「大学の魅力（学問内容や学び方について）」は、下記の選択肢の中から上位2つを選択させた結果を示している。

「学ぶことができる学問分野・領域に特色がある」（42.9%）、「フィールドワークや実習が多いなど、教育内容や方法が実践的である」（32.2%）が高率を示している。

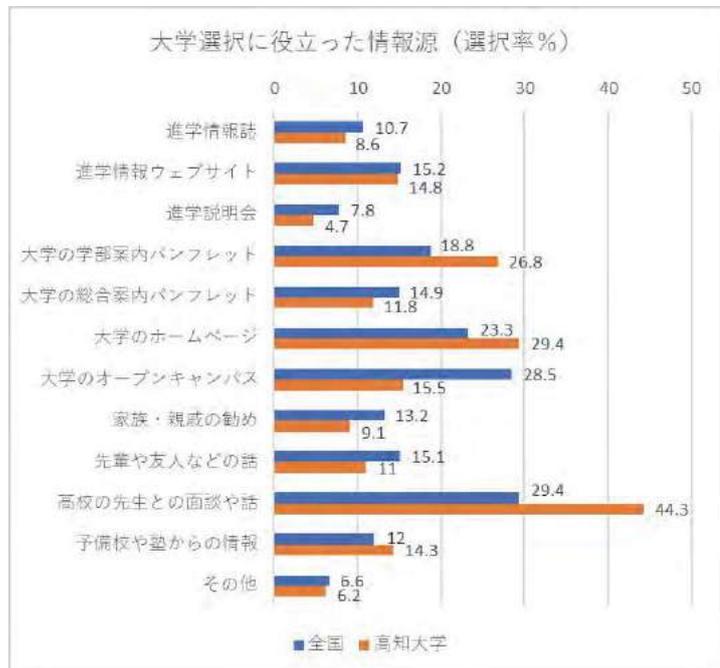
「資格や免許取得の支援が充実している」は全国と比較すると低く、今後の課題といえる。



④ 大学選択に役に立った情報源

大学選択に役に立った情報源は、下記の選択肢の中から上位2つを選択させた結果を示している。

最も高率を示したのは「高校の先生との面談や話」（44.3%）であった。全国の結果も第1位になっており、大学選択において高校の先生との面談や話は重要な要素となっていることがわかった。次いで、大学ホームページや学部案内、オープンキャンパスが役立ったと回答していた。



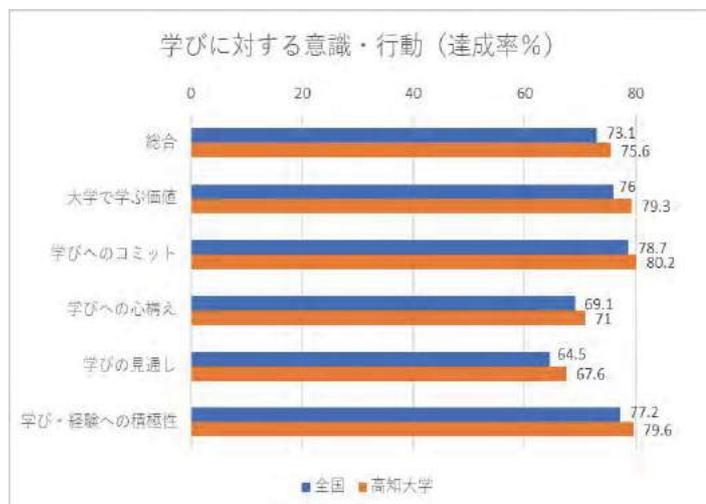
⑤ 学びに対する意識・行動

学びへの意識や、具体的な取組状況を測定している。測定分野は以下のとおりである。

学びへの意識	大学で学ぶ価値	大学での学びにどれだけ価値を感じているか
	学びへのコミット	学びに打ち込む決意や意思をどれだけ持っているか
	学びへの心構え	主体的に学ぶ心構えがどれだけできているか
	学びの見通し	卒業までの見通しや自己の成長イメージを持っているか
	学び・経験への積極性	学びや挑戦、周囲との交流に対してどれだけ前向きであるか（知的好奇心など）
学びへの取り組み	学習習慣や学習態度がどれだけ身についているか	

結果は達成率で評価し、全項目に「非常にあてはまる」「よくした」と回答した場合を満点とし、満点に対しどれだけ得点できたかを達成度として表している。結果は下図のとおりである。

「学びへのコミット」や「学び・経験への積極性」や「大学で学ぶ価値」は高い達成率を示しているが、「学びへの心構え」や「学びの見通し」の達成率は低かった。全国的な傾向ではあるが、入学時に卒業までの見通しを持ったり、自己の成長イメージを持ったりすることは難しく、初年次教育の課題といえるのではないと思われる。



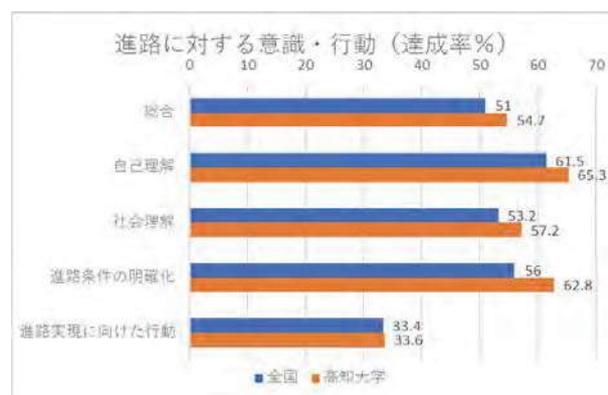
### ⑥ 進路に対する意識・行動

進路に関わる意識や具体的な取組状況について測定しており、測定分野は以下のとおりである。

自己理解	自分の性格や強み、価値観、職業選択における希望条件などを理解しているか
社会理解	職業を取り巻く社会や業界の動向、仕事に必要な適性、資格などを理解しているか
進路条件の明確化	将来のライフスタイル、働いている姿ややりたいことがはっきりとイメージできているか
進路実現に向けた行動	企業・業界研究や試験勉強、インターンシップなど、具体的な行動を起こしているか

結果は、達成率で評価し、全項目に「非常にあてはまる」と回答した場合を満点とし、満点に対しどれだけ得点できたかを達成率として表している。結果は下図のとおりである。

「自己理解」や「進路条件の明確化」は高い達成率を示していた。一方、「進路実現に向けた行動」の達成率は低いが、1年生ということを考慮すれば、妥当な結果であると思われる。



## 3) 基礎力レポートⅡ

基礎力レポートⅡの結果について全国と高知大学全体の値を示す。

### ① 批判的思考力

社会で必要とされる「協調的問題解決力」の能力的評価として、大学の授業で鍛えられる「批判的思考力」を測定している。異なる3つの素材（広告、新聞、論文）において、それぞれ批判的思考の3つのプロセスに沿って出題されている。

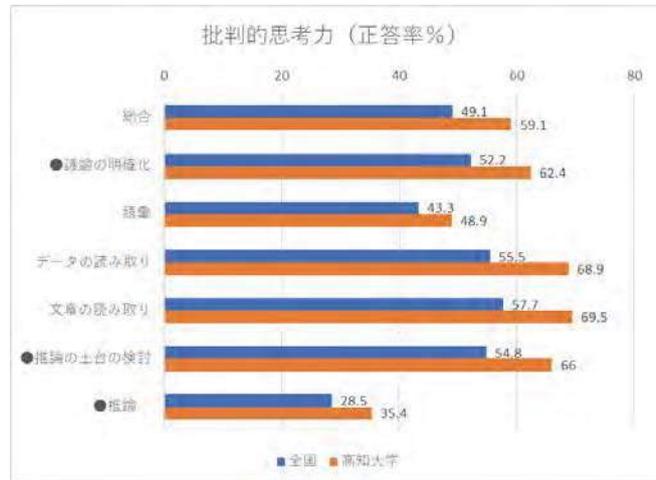
批判的思考の3つのプロセスは以下のとおりである。

議論の明確化	何がかかれているのかを正しく読み取る。(語彙、データの読み取り、文章の読み取り)
推論の土台の検討	書かれていることを信頼してよいか、判断する。
推論	ロジック(論理展開)が適切かどうかを確認する。

「議論の明確化」は大学入試でも問われる読解力の範囲であるが、一方、「推論の土台の検討」「推論」は大学の学びで鍛えられるものである。

結果は以下に示すとおりである。

いずれの項目も全国平均と比較すると高い正答率であった。「議論の明確化」においては、データの読み取りや文章の読み取りは正答率が高いが、語彙の正答率は低かった。また、「推論の土台の検討」の正答率が高いが、ロジックが適切かどうかを確認する「推論」の正答率は低かった。



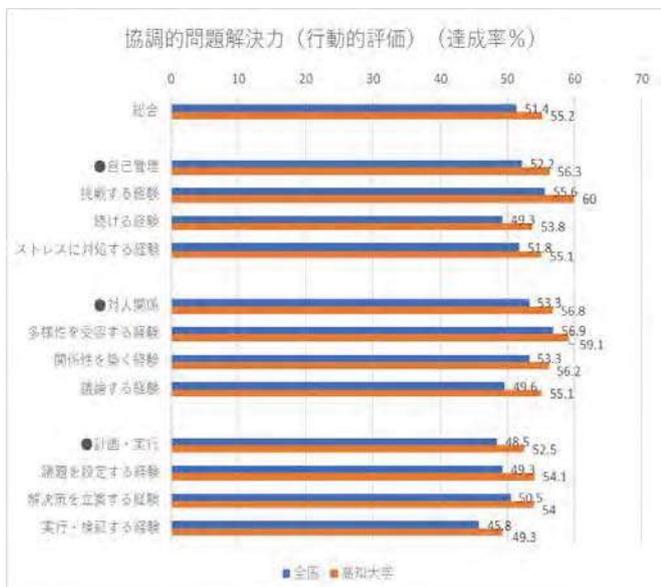
## ② 協調的問題解決力 (行動的評価)

社会で必要とされる「協調的問題解決力」の行動的評価として、自己管理、対人関係、計画・実行という3つの分野でそれぞれの経験・行動を測定している。測定分野は以下のとおりである。

自己管理	目標を掲げ、自分の感情や行動を適切にコントロールしながら、達成に向けて粘り強く行動する	挑戦する経験
		続ける経験
		ストレスに対処する経験
対人関係	自分と異なる意見や価値観、行動のしかたの違いを受け入れ、他者との合意を形成しようとする	多様性を受容する経験
		関係を築く経験
		議論する経験
計画・実行	問題解決に必要なプロセスを適切に運用する	課題を設定する経験
		解決策を立案する経験
		実行・検証する経験

達成率で評価し、全項目に「とてもよくやっていた」と回答した場合を満点とし、満点に対しどれだけ得点できたかを達成率として表している。結果は以下のとおりである。

いずれの項目も全国平均と比較すると達成率は高く、特に「自己管理」の挑戦する経験や「対人関係」の多様性を受容する経験は高い達成率であった。全体的に「計画・実行」は他の分野と比較すると低い値となっていた。

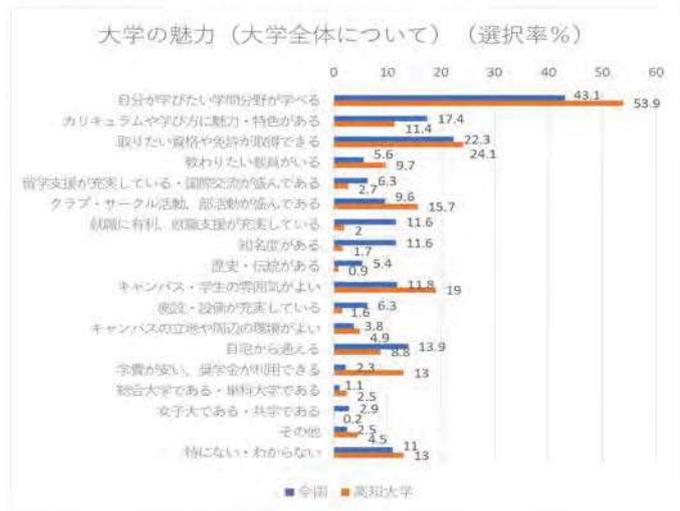


### ③ 大学・大学教育への評価

大学・大学教育への評価について、「大学の魅力（大学全体について）」「大学の魅力（学問内容や学び方について）」の2項目で測定した。いずれの間も、選択肢の中からあてはまるものを上位2つまで選択させた結果は以下のとおりである。

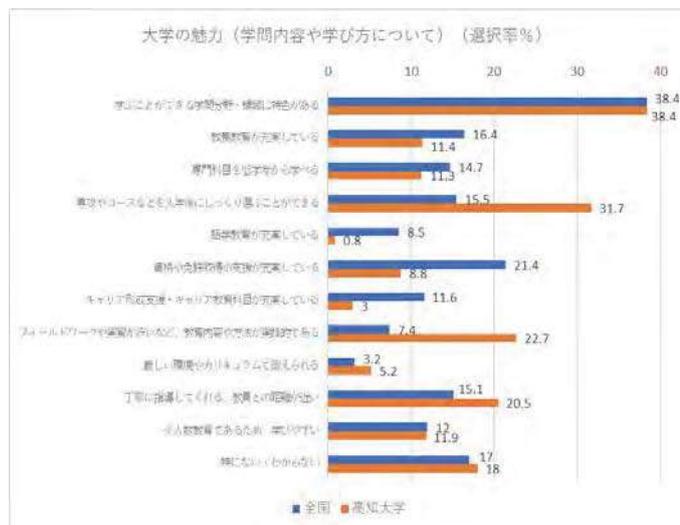
#### ●大学の魅力（大学全体について）

大学の魅力（全体）では「自分が学びたい学問分野が学べる」が最も高率であり、全国平均と比較しても高い値になっていた。次いで、「取りたい資格や免許が取得できる」「キャンパス・学生の雰囲気がい」と続いた。一方、全国平均と比較して低率を示しているのは「就職に有利、就職支援が充実している」「知名度がある」であった。



#### ●大学の魅力（学問内容や学び方について）

特に高知大学の数値が高い項目は、「専攻やコースなどを入学後にじっくり選ぶことができる」「フィールドワークや実習が多いなど、教育内容や方法が実践的である」「丁寧に指導してくれる、教員との距離が近い」であった。一方、「教養教育が充実している」「専門科目を低学年から学べる」「資格や免許取得の支援が充実している」は全国平均より低い値であった。



### ④ 学習活動・学びに対する意識

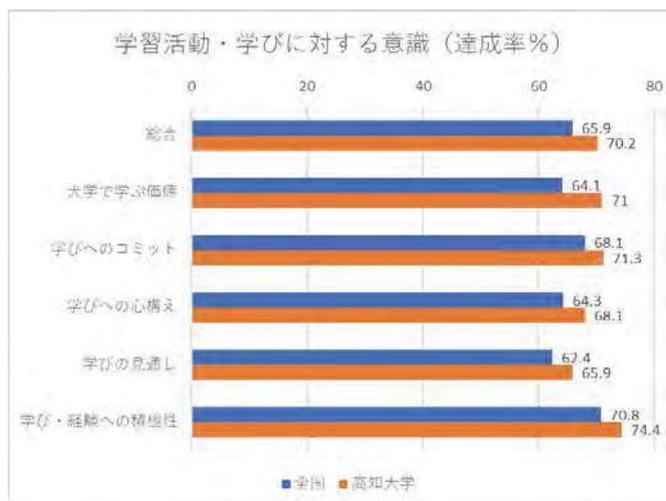
学びへの意識や、具体的な取組状況を測定している。測定分野は以下のとおりである。

学びへの意識	大学で学ぶ価値	大学での学びにどれだけ価値を感じているか
	学びへのコミット	学びに打ち込む決意や意思をどれだけ持っているか
	学びへの心構え	主体的に学ぶ心構えがどれだけできているか
	学びの見通し	卒業までの見通しや自己の成長イメージを持っているか
	学び・経験への積極性	学びや挑戦、周囲との交流に対してどれだけ前向きであるか(知的好奇心など)
学びへの取り組み	学習習慣や学習態度がどれだけ身についているか	

達成率で評価し、全項目に「非常にあてはまる」「よくした」と回答した場合を満点とし、満点に対しどれだけ得点できたかを達成率として表している。結果は以下のとおりである。

全国平均と比較すると、いずれの項目も高知大学の方が高い値を示していた。「学び・経験への積極性」が最も達成率は高く、反対に「学びの見通し」が最も低かった。本調査は3年当初に実施していることから、卒業までの見通しはまだ持っていないと思われる。

本学学生には、学ぶことや挑戦することに対して前向きであるという強みを活かして、積極的に大学での学修に取り組んでもらいたい。



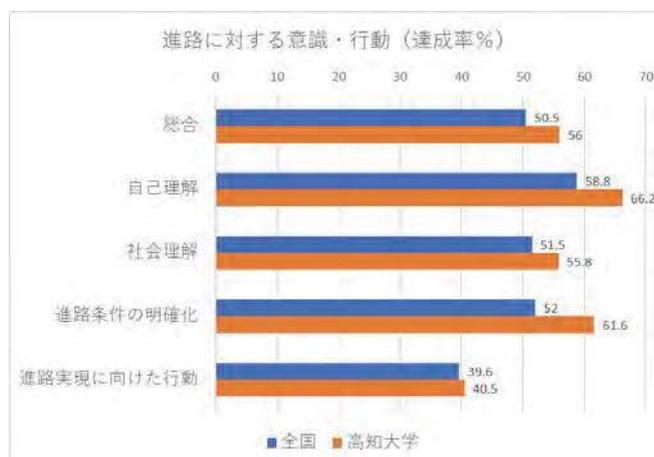
### ⑤ 進路に対する意識・行動

進路に関わる意識や具体的な取組状況について測定している。測定分野は以下のとおりである。

自己理解	自分の性格や強み、価値観、職業選択における希望条件などを理解しているか
社会理解	職業を取り巻く社会や業界の動向、仕事に必要な適性、資格などを理解しているか
進路条件の明確化	将来のライフスタイル、働いている姿ややりたいことがはっきりとイメージできているか
進路実現に向けた行動	企業・業界研究や試験勉強、インターンシップなど、具体的な行動を起こしているか

達成率で評価し、全項目に「非常にあてはまる」と回答した場合を満点とし、満点に対しどれだけ得点できたかを達成率として表している。結果は以下のとおりである。

全国平均と比較すると、いずれの項目も本学の方が達成率は高く、特に「自己理解」や「進路条件の明確化」の達成率は高かった。一方、「進路実現に向けた行動」の達成率は低かった。本調査の対象が3年生であることを考えれば、自らの進路実現に向けて勉強やインターンシップなど具体的な行動が起こせていないということから、本学におけるキャリア支援の在り方について検討の必要性が示唆されている。



以上のように、本調査で本学の学生の実態を掴むことができたが、これらの調査結果は以下のように活用した。

- 1) 新入生については、入学時の現状把握に活用し、4（6）年間の就学の指針とする。
- 2) 3年生については、自己分析結果を就職活動やキャリア形成に活用する。
- 3) e-ポートフォリオに結果を掲載することで、大学における学びとその成長度について、日常的に学生に自己評価させる。
- 4) アドバイザー教員等による面談の際に、面談資料として、教員用の学生個人結果報告書を活用する。

一方、今後の課題は、3年生の受検率を上げることである。本調査の結果を活用することで本学における学修がより充実することについて丁寧に説明をする等、3年生の受検を促す取組を実施することが必要である。実施日・実施時間・実施場所等についても各部局と相談しながら、学生がより受検しやすい環境の整備も併せて実施していくことが求められる。

#### 2.2.4.6 10+1の能力に関する到達度評価の実施に向けた体制整備

##### (1) 趣旨・目的

全学部において10+1の能力の到達度評価を実施するために、4（6）年間のスケジュールを学生・教員それぞれの視点から可視化する。それによって、全教員が到達度評価について認知し実際に評価することができる体制を整備することを目的とする。

##### (2) 取組内容

###### 1) 10+1の能力に関する到達度評価実施要領の策定

ディプロマ・ポリシーに基づいて示された10+1の能力評価指標の到達度を測り、これを用いた学生指導を通じて本学の教育の質を保証することを目的として、「10+1の能力に関する到達度評価実施要領」を策定した。また、併せて到達度評価実施者用の実施手順書を作成し、大学教育再生加速プログラム事業実施本部会議や大学教育創造センター教育企画会議、全教員を対象としたFDを通じて各学部へ周知を行った。

(10+1の能力に関する到達度評価実施要領：資料集P105)

###### 2) リフレクション・セメスターの設定

正課、正課外活動、その他の学生生活全般を対象として、これまでの大学生活でどのようなことが身につき、今後どのようなことを目標に大学生活を送るかについて、振り返り、内省する期間として、3年生の第1学期をリフレクション・セメスターとして位置づけた。

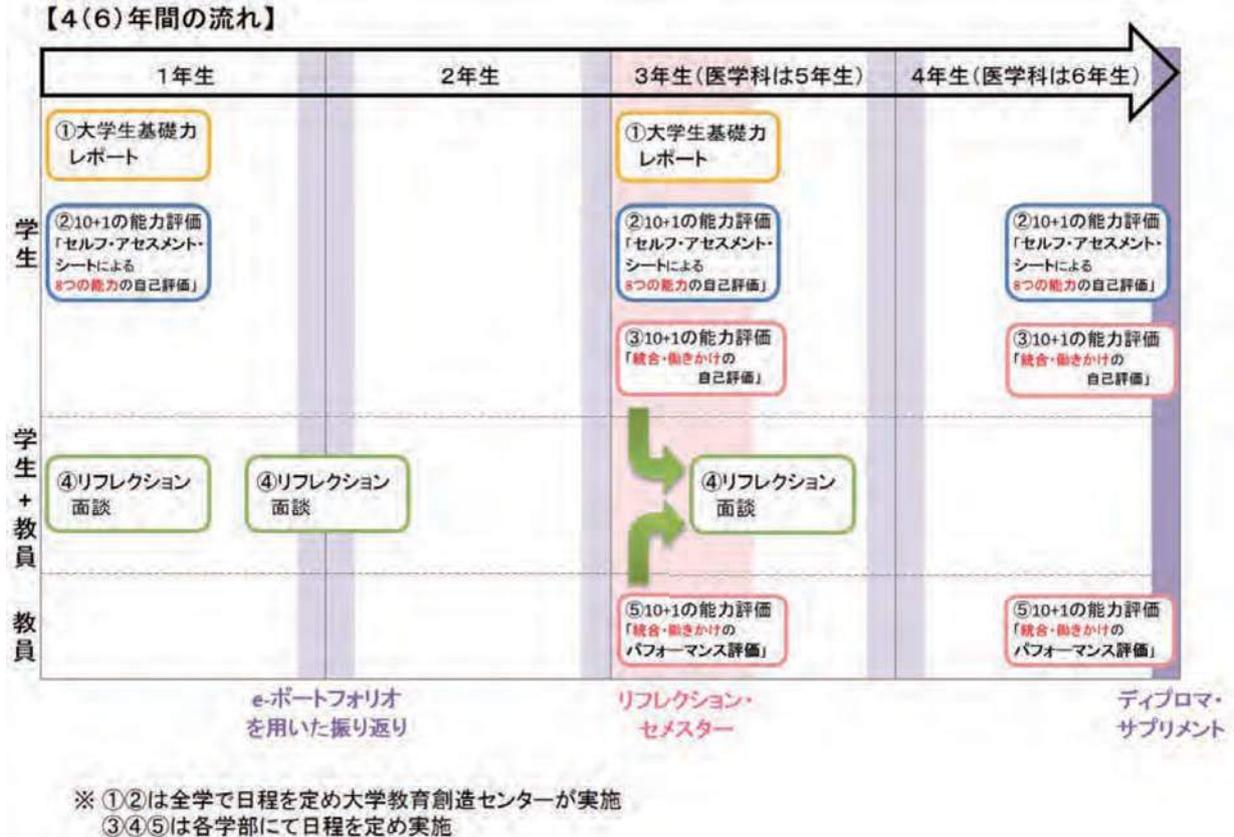
リフレクション・セメスターでは、10+1の能力の到達度を始めとするe-ポートフォリオに集約された自身の学修成果や、それに基づいた教員によるリフレクション面談での指導・助言などから、卒業時の目標をあらためて見直し、今後取り組むべきことや学修のスケジュール等を修正していく。

###### 3) リフレクション面談の実施

学生たちが生涯学び続ける学修者として自己を評価する視点を獲得するために、教員が伴走しメタ認知を促進させる支援を行うことを目的として、リフレクション面談を実施することとした。リフレクション面談は入学から卒業までに3回実施し、1年生には、入学後自分が何をしたいかを面談を通じて自覚させ、目的意識を喚起することで学修活動への動機づけを高めることを目的に実施する。さらに、学期ごとの学修目標の設定や振り返りの重要性を認識させ、e-ポートフォリオを活用しながら4（6）年間の学修を進めていくことを確認する。2・3年生には、学修成果についての自覚を促し、自分の強みを意識して社会に貢献できる力の集大成に向けた準備を行わせることを目的に実施する。

(リフレクション面談実施要領：資料集P107)

## 10+1の能力の育成に係る面談、パフォーマンス評価等の流れ



### (3) 結果

10+1の能力の到達度評価を実施するために、実施要領の策定、全学会議でのアナウンス、FDの実施と複数の方法で全学部の教員が到達度評価の重要性を認識できるように働きかけ、教員によるパフォーマンス評価が実施できるようになったことは成果である。さらに、FD参加者には、より理解が深まるよう、到達度評価に関する取組内容をまとめた冊子の配布も行った。

AP事業実施期間中は、大学教育創造センター主導で各学部等での到達度評価を実施しているが、AP事業終了後は各学部等の教育ファシリテーターが中心となって、到達度評価を実施することになる。本項の取組は、そのための素地を作ることができ、本学における到達度評価の安定的な継続のための大きな一歩となった。

## 2.3 Ⅲ. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する

### 2.3.1 目的

AP事業では、本学が掲げるディプロマ・ポリシーに沿った人材育成を行うための教育の質保証の仕組みを構築することを目標に掲げているが、よりよいものへと改善を図るには、効果検証を行う仕組みの構築と継続運用が必須である。よって、AP事業では、入学から卒業、そして社会を見据え、卒業生と在学生へ大学教育の満足度等を調査し、学生の成長の検証を行うこととした。また、AP事業そのものを学内外から検証する仕組みを構築し、AP事業終了後を見据えて事業の在り方や効果を検証することとした。

### 2.3.2 主な取組内容

#### (1) 卒業生調査及び卒業生就職先調査の実施

卒業生調査は、平成28年度の全卒業生1,098名のうち1,085名（在学時の保護者の住所に送付。保護者の住所が日本国外のものは調査対象外とした。）を対象に実施し、その結果、152名から回答があり、回収率は13.8%（回答者／全卒業生）であった。調査内容は、大学に対する満足度・成長の振り返り、社会での役立ち度等の項目とした。

卒業生就職先調査は、平成27・28年度の卒業生のうち、進学者、教育学部卒業生、医学部卒業生を除く1,069名を対象とした。本学の倫理審査委員会の意見に従い、卒業生の同意を得た上で調査することとしたため、まず卒業生へ（在学時の保護者の住所宛てに）調査票を郵送し、卒業生本人が同意する場合に、就職先上司に調査票を手渡してもらうこととした。就職先上司には調査票を記入後、本学へ郵送してもらうこととした。その結果、送付数の5.6%にあたる60名の卒業生から就職先調査への諾否の回答があり、23社から調査票への回答があった。調査は、就職先企業における優秀な社員に求められる能力や、大学在学中に身に付けてほしいこと、高知大学出身者に感じていること等の項目について実施した。

卒業生調査からは、専門科目全般と卒業論文に対する満足度が高く、教職員の支援や熱意が印象に残っている学生の割合が高いという結果が得られた。また、卒業後の経験に照らして重要と考える能力は、コミュニケーション力と自律力を挙げた者が多く、大学時代にもっと身に付けておけばよかったと考えるものには、パソコンスキルや語学力を挙げる者が多かった。

#### (2) 卒業生及び就職先企業へのインタビュー調査の実施

ベネッセ教育総合研究所との共同研究として、高知県内と首都圏に就職した卒業生及びその就職先企業へのインタビュー調査を実施し、分析・検証を行った。

就職して5年目までの卒業生（平成24～28年度卒業生）とその就職先の上司を対象にインタビュー調査を実施した。調査対象は首都圏10組、高知県内19組の合計29組の卒業生とその就職先の上司であり、調査は平成29年9月に実施した。調査内容は、卒業生に対しては、大学生活が現在の自分（仕事）にどれくらい役立っているか、自己の強みと課題、後輩・高知大学への要望、就職先に対しては、卒業生への期待、卒業生の強みと課題、職場で求められる必要な人材要件とした。

調査から以下のような知見が得られた。

- ・県内では“自分らしさ”を発揮して働き成長することが期待され、首都圏ではスキルの習得と競争を勝ち抜く積極性が求められる傾向がみられる。
- ・「地域交流プログラム」等の準正課活動に参加した卒業生の満足度・充実感は高く、職場

上司からの評価も高い。

これらの結果を踏まえ、平成30年度の卒業生・就職先調査を設計していく予定である。

### (3) リフレクションセミナーの実施

リフレクション・セメスター（これまでの大学生活とそこで得られた学びや今後の大学生活の送り方や目標について、振り返り、内省する期間として3年生の第1学期に設定）の一環として、平成30年1月17日及び平成30年1月24日に3年生を対象としたワークショップ型セミナーを開催し、24名の学生が参加した。セミナーでは、大学入学以降の学生生活をe-ポートフォリオ等の様々なツールを用いて振り返り、就職活動や卒業に向けた目標の再設定を行った。また、本セミナーを就職支援室と共同で実施することで、キャリア教育としての内容を充実させることができ、学生が大学での学びと社会の結びつきを考えるきっかけを作ることができた。

### (4) 大学教育の質保証に関するアンケートの実施

全学部生を対象として平成29年7月に満足度と学修状況の実態調査を実施した。授業等で質問紙を配布し、その場で回収するという方法により調査を行い、3,496名が回答し、回答率は70.6%であった。調査の結果、授業内容や、大学生活についての満足度は80%を超えており、AP事業の任意指標として掲げている『「大学教育に満足している」学生の割合』（授業内容または大学教育に満足している1・3年生の割合）は85.4%にもなった。このことから、教育に対する満足度は高いと思われる。しかし、キャンパスの施設や設備についての満足度は低く、今後詳しい調査が必要であると思われる。

また、授業外学修時間については、1週間あたり平均14.0時間という結果が出た。AP事業で本学が定めている平成29年度の目標値8時間を大きく上回ったが、1年生の平均は10.0時間と低く、低学年での授業外学修時間を延ばす工夫を考えていく必要がある。

### (5) 外部アセスメントテストの実施 ALCS学修行動調査

本学の学生の現状を他の大学と比較し、客観性を担保することを目的に、教学比較IRコモンズに加入し、平成29年12月～翌年2月に、1年生と3年生を対象に、ALCS学修行動調査を実施した。対象人数は、2,289名で、有効回答者数は511名（内訳：1年生320名、3年生191名）、回答率は22.3%であった。教学比較IRコモンズに加わることにより、本学の学生の実態について調査することができるとともに、加入する8大学（本学含む）との数値の平均値などと本学の数値の比較検証が可能になる。主な調査内容は、授業外学修時間、大学の授業及び学生生活に関する満足度等である。

調査の結果、高知大学の学生は他大学の学生と比較して、以下のような傾向が見られた。

- ・ 授業時間外の学修時間が授業に関連があるもの、関連がないものどちらも多い。
- ・ 授業内での学生間ディスカッションが多い。
- ・ 地域社会が抱える問題への関心や理解力が高い。
- ・ 専門分野に関する理解力、批判的思考力、人間関係を構築する力が高い。
- ・ 留学の希望が少ない。

### (6) 学修成果と学生生活のデータの分析及び検証

学内にある学生の学修成果に関わるデータと学生生活に関わるデータを一元化し、分析・検

証を行った。

特に、4月に新入学生を対象に実施した「大学生基礎力レポート」（ベネッセi-キャリア社）の結果と1年次第1学期の成績及びセルフ・アセスメント・シートの結果の相関を、共分散構造解析の手法で分析した。

その結果、「大学生基礎力レポート」と「セルフ・アセスメント・シート」との間には中程度の相関が認められた。これは、「大学生基礎力レポート」と1年次の成績との相関よりも、高いものであった。

#### （7）平成29年度外部評価委員会の開催

平成29年度AP事業における第三者評価を受けるため、外部評価委員会を開催し、自己点検評価の報告書を基に、取組内容、事業実施状況、効果及び普及促進等について評価が行われた。

全体としてはおおむね良好な評価を得られた一方、各種調査の回収率の低さ等の指摘を受けた。

### 2.3.3 成果

本取組の成果は以下の4点としてまとめられる。

#### ① 卒業生調査の実施

昨年度に引き続き卒業生調査を実施したが、回収率は13.8%と、昨年度の実績19.6%より下回る結果となった。この原因として、卒業生に卒業生調査と就職先調査を同時に送付し、混乱と煩わしさを招いたことが考えられたため、回答者の手間を省くための検討が行われ、来年度はWebで実施することが決定した。また、調査項目については、ベネッセ教育総合研究所との共同研究により、10+1の能力を卒業後の社会での活躍に結びつけて検証するための調査設計が整えられた。このように、今年度の結果から次年度以降の継続的な調査の体制が整えられたことが成果である。

#### ② 卒業生とその就職先へのインタビュー調査の実施

卒業生とその就職先へのインタビュー調査を実施し、在学中の学修が卒業後にどのように活かされているかについて、卒業生とその直接の上司に聞き取り調査をすることができた。これによれば、ゼミや卒業論文等で担当教員から直接に受けた指導が卒業後の活躍に有用であったことを語る卒業生が多く、このことは、上記卒業生調査での回答と重なるものであり、在学中の学修について、教員による指導が重要な役割を果たしていることが示された。卒業生の直接の上司も、卒業生が在学中にゼミや卒業論文などを通じて身に付けた資質を高く評価していることがわかった。

さらに、社会で活躍できるハイパーフォーマーの条件として、卒業生、その上司ともに、10+1の能力のうち、論理的思考力、コミュニケーション力、協働実践力を挙げており、社会から本学の教育へのフィードバックとして貴重な知見が得られた。

#### ③ 在学生に対する取組

在学生に対しての取組として、「大学教育の質保証に関するアンケート」及び「ALCS学修行動調査」を実施できたことは、上記、卒業後に活躍できる人材の育成に向けて、在学中に学生がどのような学修を行っているかを客観的に把握するために有用であった。また、3年生に対して、入学以来の学修を振り返る期間をリフレクションセメスターとして設けたこ

とも、インターンシップ、就職活動に向けての準備機会として適切な期間設定であった。

#### ④ データ分析による成長の検証

本学が掲げる10+1の能力が身に付いているかを検証するために、その指標であるセルフ・アセスメント・シートと外部アセスメントである「大学生基礎力レポート」（ベネッセ・キャリア社）の結果について相関を検証することで、セルフ・アセスメント・シートに一定程度の信頼性があることが検証され、次年度以降もこれに基づいたルーブリック評価を実施する体制が整えられた。

以上のことから、外部客観テストや卒業生の就職先など、地域や社会の視点から本学の学修成果を検証する体制の構築により、学生の自己評価や本学の教育成果の検証に加えて、本取組に他者評価の視点を加えることができた。また、これにより、本学の教育課程における教員の主体的な学生への関わりが、社会からも評価される質の高い学修成果を挙げる要因となることが示され、次年度以降の本取組への有用なフィードバックとなった。

### 2.3.4 具体的な取組内容

#### 2.3.4.1 卒業生調査及び卒業生就職先調査の実施

##### 【卒業生調査】

##### (1) 趣旨・目的

学士課程を終えて就職や進学した学生の大学に対する満足度・成長の振り返り、社会での役立ち度等を把握することで、本学の学士課程における質保証に係るデータを収集することを目的とする。

本調査データは、学士課程の学びと社会との連続性を把握するための基礎データとなり、大学教育再生加速プログラム事業及び本学の教育改善や学生支援等に関する教育・研究に利用する。

##### (2) 取組内容

1) 期 間 平成29年12月19日～平成30年1月31日

2) 対 象 平成28年度学部卒業生1,098名のうち在学時の保護者住所が日本国内である1,085名

##### 3) 調査方法

質問紙調査を実施した。在学時の保護者住所へ卒業生本人宛で調査票を郵送にて配布し、調査票記入後に郵送にて回収を行った。なお、住所が日本国外の場合は送付対象外とした。

##### (3) 結果

##### 1) 回収率

調査票の送付数1,085件に対して、回答数は152件であった。

学部等	平成 28 年度卒業生			
	卒業生数①	送付数	回答数②	回収率 (②/①)
人文学部	298	295	31	10.4%
教育学部	173	170	41	23.7%
理学部	264	258	31	11.7%
医学部	181	181	29	16.0%
農学部	168	167	16	9.5%
土佐さきがけプログラム	14	14	4	28.6%
合 計	1,098	1,085	152	13.8%

## 2) 回答結果（抜粋）※平成27年度卒業生の調査結果との比較

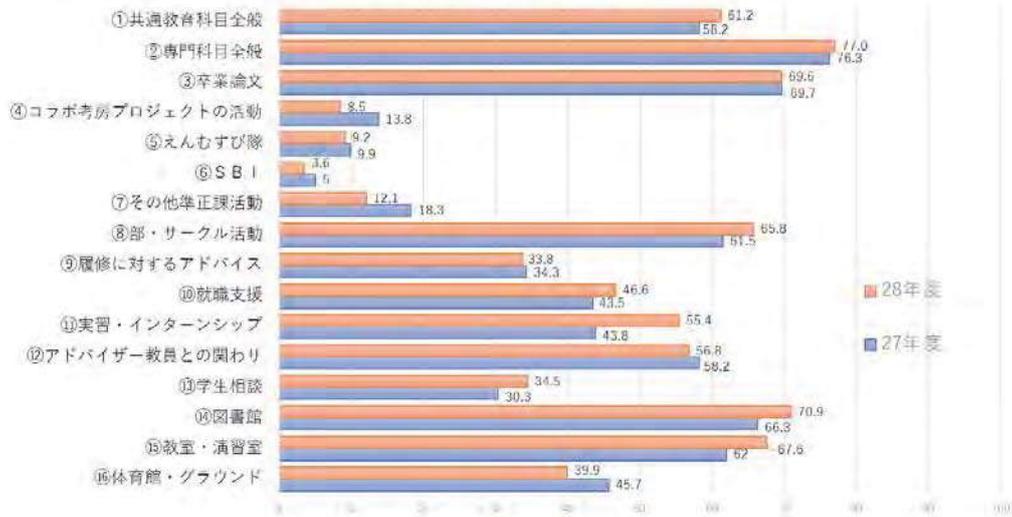
設問 2. あなたの現在の就業状況について、あてはまる番号に○をつけてください。



設問 3. あなたの現在のお仕事について、近いものにそれぞれ○をつけてください



設問4. あなたが高知大学で受けた教育や学生生活支援について、あてはまる番号に○をつけてください。(5件法にて選択し回答)



設問5. 大学教育(授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など)を通して、次のような経験はどれくらい現在も印象に残っていますか。あてはまるものを、それぞれひとつ選んでください。(5件法にて選択し回答)



設問6. 高知大学は、下の表の①~⑫に掲げる能力の修得を目的とする「総合的教養教育」を実施しています。

1) 高知大学で受けた教育により、下の表の①~⑫に掲げる能力がどの程度身に付いたか、あてはまる番号を選び○を付けてください。(5件法にて選択し回答)



設問6 2) 1) で「身に付いた」「どちらかという身に付いた」を選んだ場合、下の表の①から⑫にあげる能力が主にどのような場で身に付いたかについて、あてはまる番号を選んでください。  
(結果の後半)

	6. インターンシップ		7. 部・サークル活動		8. アルバイト		9. 留学経験		10. その他	
	28年度	27年度	28年度	27年度	28年度	27年度	28年度	27年度	28年度	27年度
①大学で専攻した専門分野に関する知識や能力	0	0	1	2	1	0	1	1	3	3
②大学の教育（共通教育）で学んだ人類の文化・社会・自然に関する基礎的知識	0	0	2	2	0	1	0	1	0	0
③ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力	1	2	5	11	4	1	0	0	2	3
④課題を発見し、解決に導く道筋を考え実行する力	1	3	12	16	3	1	2	0	0	4
⑤英語等の語学に関する知識	0	0	0	1	1	1	4	10	3	2
⑥パソコン等の使い方などの情報に関する知識	0	0	2	2	2	4	0	0	7	5
⑦相手にわかりやすく話す力・文章を作成などの表現力	0	1	5	8	1	4	0	0	0	5
⑧相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力	1	4	15	19	16	10	0	1	3	7
⑨複数の他者と力を合わせてものごとを進めていく協働実践力	1	1	27	36	9	7	0	1	3	7
⑩自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする力	3	3	18	32	28	33	1	2	3	7
⑪社会人としての倫理観	3	4	11	18	30	35	0	0	5	9
⑫周囲の環境などに合わせて、臨機応変に自分の持っている力を組み合わせ、他者に働きかける力	3	1	26	35	14	17	2	0	2	8

設問6 2) 1) で「身に付いた」「どちらかという身に付いた」を選んだ場合、下の表の①から⑫にあげる能力が主にどのような場で身に付いたかについて、あてはまる番号を選んでください。  
(結果の前半)

	1. 共通教育		2. 学部での専門教育（講義）		3. 学部の実験・実習・演習		4. ゼミ・卒業論文・卒業研究		5. 奉仕課活動（クラブ活動・プロジェクト等）	
	28年度	27年度	28年度	27年度	28年度	27年度	28年度	27年度	28年度	27年度
①大学で専攻した専門分野に関する知識や能力	2	3	43	54	23	20	42	63	0	0
②大学の教育（共通教育）で学んだ人類の文化・社会・自然に関する基礎的知識	35	50	20	12	2	1	6	7	0	1
③ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力	4	3	17	33	12	14	57	66	1	3
④課題を発見し、解決に導く道筋を考え実行する力	4	1	18	20	12	13	50	63	1	4
⑤英語等の語学に関する知識	8	17	8	11	0	0	4	15	0	0
⑥パソコン等の使い方などの情報に関する知識	25	36	11	23	3	7	27	37	0	1
⑦相手にわかりやすく話す力・文章を作成などの表現力	7	2	4	21	13	12	48	58	1	2
⑧相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力	4	4	7	10	17	17	28	31	1	1
⑨複数の他者と力を合わせてものごとを進めていく協働実践力	6	6	6	11	28	29	17	29	3	3
⑩自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする力	3	0	4	4	22	23	17	22	1	0
⑪社会人としての倫理観	5	3	6	9	13	6	11	25	2	0
⑫周囲の環境などに合わせて、臨機応変に自分の持っている力を組み合わせ、他者に働きかける力	4	2	1	6	19	12	10	26	1	1

設問7. 設問6の表の①～⑫の能力のうち、卒業後の経験に照らし合わせて、重要だと考えるものを、上位3つまで挙げて、その番号をご記入ください。

	1位		2位		3位	
	28年度	27年度	28年度	27年度	28年度	27年度
①大学で専攻した専門分野に関する知識や能力	15	15	5	4	1	6
②大学の教育（共通教育）で学んだ人類の文化・社会・自然に関する基礎的知識	0	2	4	3	1	3
③ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力	15	15	11	16	11	21
④課題を発見し、解決に導く道筋を考え実行する力	9	16	19	22	9	20
⑤英語等の語学に関する知識	0	2	1	5	2	7
⑥パソコン等の使い方などの情報に関する知識	4	10	5	5	11	18
⑦相手にわかりやすく話す力・文章を作成などの表現力	11	4	25	26	13	19
⑧相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力	34	49	28	43	36	23
⑨複数の他者と力を合わせてものごとを進めていく協働実践力	6	19	16	21	15	19
⑩自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする力	27	40	18	28	13	19
⑪社会人としての倫理観	7	19	8	11	14	12
⑫周囲の環境などに合わせて、臨機応変に自分の持っている力を組み合わせ、他者に働きかける力	22	15	9	22	23	38

設問 8. 卒業して9ヶ月が経過した現在、設問 6 の表の①～⑫の能力の他に、卒業後の経験から大学時代にもっと身に付けておけばよかったと考える力やスキルについて、自由にご記入ください。

- 1位 : パソコンスキルなど n=16  
 2位 : 英語・語学など n=16

初対面の人と適切にコミュニケーションをとるソーシャル・スキルやメンタルコントロールをする力を身につけたかった。
災害時などの緊急時に対する対応力など
社会人としての倫理観
人前で発表することで、自分を上手く表現する力
社会人とうまくやっていくスキル。
自分より上の年齢の人に教えてもらう体験や方法、頼み方
社会で働かれている方（教員、公務員、会社員など）と関わる機会をもっと持ちたかったと思います。良い面も悪い面も大学生の時に感じた社会人に対する気持ちを記録しておくことで、社会人になってからも初心を思い出せたり、後輩への温かな言葉がけにつながるのではと思います。
プライベートで人と仲良くなる能力です。在学中に友人を作りましょう。仕事だけが人生でないし、友人が学校つながりだと新天地で孤独になったり、心が折れやすくなるので、新しく友人を作る度胸とコミュ力が大切です。古い友人も新しい友人も要ります。
社会人としてのマナー、ふるまい
衝突する対人関係を穏やか（穏便）に解決するためのコミュニケーション力。
社会人としての倫理観はバイトでは身につけにくい。卒業後の事を考えるのであれば教育の一環として組み込むことも必要だと感じる。
自分から進んでやろうとする力
集中する力
自分の目的意識をより明確に把握するスキル。あいまいな目的意識で行動してしまうと、結果も納得のいかないものになりがちだし、そういった人が周囲にもちらほらいる。
論理的思考、周囲の観察能力
行動を起こし、持続させる力
客観的に自己分析を行う力。

設問 10. 大学教育（授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など）を通して、次のような機会はどれくらいありましたか。あてはまるものを、それぞれひとつお選びください。



### <卒業論文やゼミ等での指導の効果>

大学教育や学生生活への支援に対する満足度を聞いたところ、学習面では「専門科目全般」と「卒業論文」について肯定的回答が多かった。また、どのような場面でそうした実感があるのかについては、「学部での専門教育（講義）」「学部の実験・実習・演習」「ゼミ・卒業論文・卒業研究」と回答した者の割合が高かった。

一方、大学生活で印象に残っていることについては、「学習について相談にのったり、支援してくれる教員・職員がいた」、「教育について熱意のある教員がいた」、「教員の指導に基づきながらも、自主性を尊重されて学習が進められた」が上位を占めた。

これらを勘案するに、卒業生の多くが、専門的な知識やスキルを修得していく過程での教員による指導に強い印象を持っていたと考えられる。このことは、本学が、少人数によるゼミ・卒論指導などを重視した教育を行っていることによるものであると推察される。

### <卒業後に必要性を実感する能力>

卒業生が卒業後の経験に照らして重要と考える能力については、「相手の意思をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション力」と「自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする能力」を選択した者が多かった。

また、大学時代にもっと身に付けておけばよかったと考える力やスキルについては、「パソコンスキル」や「英語・語学」と回答した者が多かった。これらは、正課・非正課等を通じて経験を積んだと考えられるが、社会人となって実践的な場で必要とされるレベルが、学生時代に想定していたものより高かったことがこの結果に結びついたと考えられる。

これらの結果から、本学の教育は、社会で最も必要と考えるコミュニケーション力や自分をコントロールする力はある程度身に付けさせることはできているが、パソコンスキルや語学力の育成に力を入れる必要があることが示唆された。

### 【就職先調査】

#### (1) 趣旨・目的

本学が掲げる「総合的教養教育」の教育の中で身に付けてほしい12の力について、卒業生がどれくらい身に付けているか、客観的視点から検証することを目的とする。

卒業生本人への調査同様、学士課程の学びと社会との連続性を把握するための基礎データとなり、AP事業及び本学の教育改善や学生支援等に関する教育・研究に利用する。

#### (2) 取組内容

1) 期 間 平成29年12月19日～平成30年1月31日

2) 対 象 平成27年度学部卒業生の就職先及び平成28年度学部卒業生の就職先  
(教育学部、医学部以外の学部)

#### 3) 調査方法

郵送配布、郵送回収とし、卒業生本人宛で在学時の保護者住所へ調査票を郵送した。卒業生本人が本調査に同意する場合、就職先上司に調査票を手渡ししてもらい、就職先上司が調査票記入後、本学へ郵送することとした。

#### (3) 結果

##### 1) 回答状況

対 象	送付数	学生の諾否回答数	企業からの回答数
平成 27 年度卒業生就職先	524	37	11
平成 28 年度卒業生就職先	545	23	12
合 計	1,069	60	23

2) 回答結果（抜粋） ※平成27年度卒業生、平成28年度卒業生を合算して集計

問4 ハイ・パフォーマーと呼ばれる優秀な社員に求められる能力について、教えてください



問5 貴社が採用された大卒者の働く上で求められる能力について、高知大学出身者に感じていること



問6 大学在学中に身に付けてほしいこと

	文系	理系
1位	相手の意図をくみ取るように聞き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力	相手の意図をくみ取るように聞き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力
2位	ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力	ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力
3位	自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする力	複数の他者と力を合わせてものごとを進めていく協働実践力

就職先の上司からは、ハイパフォーマーの要件として、①論理的思考力と課題発見力、②表現力とコミュニケーション力、③社会人としての自律力・倫理観に関する力の3領域へ回答が集中した。これは、学生の文系・理系の別、就職先企業の業種等の種別に関わらず、同様の回答が得られたものである。この結果に対応し、「大学時代に身に付けておいて欲しいこと」については、上記①～③が上位を占めた。

卒業生調査の項で述べたとおり、卒業生が社会人となってから必要と考える能力も同様であり、これらを勧奨すると、①②については、これまで大学が想定してきたコミュニケーション力や論理的思考力について再度検討することと、③については、スケジュール管理や倫理観などについて、学生に意識させる仕掛けを施す必要があることを示唆している。本年度の調査は回答数が少ないため、調査を継続して検証を深めていきたい。

### 2.3.4.2 卒業生及び就職先企業へのインタビュー調査の実施

#### (1) 趣旨・目的

第3期中期目標・中期計画において、本学が掲げている「地域活性化の中核的拠点」として、地域の課題解決に資する人材育成ができていくかについて明らかにするため、大学における学び＝学修成果が、進路先（就職先等）においてどのように活用され、評価されているかについて、質問紙調査とインタビュー調査を行う。

また、その結果と学生時代の学修成果を照らし合わせて、社会における評価と大学時代の学修評価の整合性についても併せて検証を行う。「社会で活躍できる人材」の特徴を、卒業生本人の主観だけでなく客観的視点からも確認するために、職場上司にもヒアリング調査を実施する。

なお、この調査はベネッセ教育総合研究所との共同研究である。

#### (2) 取組内容

1) 実施時期 平成29年9月

2) 対象 卒業後5年目（平成24～28年度卒業生）までの県内及び首都圏就職者とその就職先の上司 ペア29組（首都圏10組、高知県内19組）

##### <首都圏10組>

専攻	出身地	1年目	2,3年目	4,5年目
文系	県内		3	1
	県外	1	1	1
理系	県内			
	県外	1	2	

##### <高知県内19組>

専攻	出身地	1年目	2,3年目	4,5年目
文系	県内	2	2	4
	県外	2	2	2
理系	県内	2	1	
	県外	1		1

#### 3) 調査方法

まず、インタビューに先立ち事前アンケートを実施し、よりの確なヒアリングとなるよう調査での質問を焦点化した。そして、卒業生へ約60分、職場の上司へ約30分のインタビューを行った。その後、収集したサンプルを「出身地（県内or県外出身）」×「就職先（県内or

首都圏)」の計4パターンにわけ、移動のパターンに応じた卒業生の進路選択行動や職場評価の分析を行った。

#### 4) 質問概要

＜事前アンケート＞

- ・社会で「どれくらい活躍」、大学が「どれくらい貢献」しているのか量的に把握
- ・大学時代の活動について把握
- ・4年間を振り返り、印象的なエピソードを確認

＜インタビュー＞

- ・進学、就職の選択と移動の背景を把握
- ・社会で「どれくらい活躍」しているのかを質的に把握
- ・社会での活躍に大学が「どれくらい貢献」しているのかを質的に把握

### (3) 結果

- ① 県内と首都圏では、職場上司の評価観点が異なる。県内では“自分らしさ”を発揮して働き成長することを期待する傾向が強く、“人間性・人間力”を評価している。そのため個に応じた関わりで見守り育てようという意識が特徴的である。一方、首都圏では、チームメンバーとしての戦力となることを期待し、スキルの習得と競争を勝ち抜く積極性を求める傾向が強い。そのため関わり方は、企業的・一律的であるのが特徴的であった。
- ② 「地域交流プログラム」等の準正課活動に参加した卒業生の満足度・充実感は高く、特に県外出身者の土地への愛着を育む重要なきっかけとなっている。また、学外のネットワーク作りやプロジェクト経験ができる点から職場上司からの評価も高い。
- ③ 就職活動の時期や情報提供において首都圏企業と県内企業に差があり、学生の就職先決定に影響していると思われるケースがあった。

以上の成果については、平成30年3月、第24回大学教育研究フォーラム（京都大学）において、「学修成果の多角的・継続的な可視化とその活用－育成と一体化した評価への試み－」（参加者企画セッション）、「地域で活躍する人材をどのように育成するか－高知大学卒業生インタビュー調査 進学時・卒業の移動に注目した分析－」（ポスター発表）において成果報告を行った。

（卒業生インタビュー調査成果報告：資料集P108）

### 2.3.4.3 リフレクションセミナーの実施

#### (1) 趣旨・目的

リフレクション・セメスター（これまでの大学生活とそこで得られた学びや今後の大学生活の送り方や目標について、振り返り、内省する期間として3年生の第1学期に設定）の一環として、就職活動を目前にした3年生を対象に、大学生活を振り返り、卒業後の進路を考える動機づけを行うことを目的としてワークショップ型セミナーを開催する。

#### (2) 取組内容

##### 1) 日 程・テーマ・参加者数

第1回：平成30年1月17日（水）13：10～14：40

「大好きマップで自己分析してみよう！」

ファシリテーター：立川 明（大学教育創造センター 准教授）

参加者：11名

第2回：平成30年1月24日（水）13：10～14：40

「大学生活 あなたのモチベーションは??？」

ファシリテーター：塩崎 俊彦（大学教育創造センター 教授）

参加者：13名

##### 2) 到達目標

- ・ これまでの3年間を振り返って、思い出したことを2つ以上書ける。
- ・ 大学入学の頃の自分と今の自分の変化している点について、2つ以上書ける。
- ・ 今の自分の強みを2つ以上書ける。
- ・ これから意識していこうと思うことを2つ以上書ける。

##### 3) 概 要

大好きマップ、モチベーション曲線等のツールを使用し、大学入学以降の学生生活を振り返るとともに、ワークシートを用いて卒業後の進路について考えるワークを行った。

また、振り返りの内容を「高知大学e-ポートフォリオ」に書き込み、それをもとに今後の目標を考え、e-ポートフォリオに入力することを事後の課題とした。

#### (3) 結果

学生は、本セミナーを受講し、就職活動に向けた行動目標を立て、どのように就職活動に向き合うかについてe-ポートフォリオに記述することで、就職活動の際、エントリーシートに記載する内容を大学の学修や課外活動等から拾い出すことが容易となり、学生の就職活動に対するモチベーションの向上につながった。

また、本セミナーを就職支援室と共同で実施することにより、大学での学びを就職活動に結びつけるツールとしての「リフレクションセミナー」の位置付けと、AP事業におけるリフレクション・セメスターの内容について、共有することができた。

### 2.3.4.4 大学教育の質保証に関するアンケートの実施

#### (1) 趣旨・目的

AP事業により、教育の質保証が充実していく状況を数値で検証するため、また、学生の学修状況の把握のため、学生の授業外学修時間と大学教育への満足度の調査を行う。

#### (2) 取組内容

- 1) 調査時期 平成29年7月11日（火）～28日（金）
- 2) 対象 全学部・全学年（学部生）
- 3) 調査方法 授業等で調査用紙を配布、その場で回収し、学務課又は学部事務室に提出
- 4) 調査内容 大学教育や学生生活に対する満足度  
一日あたりの授業外での学修時間

#### (3) 結果

##### 1) 学部別・学年別回収率

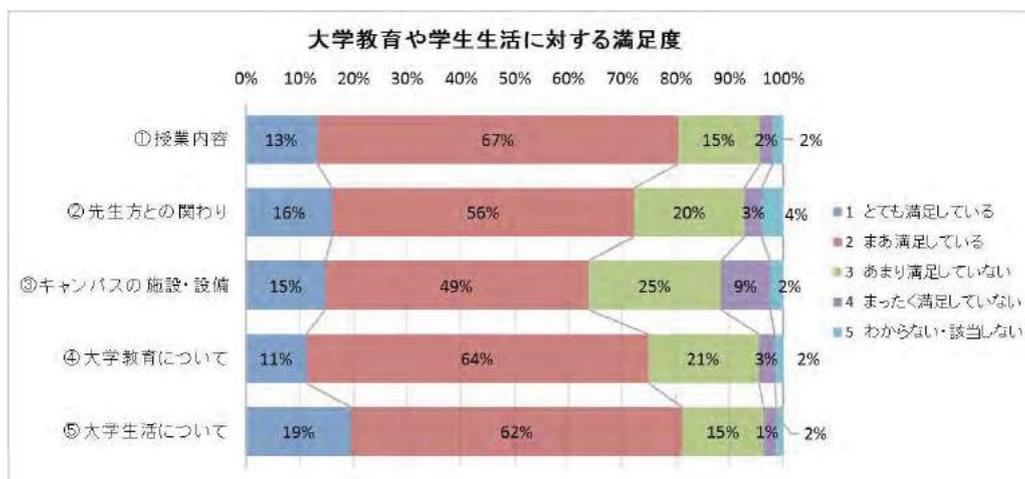
学部別・学年別の回収率は下記のとおりである。

大学教育の質保証に関するアンケート調査2017 回答率

学部名	学年						合計	現員数
	1	2	3	4	5	6		
人文社会科学部	264	149	—	—	—	—	413	561
人文学部	—	—	193	125	—	—	318	665
教育学部	130	109	135	104	—	—	478	606
理工学部	230	—	—	—	—	—	230	255
理学部	—	201	216	161	—	—	578	874
医学部	163	153	113	116	92	108	745	956
農林海洋科学部	202	169	—	—	—	—	371	408
農学部	—	—	129	62	—	—	191	374
地域協働学部	55	29	48	—	—	—	132	187
土佐さきがけプログラム	14	15	4	7	—	—	40	63
合計	1,058	825	838	575	92	108	3,496	4,949
現員数	1,140	1,120	1,160	1,307	113	109	4,949	
回答率	92.8%	73.7%	72.2%	44.0%	81.4%	99.1%	70.6%	

(現員数は平成29年5月1日現在)

## 2) 大学教育や学生生活に対する満足度



大学教育や学生生活に対する満足度を、「授業内容」「先生方との関わり」「キャンパスの施設・整備」「大学教育について」「大学生活について」の5項目で調査した。

全体では、「授業内容」「大学生活について」は満足していると回答した割合は80%を超えており、多くの学生が満足していると思われる。次いで「先生方との関わり」「大学教育について」は70%台でこれらについてもおおむね満足していることがわかる。一方「キャンパスの施設・整備」については64%であり、学生の満足度は高いとはいえない。「全く満足していない」が9%おり、本学に在籍している学生の約1割が大学の施設等について不満を持っていることが明らかになった。学修環境は、4（6）年間の学修成果に影響を与える重要な要素であり、今後は学生が施設や整備のどこに不満を持っているか等、具体的な内容を把握し、改善に向けた取組を行っていく必要がある。

以下は、各内容について学年別に結果を述べる。

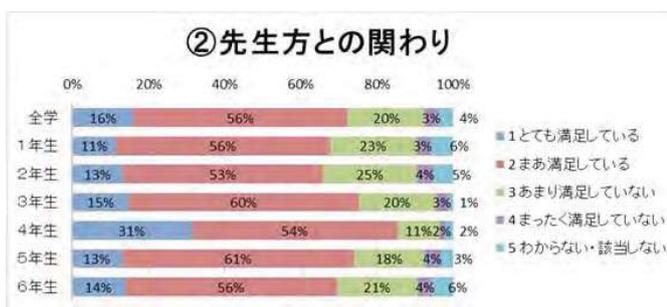
### ① 授業内容

「授業内容」の結果を学年別にみると、どの学年も80%近くが授業内容に満足しており、4年生で「とても満足している」が増えているのが特徴といえる。4年生では多くの場合通常の授業履修は終了しており、医学部を除いてゼミに所属し卒業研究を行うことから、ゼミや研究室での授業や卒業研究等に満足している学生が多いと推察される。



### ② 先生方との関わり

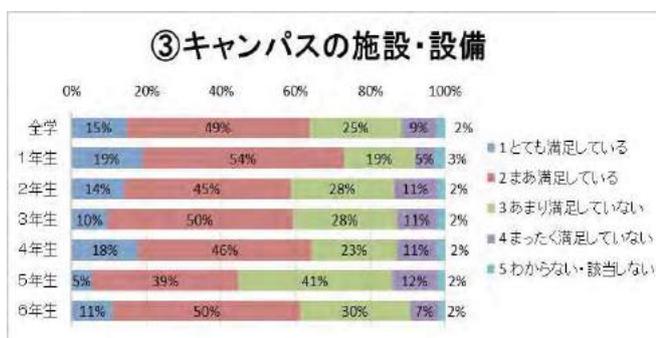
全体的に70%程度の学生が先生方との関わりに満足しているようであるが、4年生で「特に満足している」が増えているのは、先述した授業内容の結果と同様の傾向を示している。このことは、ゼミ



や研究室に所属し先生との関係がそれまでより密になることで、満足度が上がったと推察される。

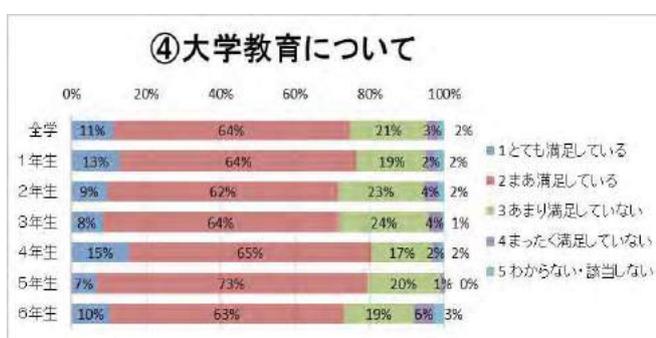
### ③ キャンパスの施設・設備

全体的に満足度が低い内容であるが、学年が上がるにつれて満足度が下がる傾向がみられる。4（6）年生で満足度が上がっているが、ゼミ所属をして卒業研究を行うことを考慮すると、卒業研究を行うための学修環境は整備されていると推察される。



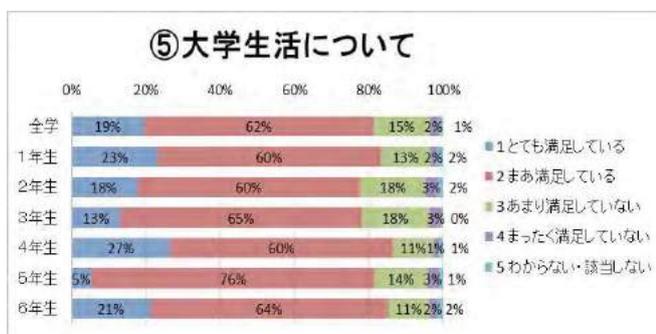
### ④ 大学教育について

「大学教育について」はおおむね満足しているようである。最終学年の4年生で満足度がわずかではあるが増加していることは、4年間過ごした結論となることから、大学としては望ましい結果といえる。今後は、各学年20～30%程度存在している満足していない学生の割合を減らすための努力が必要である。



### ⑤ 大学生生活について

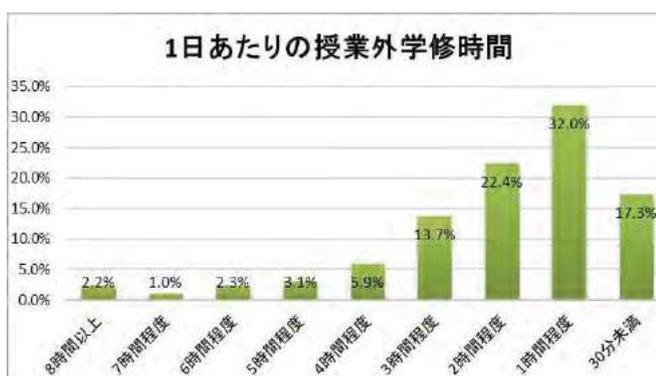
「大学生生活について」は全体的に満足度が高い。4年生と6年生で満足している割合が増加しており、大学教育に対する満足度と同様に、最終学年におけるこの結果は大学として望ましいといえる。2年生・3年生で満足している割合が減少することから、今後はこの原因を追究することも必要ではないかと思われる。



### 3) 1日あたりの授業外での学修時間

大学設置基準で示されている単位修得のための学修時間の確保が求められていることから、授業外学修時間の確認は重要である。

1日あたりの授業外学修時間は、1時間程度が最も多く32.0%であった。次いで2時間程度、30分未満と続いた。



次に、1週間に換算し学年別に示したのが下記の図である。

全学生の平均は14.03時間であった。学年別では差が認められ、学年が上がるにつれて授業外学修時間も増加傾向にある。特に、医学部医学科の6年生の授業外学修時間は35.07時間と他の学年と比較すると多いことがわかる。低学年での授業外学修時間を伸ばすための取組や工夫が必要であるといえる。



高知大学質保証に関するアンケート調査は、教育の質を保証する仕組みのひとつとして、AP事業期間だけでなく事業終了後も実施することが求められる。全学部・全学年を対象としたアンケート調査において、一定の回収率を担保するためには、Webを用いた調査など、調査方法の検討が必要であると思われる。本学の教育改善に寄与する重要な調査を継続して実施できるような体制の構築が求められる。

#### 2.3.4.5 外部アセスメントテストの実施 ALCS学修行動調査

##### (1) 趣旨・目的

教学比較IRコモンズが行う学修行動調査（ALCS学修行動調査）に参加し、高知大学の学生の学修行動を調査することにより、成績評価の背後にある学生の学修行動や姿勢、意識に関する情報を分析し、他大学と比較した本学の学生の特徴を把握することで、教育の質保証に役立てることを目的として実施する。

##### (2) 取組内容

1) 調査期間 平成29年12月6日（水）～平成30年2月9日（金）

2) 対象 高知大学在學生（1年生、3年生）

##### 3) 調査・分析方法

教学比較IRコモンズのWeb学修行動調査システムを利用し、学生の学修行動を調査した。本学のe-ポートフォリオシステムからWeb学修行動調査システムへアクセスできるようにして、学生に輸入を求めた。データは教学比較IRコモンズで収集・集計された後本学に返却され、そのデータを基に本学で分析を行った。

##### 4) 調査項目

調査項目は以下の5カテゴリーで分類した80問である。

- 【経験】学修に関する経験
- 【希望】学修に関して望んでいること
- 【満足】学修関連の満足度
- 【成長】学修による変容の自覚
- 【時間】授業／時間外の活動量

### (3) 結果

#### 1) 高知大学 回答者属性・回答率

1年生と3年生を合わせた回答者数は511名で、回答率は22.3%であった。

1年生・学部	現員数	回答数	回答率	3年生・学部	現員数	回答数	回答率
人文社会科学部	283	45	15.9%	人文学部	287	35	12.2%
教育学部	138	21	15.2%	教育学部	138	27	19.6%
理工学部	255	120	47.1%	理学部	281	74	26.3%
医学部	174	72	41.4%	医学部	198	8	4.0%
農林海洋科学部	210	39	18.6%	農学部	168	28	16.7%
地域協働学部	65	21	32.3%	地域協働学部	62	13	21.0%
土佐さきがけプログラム	14	2	14.3%	土佐さきがけプログラム	16	6	37.5%
計	1,139	320	28.1%	計	1,150	191	16.6%

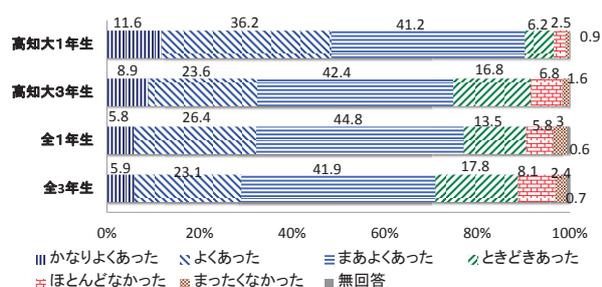
1・3年生合計	現員数 2,289	回答数 511	回答率 22.3%
---------	-----------	---------	-----------

#### 2) ALCS加盟校全体 回答者属性・回答率

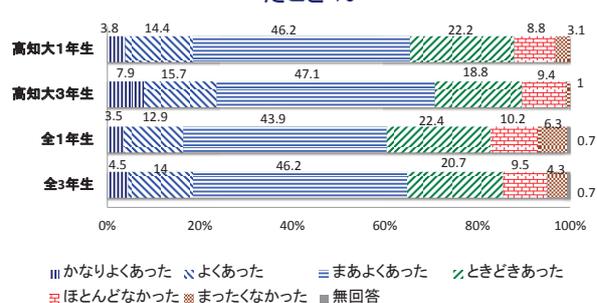
	3年生 人数/回答率(%)	3年生 人数/回答率(%)	合計
男性	1,357 / 33.5	2,005 / 37.6	3,362 人
女性	2,696 / 66.5	3,328 / 62.3	6,024 人
性別不明	1 人	5 人	6 人
計	4,054 人	5,338 人	9,392 人

#### 3) 回答結果 (抜粋)

8 授業内での学生間のディスカッション %



24 授業内容に刺激されて自主的にあらたな勉強や探求をしたこと %



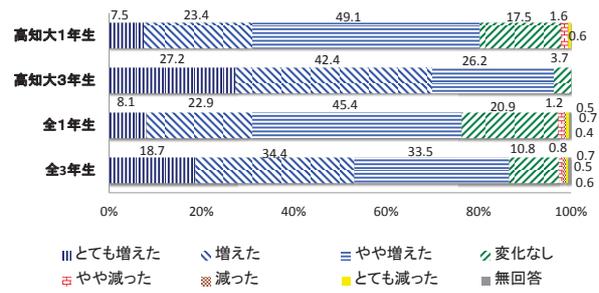
### 1日あたりの時間の使い方

	30 授業時間以外に、授業に関連した勉強をしている時間(分)／日平均	31 授業とは直接関係のない勉強をしている時間(分)／日平均	32 授業に出席している時間(分)／日平均	33 アルバイトなど有給の仕事をしている時間(分)／日平均
高知大1年生	73.8	31.0	260.0	103.2
高知大3年生	72.8	72.7	177.1	115.4
全1年生	54.6	25.6	252.6	183.3
全3年生	55.1	46.3	208.1	178.8

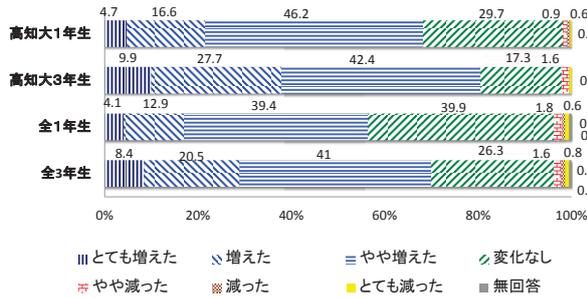
高知大生は、時間外学修に占める授業と直接関係ない内容の学修時間が、3年生で増加。授業に出席している時間は3年生で減少、アルバイト時間は微増。

全平均に比べ、時間外の学修時間は多め、アルバイト時間は少なめ。授業出席時間は高知大1年生は多く、3年生は少ない。

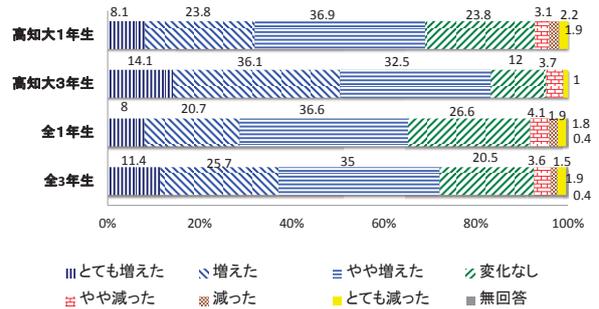
### 37 特定の専門分野に関する理解力 %



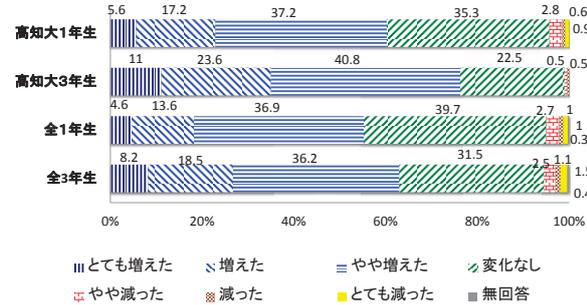
### 38 肯定的な意味で批判的に考える力 %



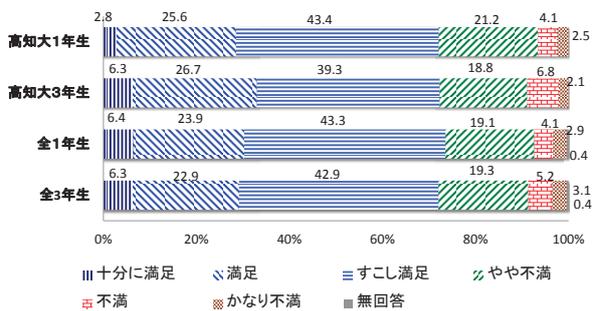
### 41 人間関係を築いたり調整する力 %



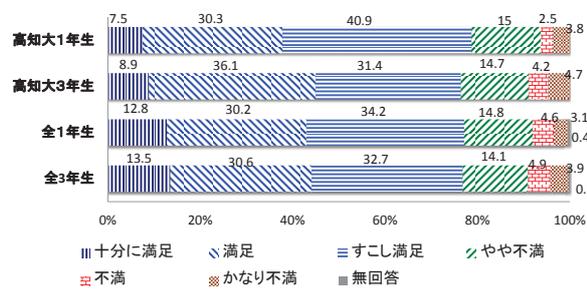
### 42 地域社会が抱える問題への関心や理解力 %



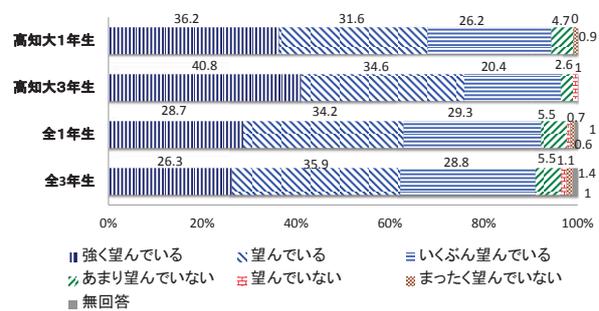
### 56 教育内容と将来の進路との関連性 %



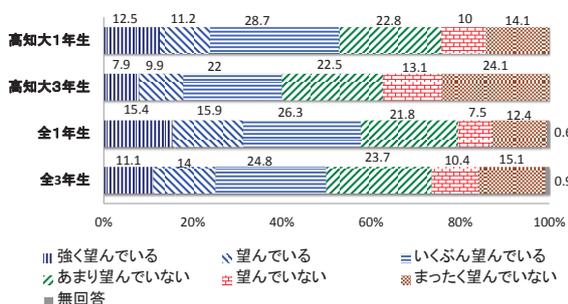
### 65 学内の雰囲気や居心地、環境 %



### 72 専門分野の内容を十分に学ぶ %



### 86 短期の留学や海外語学研修に参加する %



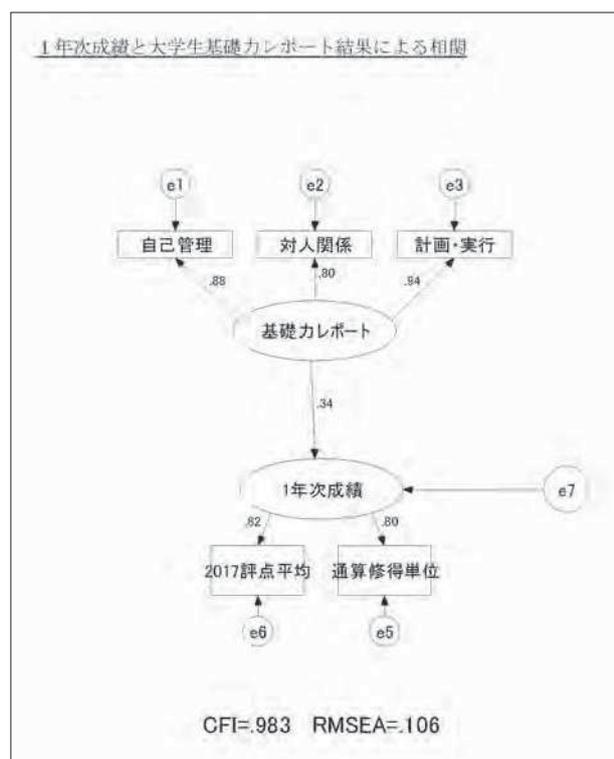
### 2.3.4.6 学修成果と学生生活のデータの分析及び検証

#### (1) 趣旨・目的

学生の実態について把握を行うために、学生の学修成果である成績評価と、学生の自己評価を照らし合わせて検証を行った。学生の自己評価には、本学が開発したセルフ・アセスメント・シートを使用したほか、外部の客観的アセスメントツールとして「大学生基礎力レポート」（ベネッセ i-キャリア社）を利用した。外部の客観テストを用いる理由は、開発したセルフ・アセスメント・シートの妥当性を検証するため、また、本学の学生の状況を全国的なデータと照らし合わせて、本学の実態と他大学の状況を比較検証するベンチマーク的な役割を期待するためである。これらを明らかにするための第一段階として、学業成績と本学がこれまで行ってきたアセスメント、大学生基礎力レポートを紐づけて検証する。

#### (2) 取組内容

4月に新入学生を対象に大学生基礎力レポート及びセルフ・アセスメント・シートによる自己評価を実施した。その結果を用いて、大学生基礎力レポートと1年次第1学期の成績、大学生基礎力レポートとセルフ・アセスメント・シートの関連性について、共分散構造分析により検証した。



#### (3) 結果

##### 1) 大学生基礎力レポートと1年次の成績の検証

大学生基礎力レポートと1年次の成績の関係について、試行的にA学部を対象として、大学生基礎力レポートの経験に関する3つの項目（自我管理、対人関係、計画・実行）をひとまとめにする因子（大学生基礎力レポート）と、1年次の評点平均と修得単位数をひとまとめにする因子（1年次成績）を想定し共分散構造分析を行った。その結果、得られた相関係数は0.34であり、大学生基礎力レポートと1年次の成績との間には弱い相関がみられる<sup>1</sup>。この分析結果は、経験と成績評価の性質は異なるが、経験が学業成績に何らかの影響を及ぼしていることを示すものである。一方、モデルの適合度は、CFI=.983 RMSEA=.106であり、決してあてはまりの良いモデルであるとは言えない<sup>2</sup>。今回の分析は1学部のみでのデータであることから、適合度指標も含めてさらなる分析・検討が必要である。

今後は、大学生基礎力レポートにおける協調的問題解決力の下位構成概念である「経験（自我管理、対人関係、計画・実行）」「批判的思考力」が、学業成績にどのように影響するかについて検証を行っていく。

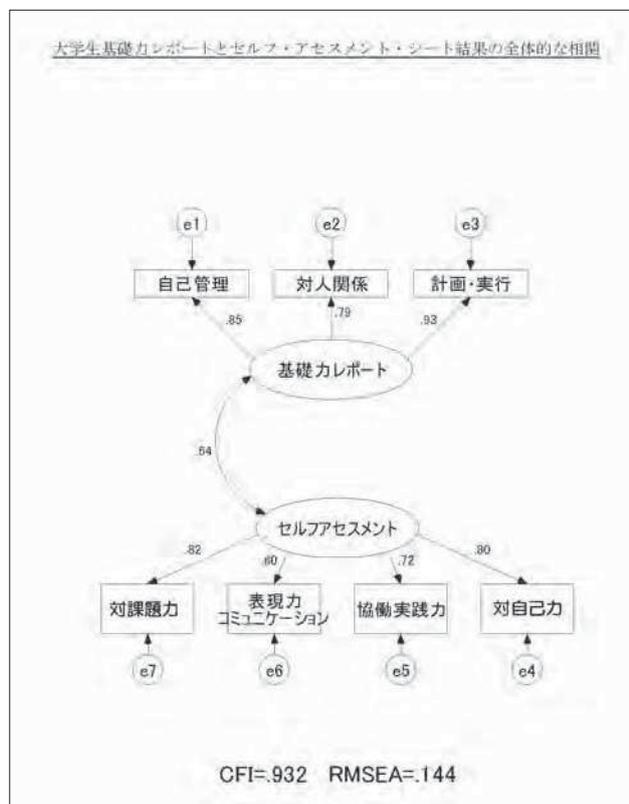
<sup>1</sup> 田中（1996）によれば、相関係数0.34は「弱い相関」の範囲であり、相関係数0.64は「中程度の相関」の範囲である。

<sup>2</sup> RMSEAの値は、「一般的に、0.05以下であれば当てはまりがよく、0.1以上であれば当てはまりが悪いと判断される」（小塩,2007）

## 2) 大学生基礎力レポートとセルフ・アセスメント・シートの検証

大学生基礎力レポートの経験に関する3つの項目（自己管理、対人関係、計画・実行）をひとまとめにする因子（大学生基礎力レポート）と、セルフ・アセスメント・シートの4つの項目（対課題力、表現力・コミュニケーション力、協働実践力、対自己力）をひとまとめにする因子（セルフアセスメント）を想定し共分散構造分析を行った。その結果、両因子の間の相関係数は0.64であった。相関係数の値0.64は、「中程度の相関」の範囲内である<sup>1)</sup>。従って、経験に関する項目と本学のセルフ・アセスメント・シートには、類似性がみられると言える。一方、モデルの適合度指標は、CFI=.932、RMSEA=.144であり、RMSEAの値からはあてはまりの良いモデルとは言えない<sup>2)</sup>。今後再分析を行い、継続的に検証を行っていきたい。

また、下位項目の個々の相関については検証できていないことから、どの項目間に、どれくらいの相関がみられるかについて検証を行うことが必要であり、それにより本学が開発したアセスメントの妥当性が担保できると考えられる。独自尺度開発の課題は、尺度の妥当性であることから、継続して検証を行っていく。



(引用文献)

- ・「実践形式で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データ解析」小塩 真司 著 東京図書 2007
- ・「実践心理データ解析－問題の発想・データ処理・論文の作成」田中 敏 著 新曜社 1996

### 2.3.4.7 平成29年度外部評価委員会の開催

#### (1) 趣旨・目的

高知大学大学教育再生加速プログラム外部評価委員会は、本学AP事業の実施状況や成果に関する客観的・総体的かつ継続的な評価を受けられる体制を構築することで、堅実なPDCAサイクルに基づいた事業推進を行っていくことを目的に設置する。特に、AP事業は、「高大接続改革推進事業」という位置づけとテーマV「卒業時における質保証の取組の強化」の特性から、高等教育に関わる有識者や高等学校の教育を担う高知県教育委員会及び高等学校関係者、高知県内の企業関係者で外部評価委員を構成するとともに、様々な視点からの評価を取り入れるために、本学卒業生や在学生保護者を委員に加えた。委員からの忌憚のない意見を取り入れることにより、「卒業時における質保証の取組の強化」をより良いものにしていき、本AP事業の加速を図っていく。

#### (2) 取組内容

- 1) 日 時 平成30年3月8日(木) 13時30分～16時30分

2) 場 所 高知大学朝倉キャンパス 総合研究棟 2階会議室 3

3) 外部評価委員

氏 名	所 属 等	備 考
谷 富貴	高知県立高知西高等学校 講師	1号委員 高等学校関係者
中野 守康	兼松エンジニアリング株式会社 管理部門 執行役員	2号委員 企業等関係者
小澤 望	平成6年度卒業生（人文学部）	3号委員 本学を卒業した者
光明 千里	教育学部在学学生保護者	4号委員 本学の学部在学生の 保護者
中井 俊樹	愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室 教授	5号委員 実施本部長が指名する 高等教育の有識者
藤中 雄輔	高知県教育委員会事務局 教育次長	5号委員 実施本部長が指名する 高等教育の有識者

(3) 結果

評価項目別の評価結果について示す。委員会終了後に提出された評価委員6人の評価項目別の評価結果は以下のとおりである。

1) 外部評価の視点

- A：十分適切といえる
- B：おおむね適切といえる
- C：どちらともいえない
- D：あまり適切といえない
- E：まったく適切といえない
- (N：判定できない)

2) 評価項目別の評価結果

単位：人

評価項目	A	B	C	D	E	N
1. 事業実施体制の構築（組織関連）	5	1	0	0	0	0
2. グッドプラクティス集の作成	3	1	2	0	0	0
3. 先進モデル校の視察	2	1	1	1	0	1
4. FD・SDウィーク（授業公開週間）の設定	4	2	0	0	0	0
5. 高等学校教員を対象にした公開授業と授業協議会の開催	2	4	0	0	0	0

6. 学生面談に関わるFDの開催	4	1	1	0	0	0
7. プレ・ディプロマ・サブリメントの開発	5	1	0	0	0	0
8. 学修ポートフォリオの開発及び運用	3	3	0	0	0	0
9. 多面的評価指標の施行モデルの分析	2	4	0	0	0	0
10. 卒業生調査及び卒業生就職先調査の実施	0	5	1	0	0	0
11. 卒業生と就職先企業へのインタビュー調査の実施	2	2	2	0	0	0
12. 学修成果と学生生活のデータの分析・検証	2	3	1	0	0	0
13. 全学共通授業アンケートの作成	4	2	0	0	0	0
14. AP事業ホームページ等による広報	3	3	0	0	0	0
15. シンポジウムの開催	4	0	2	0	0	0
16. その他	3	1	0	0	0	2
計	48	34	10	1	0	3

### 3) 委員から次年度への提言・意見

様々な手法を用いてAPに取り組んでおられ、中心に関わっておられる先生方の熱意を感じるとともに、世界に通用する質の高い大学教育につながるものと確信できます。同時に、以前のように学生個人だけでなく、大学側の努力と変革が求められている現状も再認識いたしました。

評価に当たって、大変詳しい資料をいただき、ありがとうございました。ただ、それぞれの取り組みについて、どのような課題に対応する活動か、またどの程度を目標としており、該当年後はどの程度まで達成できたと自己評価しているのか、について、資料または説明があると、APの外部評価がしやすいと感じます。先生方のご負担にならない範囲で考慮していただけたら幸いです。

また、各学部等ですでに実施されているアンケート等があるとのことでしたので、既存のものを利用統合する形で進められるとそれぞれの負担が減るのではないかと感じます。

ひとつひとつの取組は非常に興味深く、意義のあるものであるが、利用率・アンケートの回収率といった面では、物足りなさが否めない。今後、それらの取組をより有効に進めるための検討が必要であると思われる。

- ・まだ始めたばかりで、この事業、取り組みが、どの様に就職した学生に反映されているか、分かりきれない部分はあると思いますが、この事業を進めていくことによって、学生の意識が変わった。この〇〇（例えば授業など）では、こんな取り組みをして、学生たちの意識がこんな風に変わっているというような経過が知りたいと思います。
- ・外部評価に関しては、会議の内容だけでは、学生のことも先生方のこともよく分からないし、評価しづらい項目がたくさんあって、大変でした。
- ・私は、非常勤の先生方にFDをしていただきたいと思います。時間や日程や、賃金の面か

<p>らも難しいとは思いますが・・・。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体としては、大学が卒業、就職してからのことをこんなにも考えて学生を教育して下さっている取り組みを知れて、嬉しく思いました。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学教育の転換に向けて多くの活動に真摯に取り組んでおり、また昨年の外部評価のコメントに対しても誠実に対応している。</li> <li>・各種調査にあたっては、学籍番号を記入させてアンケートを実施してはどうか。多くの大学がすでに実施しており、アンケートの項目数も削減でき、回答していない学生への催促ができ、さまざまな分析ができる。</li> <li>・各種調査の結果によって大学として何を改善したのかを共有することが重要であろう。共有することでその後の調査にも協力してもらえるであろう。</li> <li>・事業の自己評価と外部評価のあり方も検討していただきたい。16の活動にわけて説明いただき、それぞれ評価する形になっているが、目標との関係や重要度などでまとめて示していただけると外部評価も取り組みやすいのではないか。</li> </ul>
<p>取り組んだ成果と課題がしっかりと見えるような提出資料の構成の仕方を考えてほしい。私たちは、応援団なので、もっと昨年よりどう成果が見えてきたのかを知りたい。すべて成果だけではないと思うので、そこに是非助言をして次のゴールに進める支援をしたいと考えている。</p>

全体としてはおおむね良好な評価を得られたと思われるが、各種調査の実施については回収率の低さが特に問題視されている。今年度は紙媒体での調査が中心であったが、今後はWebアンケート等も検討し、各種調査の回収率を上げることが次年度に向けての課題といえる。また、無記名での調査が多く、得られた結果を学籍データ等と紐付けることができている点について指摘があり、多様な分析が可能になるような記名式の調査が実施できるように取り組んでいきたい。

また、最も評価が低かった評価項目は、「先進モデル校の視察」であったが、本項目は、視察結果が出張者以外に反映されていないという指摘があり、出張報告の方法を再検討することが課題といえる。

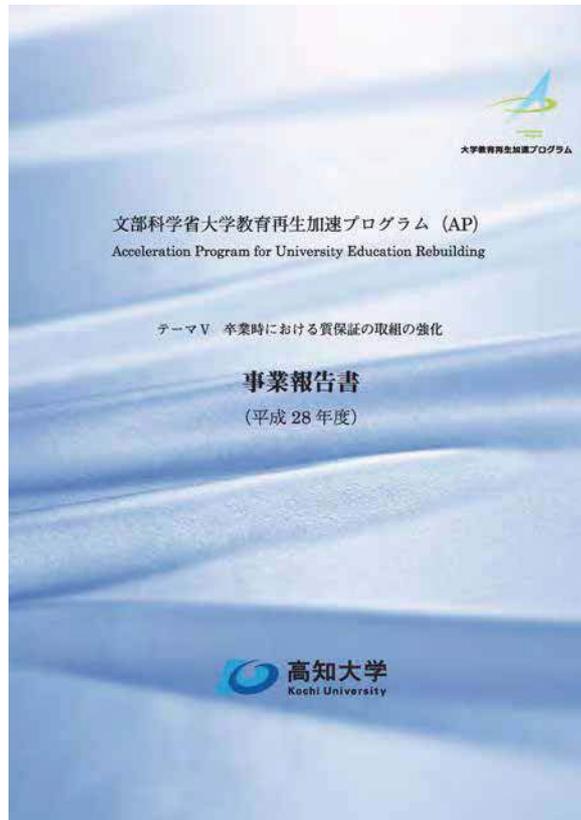
評価項目以外では、外部評価報告書の構成に関わって、取組内容を列挙するだけで、個々の取組の本事業での位置付けが不明であることが指摘されている。今後は、本学のAP事業の3つの柱を軸に個々の取組内容について記載し、事業の目的と取組内容の関係がわかるような構成にするように留意したい。

## 2.4 AP事業の情報発信

### 2.4.1 平成28年度AP事業報告書及びその他刊行物の発刊

#### (1) 平成28年度AP事業報告書

AP事業について、事業概要、事業の背景・位置づけ、平成28年度の具体的な取組と実績について、情報発信もかねて報告書にまとめ、平成29年12月に発刊した。



#### (2) AP事業リーフレットの発行

AP事業リーフレットを2種類作成し、事業成果の普及に努めた。

<地域協働による教育の展開>



# 地域協働による教育の展開

## 大学教育再生加速プログラムとは

AP: Acceleration Program for University Education Rebuilding

大学教育再生加速プログラムは、国が推進する「大学教育再生加速計画」の一環として、教育再生加速プログラムに採択された高知大学が、地域協働による教育の展開を推進する大学教育再生加速プログラムです。

本計画は、地域協働による教育の展開を推進し、地域社会に貢献する人材を育成することを目的として、大学教育再生加速プログラムに採択された高知大学が、地域協働による教育の展開を推進する大学教育再生加速プログラムです。

### 【達成目標】

- 授業外学習時間
  - H20実績: 10,788時間
  - H21目標値: 12,000時間
- 質保証に関するFD-SDの参加率
  - H20実績: 66.6%
  - H21目標値: 70%

### I. 教育改革に向けた意識改革 (対象: 全教職員)

FD-SDフォーラム  
高知大学では、FD-SDフォーラムを開催し、FD-SDの重要性を認識し、意識改革を進めています。

高知大学の改革による大学の発展  
高知大学の改革による大学の発展を促進し、地域社会に貢献する人材を育成しています。

ラーニングコミュニティ  
ラーニングコミュニティを推進し、学生間の協力を促進しています。

### II. 多面的評価指標を外務と共同開発 (対象: 全学生)

高知大学は、多面的評価指標を開発し、授業外での学習成果を評価しています。

10+1の能力とは、

- 専門分野に関する知識
- 表現力
- 人間の文化・社会・自然に関する知識
- コミュニケーション力
- 論理的思考力
- 協働実践力
- 課題探求力
- 自律力
- 語学・情報に関するリテラシー
- 倫理観

これら「10の能力」を統合し、周囲の人や社会に働きかける力

統合・働きかけ

### III. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する (対象: 全学生と卒業生)

e-ポートフォリオ  
e-ポートフォリオを活用し、学生の成長を地域と社会と協働して検証しています。

高知大学 学びSwitch  
10+1でChange Your Learning  
e-ポートフォリオ・KULASを活用しよう!

### <高知大学学びSwitch>

# 10+1の能力を磨き、様々なフィールドで活躍する人材を育成します。

高知大学は、多面的評価指標を開発し、授業外での学習成果を評価しています。

### 10+1の能力とは、

- 専門分野に関する知識
- 表現力
- 人間の文化・社会・自然に関する知識
- コミュニケーション力
- 論理的思考力
- 協働実践力
- 課題探求力
- 自律力
- 語学・情報に関するリテラシー
- 倫理観

これら「10の能力」を統合し、周囲の人や社会に働きかける力

10+1 統合・働きかけ

### 高知大学 学びSwitch

10+1でChange Your Learning  
e-ポートフォリオ・KULASを活用しよう!

Support!

高知大学 学びSwitch  
10+1でChange Your Learning  
e-ポートフォリオ・KULASを活用しよう!

高知大学  
Support University

# 高知大学はあなたの学びと成長をサポートします

(e-ポートフォリオ・KULAS・リフレクション領域)

## 1 e-ポートフォリオ

高知大学は、多面的評価指標を開発し、授業外での学習成果を評価しています。

高知大学 e-ポートフォリオ

高知大学 学びSwitch

## 2 高知大学教養情報システム KULAS クラス

高知大学は、多面的評価指標を開発し、授業外での学習成果を評価しています。

高知大学 KULAS クラス

高知大学 学びSwitch

高知大学

### (3) 高知大学広報誌「Lead」への掲載

高知大学広報誌「Lead」、文教ニュース、学会等様々な方法を用いて、より広くタイムリーな情報発信を行った。

#### 1) Lead2017秋号：授業公開週間「FD・SDウィーク」の実施について



#### 2) Lead2017冬号：平成29年度AP事業シンポジウムの開催について



#### 2.4.2 AP事業ホームページでの情報発信

本事業に関する進捗状況について掲載し、事業成果を含む情報を発信するために、本事業専用のホームページを、平成28年度に開設した。平成29年度も定期的な更新を行い、一人でも多くの人に閲覧してもらえよう工夫を行っている。

<AP事業ホームページ： <http://fdas.kochi-u.ac.jp/kuap/>>



### 2.4.3 SPODフォーラム2017でのポスター発表

平成29年8月23日に徳島大学で開催されたSPODフォーラム2017において、AP事業の3つの取組についてポスター発表を行った。発表テーマは、①AP事業 大学の学びの質保証について（杉田郁代）②e-ポートフォリオを用いた学修支援と学びの可視化（塩崎俊彦）③AP事業 SDウィークの取組について（西田浩敏・黒田さやか）であり、会場では、活発な議論が展開された。



## AP事業 大学の学びの質保証について ~社会人と能力指標の共同開発について~



高知大学 大学教育創造センター 杉田 郁代・塩崎 俊彦・立川 明

### 1. 概要

大学教育再生加速プログラム（AP）事業における高大接続改革推進の取組として、高知大学が育成しようとする人材についての能力指標の開発及びこれに基づいた評価の実施を掲げています。高知大学は10+1（統合・働きかけ）の能力育成を掲げています。この能力を測定するための指標開発に向けて、高等学校関係者や地域・企業と協働して、能力指標の開発に取り組み、質保証の仕組みの構築を行うことを目的とし、平成28年12月から、2回にわたり（平成29年度以降も継続）高知県教育委員会から1名、高知県内の企業から4名に参加いただき、本学教員3名と第1回多面的評価指標開発研究会を開催し、指標を開発しました。開発した指標は、学生を対象に予備調査を実施し、4月の本調査に向けて検討を重ね、4月上旬に全学の1年生に実施した。

ポリシーの分類	具体的な能力	評価方法	コア・コンピタンス（評価方法）
【知識・理解】	専門分野に関する知識	CPA	【統合・働きかけ】 上記の能力を内的に統合し、 周囲の文化・社会・自然・人間 などに外的に働きかけていく能力
	人権の文化・社会・自然に関する知識		
【思考・判断】	対課題 論理的思考力	ルーブリック評価 （フォーム上である）	パフォーマンス評価 （受手社会人等を含まない 人材と協働して開発）
	課題解決力 読書・情報に関するリテラシー		
【技能・表現】	表現力	ルーブリック評価 （フォーム上である）	パフォーマンス評価 （受手社会人等を含まない 人材と協働して開発）
	対人 コミュニケーション力		
【関心・意欲・態度】	協働実践力	地域と協働して開発	パフォーマンス評価 （受手社会人等を含まない 人材と協働して開発）
	自律力 自己 倫理観		

【高知大学が掲げる10の力】

### 2. これまで（平成28年度まで）の能力指標（セルフアセスメントシート）について



これまで高知大学では、課題探求型授業の教育成果と教育効果を測定する能力指標として、セルフアセスメントシートを作成し、平成25年度より実施してきた。その能力指標は、本学の課題探求型学習（アクティブ・ラーニング型授業）で培われると想定される4つのコンピテンシースキルで構成される。質問項目は32項目で、コンピテンシーの4領域に分けられ、回答時間は15分程度である。

能力指標の構成要素は、課題探求力と協働実践力、表現力、コミュニケーション力の4つのコンピテンシーで構成される。

### 3. 社会人とのアセスメントの開発過程について

本研究会は、これまで2回開催された。第1回目は、授業参観と研究会のパートで構成し、授業参観では、アクティブ・ラーニング型授業である課題探求実践セミナー「自由探求学習II」において、学生グループによる第2回中間成果プレゼンテーションの様子を参観しました。

研究会では、「本事業のねらいや学生の振る舞いを評価するための評価指標の開発」をテーマに、自由探求学習IIの授業担当教員から授業の進め方等について説明を行い、社会人の目から見たプレゼンテーションの評価や、本学が掲げるスキルと実際に社会の現場で求められている人材との整合性を検討した。1回目の議論から得られた知見を基に、具体的な能力指標を作成し、2回目はその能力指標について協議を行った。



### 4. 新版・セルフアセスメントシートについて



学生への説明文書



新版・セルフアセスメントシート

新版・セルフアセスメントシートでは、高知大学が掲げる10+1の力のうち、**論理的思考力と課題解決力、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、倫理観、統合・働きかけ**の8カテゴリー24項目を自己評価式で測定する。

このシートは、平成29年4月に全学の1年生を対象に実施した（受検率95%）本シートの詳細な分析および構造等については、10月28日に開催されるAPシンポジウムの会場において発表予定である。

# e-ポートフォリオを用いた学修支援と学びの可視化 ～大学教育の質保証のために～

キーワード：e-ポートフォリオ 学修支援 学びの可視化 IR

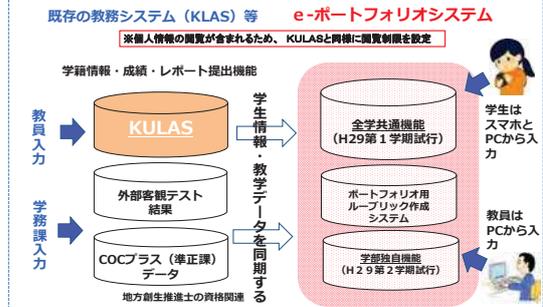
高知大学 大学教育創造センター 塩崎俊彦・杉田郁代・立川明

## 趣旨と目的

高知大学では、平成28年度概算要求事業「地域協働を核とした教育を推進する上で必要な教育の質の保証を担保するための体制整備」の一環として、e-ポートフォリオによる学修成果の可視化と、これを用いた学修支援体制の構築に取り組んでいます。

- e-ポートフォリオを導入する目的は、以下のようものです。
1. 既存の教務システム（KULAS）に集積された学生の成績・履修状況と正課外の学生の取組等を一元的に集約し、わかりやすく表示する。
  2. 学生はこれを用いて、自らの学びを振り返り、目標設定（Plan）→実行（Do）→振り返り（Check）のサイクルを意識しつつ学びを継続する。
  3. 教員はこれを用いて、学生の学びの足跡を把握しながら、面談等を通して、より綿密な学修支援を行う。
- 平成29年度第1学期より、「全学共通部分」（右図）が稼働しています。4月当初より学生・教員に対する操作説明会を実施するなど、全学的な利用に向けた取組を重ねています。
- また、e-ポートフォリオに集積されたデータは、教学IRのための貴重なデータであり、これを活用した教育改善を行うことも検討しています。

## e-ポートフォリオシステムの概要



## e-ポートフォリオの画面

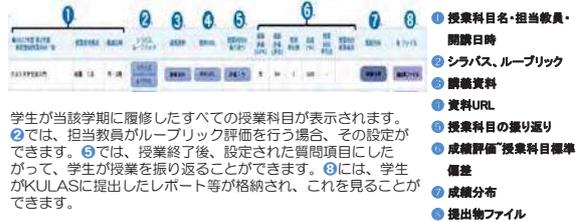
※ e-ポートフォリオは原則として学生とアドバイザー教員のみが閲覧できるよう管理されています。  
※ 改修中の部分もあり、実際の画面と異なることがあります。

### 1) ホーム画面（学生・教員）



- 1 プロフィール
  - 2 表示年度・学期
  - 3 履修登録授業科目一覧
  - 4 卒業時に達成していきたい目標
  - 5 2017年度第1学期の学修目標
  - 6 2017年度第1学期の履修振り返り
  - 7 2017年度末の総合振り返り
  - 8 アドバイザー教員
  - 9 学生生活記録
- ④は入学時に、4年間の大学生活をどのように過ごすかについて、少し時間をかけて学生が考え、目標を立てます。初年次科目の授業などを利用して、目標設定のための指導が行える体制を検討しています。⑤はそのために第1学期にはどのようなことを目標とするか、⑥は、第1学期の成績などを見ながらその振り返りを書くこととなります。⑦にはアドバイザー教員（指導担当）の名前と、アドバイザー教員から連絡があった場合には、その内容が表示されます。

### 2) 履修状況（学生・教員）



- 1 授業科目名・担当教員・開講日時
  - 2 シラバス、ルーブリック
  - 3 講義資料
  - 4 資料URL
  - 5 授業科目の振り返り
  - 6 成績評価・授業科目目標達成
  - 7 成績分布
  - 8 提出物ファイル
- 学生が当該学期に履修したすべての授業科目が表示されます。  
②では、担当教員がルーブリック評価を行う場合、その設定ができます。⑤では、授業終了後、設定された質問項目にしたがって、学生が授業を振り返ることができます。⑥には、学生がKULASに提出したレポート等が格納され、これを見ることができます。

### 3) 学生生活記録



- 1 準正課活動
  - 2 部活動・サークル活動
  - 3 ボランティア活動
- ④ マイスター  
学生が日記風にメモを残すことができます。公開・非公開を選択できます。
- 学生がそれぞれの活動記録やその画像を残しておきます。エントリーシートの作成などに役立ちます。

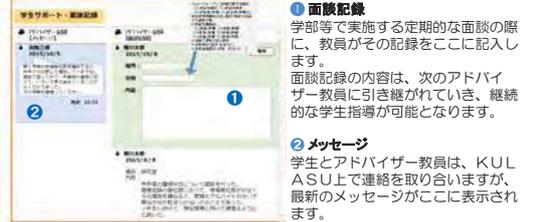
本発表の資料作成にあたっては、高知大学学務部学務課、中村朗香さん、中城 さんに協力いただきました。E-ポートフォリオの開発は、(株)ソフテック（高知県南国市）が行っています。

### 4) 成績分布（学生・教員） ※2)のボタンを押すとこの画面が表示されます。



- 1 前学期の成績分布：前学期の成績（優・良・可・不可）が表示されます。
  - 2 これまでの成績の累積：入学後の成績の累積が表示されます。
  - 3 GPA・修得単位数の推移
- ＜データ表示について＞
- 縦軸(左)：GPA / 折れ線グラフ ●縦軸(右)：修得単位数 (累積) / 棒グラフ
  - 横軸：修得年度・学期
  - 棒グラフにマウスを合わせると、累積単位数がポップアップ表示されます。
  - 折れ線グラフは各項目（共通教育科目・専門科目・全科目）をクリックすることで、各折れ線グラフの表示・非表示を切り替えることができます。

### 5) 学生サポート・面談記録（教員）



- 1 面談記録  
学部等で実施する定期的な面談の際に、教員がその記録をここに記入します。面談記録の内容は、次のアドバイザー教員に引き継がれていき、継続的な学生指導が可能となります。
- 2 メッセージ  
学生とアドバイザー教員は、KULAS上で連絡を取り合いますが、最新のメッセージがここに表示されます。

### その他の機能

外部客観テストの結果・セルフ・アセスメント・シートの結果の表示  
学生のコミュニケーション力や協働実践力などの諸能力の成長をレーダーチャートなどでわかりやすく表示し、学生の成長を跡付けます。  
進路希望調査など  
学生が進路希望などを入力し、キャリア形成に関わる情報をこの集約し、アドバイザー教員と共有します。



# AP事業 SDウィークの取組について

高知大学学務部学務課教育支援室

西田浩敏・黒田さやか



## 背景・目的

- 平成28年7月、本学は文部科学省の平成28年度大学教育再生加速プログラム(AP)高大接続改革推進事業「テーマV 卒業時における質保証の取組の強化」に採択(～平成31年度)され、事業を通して**本学の教育全般にわたる質保証について教職員の意識改革を目指していくこととなった。**
- また、SDの義務化が大学設置基準に定められ、中教審の答申『学士課程教育の構築に向けて』においても「大学職員は、大学の管理運営に携わる、また、教員の教育研究活動を支援するなど、重要な役割を担っている。〈略〉大学経営をめぐる課題が高度化・複雑化する中、職員の職能開発はますます重要となってきた」とあるように、職員の職能開発が求められている。一方、審議まとめ『大学のガバナンス改革の推進』によると、「教職協働」という新しい視点が求められており、大学が組織的な研修・研究を実施することの重要性も併せて示されている。
- これらを受け、**全教職員を対象とした授業公開週間「FD・SDウィーク」を実施し**、教育の中の大きな柱である「授業(講義)」を、**全教職員が参観する機会を設けることで、教員は「教育改善(=FD)」、職員は「大学運営への理解及び業務への反映(=SD)」の促進を目指すこととした。**  
このFD・SDウィークのうち、今回は、**SDウィーク**についてスポットを当て報告を行う。



## FD・SDウィーク概要

毎年期間を定めて実施し、期間内に、本学の**教員・事務職員等が本学の授業(公開授業として登録されたもの)を参観する**。参観者は、参観後に参加記録(授業に対するコメント)を提出し、提出されたコメントは、同じ授業の参観者及び公開者で共有する。

【対象者】高知大学所属教員、高知大学常勤の事務・技術職員(医療職を除く)

【実施期間・公開授業科目数】

平成28年度:平成28年11月14日(月)～平成29年1月20日(金)、科目数:34科目 延べ92回開講

平成29年度:平成29年6月12日(月)～平成29年7月31日(月)、科目数:42科目 延べ99回開講

※eラーニング科目は1回として集計

## 方法

FD・SDウィーク用にWebページを立ち上げ、**参観申込からコメント記入までを専用ページで実施した。**手順は以下のとおりである。

①**予約**:授業参観者は、専用サイトにて希望の公開授業に参観を申込

②**参観**:所定の期間内に授業を参観

③**参観記録の作成**:参観者は、参観後に以下の設問にそってコメント(匿名)を記入

【平成28年度SD設問項目】※平成29年度SD設問項目は5)のみ同一

- 参観した授業について、講義の教育方法や学習形態等について、特に印象に残ったことはどのようなことですか。
- 参観した授業で、学生の様子について、気がついたことはどのようなことですか。
- 参観した授業が行われた教室の環境の整備や設備について、気がついたことはどのようなことですか。
- 授業を参観して、あなたの日常の業務と高知大学の教育(授業)や学生生活はどのように関連していると思えましたか。
- この取組は、あなたの大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となりましたか。(5段階択一)

④**授業改善記録の作成**:授業公開者は、参観者の参観記録に対してコメントを返却(任意)



授業参観登録ページ



## 結果

	参観申込者		コメント登録 (延べ件数)	参加率 (参観申込実人数/ 対象職員数)
	延べ人数	実人数 ※		
平成28年度	221人	196人	164件	56.6%
平成29年度	245人	236人	195件	75.9%

※複数回にわたり参加した職員がいるため、実人数を表記した

### 【択一式質問】

この取組は、あなたの大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となりましたか (5段階択一式)

【平成28年度】



【平成29年度】



## コメント抜粋

・大学における授業は、民間企業でいう所の生産現場だと思うが、**現場を知ること**で**日常の業務にも、新たな視点で取り組むことができる**のではないかと思う。

・教員研究支援の業務をしており、**研究の成果が学生教育にどのように結びつけているかその一端を理解することが出来たと感じた。**

・**大学教育への理解の促進につながる貴重な機会**と思います。

・教員に関わる事項は、これまで大学の聖域扱いとされ、事務職員が口を挟める状況にはなかった。**本取組は大学構成員すべてが、教育への関心を広げ、質保証を高めるための優れた取り組みである**と思う。

業務への反映  
自己啓発

大学教育への理解  
今後の課題

・**授業を受講するという貴重な体験**ができることは、授業に関わらない部署の者にも役立ちます。

・年に1、2回この様な機会があれば自らが働く大学を知るきっかけとなり、**事務職員が「大学」で仕事をしていることを意識**できる良い取組だと思います。

・**参観できる授業をもっと増やしていただけたら嬉しい**です。

・学生の邪魔になってはいけないと思い、授業中あまり参観者に対して話をしなかったが、グループワークの時には学生も話し合いをしているので、**参観者同士もっと意見交換をしてもよかった**かもしれない。

## 考察・まとめ

・実施2年目を迎え、参加率が約57%から約76%、コメント登録件数が164件から195件に上昇した。この結果から、SDウィークの認知度の上昇、また、能力及び資質を向上させるSD研修に対する職員の関心の高さが窺える。

・「SDウィークが、大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となったか」という設問に対して、平成28年度は回答者の約82%、平成29年度は回答者の約81%から「強く思う」「そう思う」と回答があり、本取組を肯定的に捉えている職員が多いことがわかった。

・コメントからも、実際に授業を参観することで、大学教育への理解を深めることができるほか、日々の業務を俯瞰的に捉えることができる効果があると推察される。

・授業数や参観環境等に関する改善要望があり、今後の実施に向け、引き続き検討が必要である。



## 2.4.4 シンポジウムの開催

### (1) 趣旨・目的

「卒業時における質保証の取組の強化」と題し、AP事業テーマV採択校の茨城大学、日本福祉大学、山形大学との共催で、地方の総合大学における大学教育の質保証について、本学で得られた成果を全国の国公私立大学等に情報発信するとともに、課題の検証を行うことを目的にシンポジウムを開催する。

### (2) 取組内容

1) 日 時 平成29年10月28日（土）12：00～17：10 （受付 11：30～）

2) 場 所 東京国際交流館 プラザ平成3階 国際交流会議場  
（東京都江東区青海2-2-1）

### 3) プログラム

#### <ポスター発表>

12：00～19：30（うち、12：00～12：45（45分）ポスター発表在席時間）

ポスター発表参加校 AP事業テーマI～V採択校 16校

#### <シンポジウム>

13：00～13：15 開会挨拶 脇口 宏（高知大学長）

13：15～13：45 基調講演Ⅰ

「近年の高等教育政策と大学教育再生加速プログラム（AP）」

河本 達毅 氏（文部科学省高等教育局大学振興課 大学改革推進室  
改革支援第二係長）

13：45～14：00 幹事校挨拶 中村 信次 氏（日本福祉大学全学教育センター長・  
教授/AP事業推進委員長）

14：00～14：45 基調講演Ⅱ

「大学教育改革の近未来を考える～正攻法かイノベーションか～」

川島 啓二 氏（京都産業大学 共通教育推進機構・教授）

14：45～15：00 -休憩-

15：00～15：20 事業報告Ⅰ 畷田 敏行 氏（茨城大学全学教育機構・准教授）

15：20～15：40 事業報告Ⅱ 浅野 茂 氏（山形大学学術研究院（企画部）・教授）

15：40～17：00 パネルディスカッション ※高知大学の事業報告含む

「IR、ディプロマ・サプリメントの有用性と学修成果の質保証」

パネリスト：文部科学省 河本 達毅 氏、

京都産業大学 川島 啓二 氏、

茨城大学 畷田 敏行 氏、山形大学 浅野 茂 氏、

高知大学 藤田 尚文（理事（教育・附属学校園担当）

/AP 事業実施本部長）

コーディネーター：日本福祉大学 中村 信次 氏

17：00～17：10 閉会挨拶 藤田 尚文

### (3) 結果

1) 参加者 169名（講師5名、学外者138名、高知大学教職員26名）

#### 2) アンケート結果

##### <職種>

参加者169名の内、76名からアンケートの回答があり、その職種は下表の通りである。

職 種	参加者数	アンケート回答者	
		人数	割合
①国公立大学 教員	47	17	22.4%
②国公立大学 職員	26	14	18.4%
③私立大学 教員	32	15	19.7%
④私立大学 職員	38	17	22.4%
⑤短期大学/高等専門学校 教員	4	4	5.3%
⑥高等学校 教員	1	1	1.3%
⑦企業	8	6	7.9%
⑧団体	8	1	1.3%
⑨官公庁	5	1	1.3%
合計	169	76	100%

##### <シンポジウム全体の感想：択一>

選択肢	人数（人）	割合（%）
④とても参考になった	36	47.4
③参考になった	33	43.4
②どちらともいえない	5	6.6
① 参考にならなかった	0	0
無回答	2	2.6
合計	76	100

シンポジウム全体の感想では、とても参考になったと回答したのが47.4%、参考になったと回答したのが43.4%であり、回答者の90.8%から肯定的な回答を得られた。

<シンポジウム全体の感想：自由記述（一部抜粋）>

ディプロマ・サプリメントをキーワードに、質保証の理解が深まった。
APプログラムに関連する取組について学ぶ貴重な機会をいただいた。
卒業時の質保証への概念が各大学で多様な定義があることを理解できた。
様々な立場の方たちによる質保証に対する考え方や背景を知った。
講演、報告、パネルディスカッションはもちろんですが、ポスターセッションも充実しておりすばらしかったです。勉強になりました。
卒業時の質保証に取り組んでいる複数の大学の先進的な事例を拝見することができて、参考になりました。
学修成果を可視化するためにどのようなプロセスでこの問題を考えていけるのか？考えるための視点と問題を教えていただいたと思います。
藤田先生が率直に学内の課題（ディプロマ・サプリメントの様式について）を共有して下さったことで、全体の議論が表面的にとどまらず、とても深まったように思います。ありがとうございました。
課外活動として、学生の学修成果の具体例の事例発表があればよかったと思われる。

<高知大学のAP事業の取組について>

大変参考になりました。ありがとうございました。
高知大学のAP事業について、もっと聞きたかったです。時間切れで残念でした。
おつかれさまでした。ありがとうございました。
少ない人数での取組、苦勞も多いと思いますが、ぜひ推進していただきたいと思います。応援しています。
多面的に実行されており、とても参考になります。
お恥ずかしながら、今年4月に大学に入職したのですが、本学がAP事業になぜ手を挙げていなかったのか、とても疑問です。後2年で終わるということですが、引き続き募集をしていただきたいと思います。
日頃の業務改善に結びつく、良い情報の多いシンポジウムでした。ありがとうございました。
企画そのもの、発表者+登壇者ともにパッションが伝わってきて大変良かったです。所用があり、懇親会に参加できず申し訳ありませんが、参加して本当によかったです。他大学になりますが、中村先生の司会が見事でした。お疲れ様でした。

(シンポジウム資料：資料集P109)

<シンポジウムの様子>



<ポスターセッション>



<挨拶・講演>



挨拶：高知大学長 脇口 宏



基調講演Ⅰ：文部科学省  
河本 達毅氏



幹事校挨拶：日本福祉大学  
中村 信次氏



基調講演Ⅱ：京都産業大学  
川島 啓二氏



事業報告Ⅰ：茨城大学  
畷田 敏行氏



事業報告Ⅱ：山形大学  
浅野 茂氏



事業報告・閉会挨拶：高知大学  
藤田 尚文

<パネルディスカッション>



## 2.5 先進モデル校の視察

平成28年度から継続して、AP事業に関わる先進的な事例について調査を行うため、各学部選出の教育ファシリテーターを含む教職員が、先進的な取組を行う大学のシンポジウムや研修会に参加し、本学AP事業に還元できる知見を得た。また、本年度は本学で発行を予定しているディプロマ・サプリメントの調査のため、フィンランドにある3大学の視察を行った。国内だけでなく、海外の先進的な事例や取組を学ぶことを通して、本学の現状の課題分析を行うとともに、先進校のノウハウを本学の特性に合わせて取り入れ、質保証の取組強化に生かしていく。

### (1) 国内先進モデル校視察一覧

内容	視察日	主催・共催 (開催場所)
第1回 AP フォーラム 「地域が求める人材育成を目指して」	7月29日	松本大学松商短期大学部 (松本大学 232 教室)
大学教育再生加速プログラムテーマV 第1回地域別研究会	8月31日	日本福祉大学 (日本福祉大学名古屋キャンパス)
AP シンポジウム「直接評価の第一歩～基盤力テストの実施と活用に向けた取組」 及び第11回 EMIR 勉強会	9月21日	主催：山形大学 共催：大正大学 (大正大学5号館 531 教室)
AP 中間報告会 「達成度評価の確立と学修成果の可視化」	11月10日	八戸工業大学 (東京国際交流館)
AP シンポジウム 「高等教育に求められる質保証を考える」	2月16日	大学教育再生加速プログラム テーマII・V採択校 (品川 THE GRAND HALL)
AP 合同フォーラム 「第3期認証評価に向けて：学生の成長に寄与する内部システムの構築」	2月26日	大阪府立大学・大阪市立大学・ 関西大学 (関西大学梅田キャンパス)

### (2) 海外視察報告：フィンランド3大学

#### 1) 目的

欧州では、単位の互換性や学生・教職員の流動性を高めることにより、国境を越えて共同体としての結びつきを強め、欧州高等教育圏を確立しようとしている。この一環で、教育の国際的な通用性に向けた様々な取組が行われており、共同教育プログラムの展開やこれらの質保証における取組についても、国を超えた枠組みや制度が協働で策定されている。主な質保証の取組は「欧州単位互換制度」「ディプロマ・サプリメント」「欧州チューニング」である。

これらのことから、本学でディプロマ・サプリメントの導入を検討するための資料を収集することを目的として、フィンランドのヘルシンキ大学（9月25日）、ユバスキュラ大学（9月27日）、タンペレ大学（9月29日）の視察を行う。

## 2) 視察報告

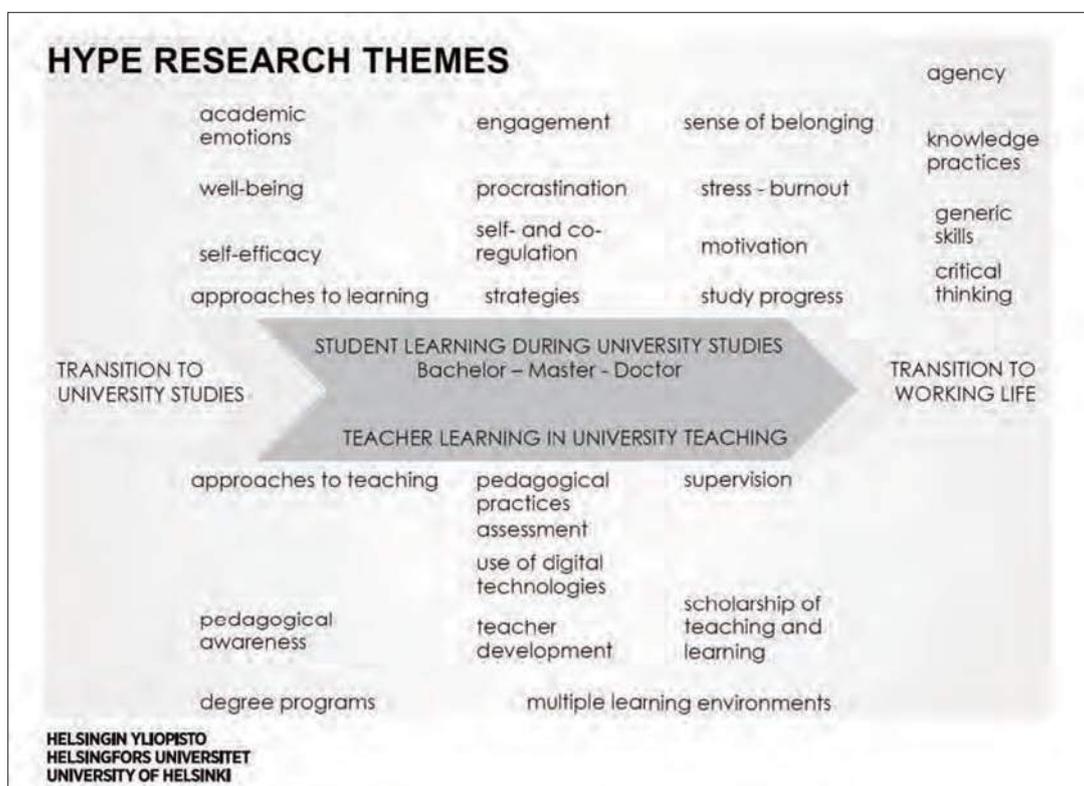
### ①フィンランドの大学における質保証について

フィンランドの大学は法律で外部からの評価が必要であると定められており、2004年から導入されたヨーロッパカリキュラムに基づいて評価を行っている。2014年には、首都ヘルシンキにフィンランド教育評価センターが設置され、教育評価が重視されるようになった。評価の内容は、学位の輩出、研究、社会貢献などで構成されており、学生の質と研究結果について検証を行っているが、その結果を重視するのではなく、プロセス評価に重きを置くことが特徴である。

また、外部評価と同様に内部監査も大切にしており、大学ごとに一定のトレーニングを受けたコーディネーターを配置し、ヨーロッパのボローニャ・プロセスに基づいて内部監査を行い、質保証を進めている。

### ②ヘルシンキ大学での質保証の取組「How U Learn」について

ヘルシンキ大学では、学生の学びの質について検証を行うために、2007年より学生の学修成果に関わるアセスメント「How U Learn」を導入しており、項目は下図の26分類で構成されている。主に、教員の授業に関わる指導方法の改善を目的として、全学の学生を対象に、デジタルシステム（ポートフォリオ）内で実施されている。学生ごとの成績評価等を用いて、いくつかのグループに分け、そのグループごとに学修に関する検証を行う。



結果はポートフォリオ上で学生に返却し、教員と大学にフィードバックしている。また、学生はその結果を心理的カウンセリングや面談等に使用することができる。

現在は学生に年間複数回の調査を行っているが、今後は授業ごとに検証したいとのことであった。

### ③ディプロマ・サプリメントについて

ヨーロッパのディプロマ・サプリメントは、学生が取得した学位・資格の内容について示した統一的な様式による説明書であり、1999年のボローニャ宣言において提案された。欧州高等教育圏の構築を推進するボローニャ・プロセスのもと、欧州で国境を越えた教育の提供と学生の流動が活発化し、国外で取得した学位・資格の認定が課題となる中、共通様式のディプロマ・サプリメントは、資格に関する公的かつ透明性がある説明文書としての役割を持っている。

視察した3大学でも、ヨーロッパで定められた共通の様式に沿ってディプロマ・サプリメントを作成し、学位記と共に発行していた。ディプロマ・サプリメントの位置づけは学位記の補足書であり、フィンランド国内の学士課程と修士課程の修了者全員に配付されているとのことであった。また、国際的に活用することを目的としているため、内容はすべて英語で表記されていた。

ディプロマ・サプリメントに記載される情報は下記のとおりである。

- ・学位・資格の取得者に関する情報
- ・学位・資格の基本情報
- ・学位・資格のレベルに関する情報
- ・プログラム内容と学習成果に関する情報
- ・学位・資格の機能に関する情報
- ・その他の追加情報
- ・ディプロマ・サプリメントの発行に関する情報
- ・当該国の高等教育制度の概要

### ④本学のディプロマ・サプリメント導入に向けて

本学では、学修成果の可視化と教育の質保証のため、卒業生全員にディプロマ・サプリメントを交付することを検討している。

本学におけるディプロマ・サプリメントは、学位記を補足し、学位記や成績証明書では確認することのできない本学卒業生の在籍時における学修履歴とその質を保証することを目的として発行し、教育課程（カリキュラム）に加えて、評点の基準、学業評価などの具体的な学修内容及びそれによって得た資格等の記録を標準化された表記により証することとしている。

本学のディプロマ・サプリメントは、今回視察した3大学の書式、すなわちEUが開発したディプロマ・サプリメントを参考に作成するが、その目的は学生モビリティの向上に資する国際通用性よりも学修内容の証明という点が重視されることから、EUのディプロマ・サプリメントとは異なる様式となる予定である。さらに、ディプロマ・サプリメントを公文書として発行するかどうかについても今後検討を重ねていきたい。

また、在学中から、卒業時における自身の到達目標を意識させ、形成的評価としてプレ・ディプロマ・サプリメントという位置づけで、学修の振り返りや目標設定等を支援し、就職活動等における自己分析にも活用できるものとして、e-ポートフォリオ内にこれまでの学修記録や成果等を一画面に集約して随時確認できる「ポートフォリオサマリー」を構築した。今後はプレ・ディプロマ・サプリメントとディプロマ・サプリメントで在学時から卒業まで一体的な教育の質保証を図っていく。

<視察の様子>

●ヘルシンキ大学



●ユバスキュラ大学



●タンペレ大学



---

## 第3章 資料集

---

### 3.1 本報告書で使用する用語・略語

**ディプロマ・ポリシー** … 「卒業認定・学位授与の方針」（文部科学省，2016）

「学位授与に関する基本的な考え方について、各大学等が、その独自性並びに特色を踏まえ、まとめたもの。この方針において、卒業（修了）生に身に付けさせるべき能力に関する大学の考えを示すことにより、受験者が大学を選択する際や、企業等が卒業（修了）生を採用する際の参考となる。機構の認証評価では、同方針について明確に定めそれに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され有効なものとなっているかを評価する。（大学評価・学位授与機構，2016）」

**ルーブリック評価** … 「評価水準を示す「尺度」と、各段階の尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。学習を評価する際の規準の様式。どのような内容が習得されていればその尺度に達しているかの判断ができるよう、各尺度の説明は記述形式で表される。そのため、定量的に表しにくい、パフォーマンスの評価等、定性的なものとの評価の際に活用される。（大学評価・学位授与機構，2016）」

**パフォーマンス評価** … 「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能などを用いて行われる人のふるまいや作品を、直接的に評価する方法（松下，2007）」

**FD（ファカルティ・デベロップメント）** … 「教員が授業内容方法を改善し、教育力を向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。大学設置基準により、FD活動の実施が義務化されている。（大学評価・学位授与機構，2016）」

**SD（スタッフ・デベロップメント）** … 「大学等の管理運営組織が、目的・目標の達成に向けて十分機能するよう、管理運営や教育・研究支援に関わる事務職員・技術職員又はその支援組織の資質向上のために実施される研修などの取組の総称。（大学評価・学位授与機構，2016）」

**IR（インスティテューショナル・リサーチ）** … 「高等教育機関において、機関に関する情報の調査及び分析を実施する機能又は部門。機関情報を一元的に収集、分析する事で、機関が計画立案、政策形成、意思決定を円滑に行うことを可能とさせる。また、必要に応じて内外に対し機関情報の提供を行う。（大学評価・学位授与機構，2016）」

**アクティブ・ラーニング（能動的学修）** … 「一方向性による知識伝達型の学修方法ではなく、学修者が能動的に学修する方法やそのプロセス。問題解決能力、批判的思考力、コミュニケーション能力といった汎用的能力の育成を図ることが期待される。（大学評価・学位授与機構，2016）」

**アドバイザー教員** … 高知大学では、学生が大学生活を円滑に進められるように、アドバイザー教員制度を設けている。アドバイザー教員は、本学の専任教員が担当し、履修計画及び進学・就職・健康や心配事等日常的な結びつきを重視し、学生生活全般に係る問題について助言指導するものとして位置付けている。

#### 引用文献

- ・「高等教育に関する質保証関係用語集」大学評価・学位授与機構 2016
- ・「パフォーマンス評価による学習の質の評価 ―学習評価の構図の分析にもとづいて―」松下佳代 著 京都大学高等教育研究第18号 2012

## 3.2 AP事業の取組内容とスケジュール

### 【平成29年度】

- (1) 理事（教育・附属学校園担当）兼副学長を本部長とした「大学教育再生加速プログラム事業実施本部」を中心拠点とした事業の実施体制を継続する。
- (2) 本事業を推進させるために、質保証に関わる教務情報システムの整備や本事業に関わる一連の作業を行うコーディネーター（事務補佐員）1名を雇用し、大学教育創造センターに配置する。
- (3) 教育改革に向けた意識改革に関わる計画
  - 1) 全学のアクティブ・ラーニングの実施状況の実態調査の報告を行うとともに、グッドプラクティス集を作成刊行し、教職員のアクティブ・ラーニングに対する理解と情報共有を進めていく。
  - 2) 先進モデル校の視察（各学部選出のFDeerである教育ファシリテーターを含む）
  - 3) 平成28年度に設置した各学部の教育ファシリテーション委員会が、大学教育再生加速プログラム事業実施本部及び大学教育創造センターのワーキングチームの協力のもとFDを企画・開催する。
  - 4) 平成28年度にディプロマ・ポリシーに基づいた10の能力(コア・コンピテンシーなど)とメタ・コンピテンシーを検証する方法として開発した多面的評価指標について分析・検証を行う定例会を開催し、随時報告する。
  - 5) 平成28年度に開始した教職員の意識の共有化のためFD・SDウィーク（授業公開週間）を継続する。また、高大接続の視点から、高知県内の高等学校教員に呼びかけて公開授業と授業協議会を行い、併せて外部講師によるワークショップを開催する。
  - 6) 教員のアクティブ・ラーニング授業実践の交流のための教職員プラットフォームをLearning Management System上に構築する。
  - 7) 面談技法の共有化を図るため、学生面談に関わるFDを開催する。
  - 8) 卒業時の質保証に向けた形成的評価の節目としてのリフレクション・セメスターを、3年次第1学期に実施する。学生総合支援センターの教職員とアドバイザー教員が支援し、学修成果についての自覚を促し、自分の強みを意識して社会に貢献できる力の集大成に向けて準備する。また、実施後には報告FDを開催する。
- (4) 多面的評価指標の開発に係る試行と運用開始

- 1) 再構築した教務情報システムと学修ポートフォリオを試行し、開発した多面的評価指標の運用を開始する。また、教員や学生に学内説明会を開催するとともに、学生用マニュアルを作成し、学生に配布し学生の活用が促進するように取り組んでいく。
  - 2) 多面的評価指標の試行的モデルの調査を実施し、他の教学データとともに紐づけし、その指標の信頼性・妥当性について分析・検証する。
  - 3) 本事業の学生への効果を検証することを目的とした、学生のコンピテンシーに関わる外部の客観テストを実施する。なお、対象は1年次と3年次の学生とする。また、その結果をFD・SDウィークで報告する。
  - 4) お茶の水女子大学が主催する教学比較IRコンソーシアムズに参加し、学修行動調査を実施し、本学と他大学の状況について比較検討する。
  - 5) 本事業で行った多面的評価指標と客観テスト、学修行動調査を一元化し、その結果についてIRerが分析・検証し、全学機関であるIR・評価機構に報告する。
- (5) 学外の多様な人材との協働による助言・評価の仕組みの構築
- 1) 平成28年度に引き続き、前年度の卒業生とその就職先への調査を実施し、前年度との比較検討を行い報告する。
  - 2) 地域である高知県内と首都圏に就職した卒業生とその就職先企業へのインタビュー調査を、ベネッセ教育総合研究所との共同研究として実施し、分析・検証を行う。
  - 3) ベネッセ教育総合研究所との共同研究に関わる調査報告会の開催と中間報告書の作成、共同研究者と学会発表を行う。
- (6) IRを用いたPDCAサイクルの構築
- 1) 学内にある学生の学修成果に関わるデータと学生生活に関わるデータを一元化し、本学の学生の学修成果に関わる分析・検証を行う。
  - 2) 1年次と3年次を対象に学生の大学生活等の満足度調査とセルフアセスメント調査を実施し、分析・検証する。
  - 3) これまで全学で統一できていなかった授業評価について見直しを図り、全学統一の授業評価アンケートを実施する。
  - 4) AP事業での成果と分析・検証を行った結果について学内報告会を開催し、AP事業で行った全学的な調査と他大学との分析結果を報告するとともに報告書として提出する。
  - 5) 本事業のホームページを定期的に更新し、他大学・短期大学・高等専門学校に向けて情報発信に努める。
  - 6) 本事業で得られた情報とその周辺にある学務情報を連携させて、自己点検を行い、本事業の検証を定期的・恒常的に行っていく。また、平成28年度設置済みの、本学に関わるステークホルダーを中心に組織する外部評価委員会を平成29年度も開催する。外部評価委員会は、学内の自己点検レポートを配信し、本事業に関わる情報共有を図っていく。
  - 7) 全国の大学・短期大学・高等専門学校へ本事業を普及させるための活動の一環として、質保証に関わるシンポジウムをAP採択校と合同で開催する。
  - 8) SPODフォーラムにて、これまでのAPの成果についてポスター発表を行うとともに、開発したルーブリックの研修会を開催し、本事業の取組状況について発信する。

### 3.3 平成29年度FD・SDウィーク報告書

平成 29 年 12 月 27 日

#### 平成 29 年度 FD・SD ウィークの実施結果について（報告）

高知大学大学教育創造センター

#### 1. FD・SD ウィークの趣旨と目標

【趣旨】教育改善に関する教職員の意識改革の一環として、従来の相互授業参観を見直し、各学部等5授業程度を選んで公開授業とし、授業参観の機会を増やす。これによって

- (1) 授業公開者の授業改善を行う。
  - (2) 授業参観を通じて参観する側の教員が授業についての内省を通じた教育改善を図る。
  - (3) 職員は授業参観を通じて、大学の授業について理解する第一歩とし、業務への反映を図る。
- ことをめざす。

#### 【目標】

- (1) 授業公開教員  
参観者から得たフィードバックをもとに、次年度以降の授業改善を行う。
- (2) 授業参観教員  
参観した授業から得られた気づきや新たな教授法などを参観者が内省し、自らの授業改善・教育改善に活かしていく。
- (3) 職員  
公開授業を参観することで、本学が行う教育の一端に触れ、日常の業務に反映させていく。

#### 2. 実施期間と開講科目数

期 間：平成 29 年 6 月 12 日（月）～平成 29 年 7 月 31 日（月）

科目数：42 科目（延べ 99 回開講 ※e ラーニング科目は 1 回として集計）

#### 3. 参加者数（参観申込者数、コメント登録者数）

本年度の、FD・SD ウィークの授業参観は、Web ページ上の集計で教職員合わせて 355 人の申し込みがあり、参観後のコメント登録者数は 306 人であった。申込者数は昨年度並み、コメント登録者数は 50 人ほど増えた。

FD・SD の効果をもとめるためには「ふりかえり」が重要であるため、Web ページの改善や参観者へのアナウンスを工夫し、できるだけコメント登録者が増えるように今後も改善を続けていきたい。

科目名	参観申込者数			コメント登録者数		
	教員	職員	計	教員	職員	計
グローバル社会と地域	9	9	18	7	8	15
感情心理学	1	11	12	1	11	12
人事管理論	4	6	10	3	5	8
中国語読解研究	2	1	3	2	1	3
教育評価（中等）	4	3	7	4	2	6
個人スポーツ実技 [陸上競技]		4	4		4	4
初等音楽科指導法	2	1	3	2	1	3
情報処理	2	2	4	2	2	4
地理学各論		10	10		9	9
日本文学概説	1	3	4	1	3	4
化学英語ゼミナール	7	1	8	5		5
海洋生命・分子工学実験 III	2	2	4	2	2	4
基礎物理学実験	5	1	6	4	1	5
情報科学概論	10	4	14	10	3	13
地震学 II	7	3	10	6	2	8
微分積分学基礎	6	2	8	5	2	7
野外巡検 I		2	2		1	1
スポーツ科学講義		16	16		13	13
疫学		5	5		5	5
課題探求実践セミナー（医学科）		3	3		3	3
生活援助技術論Ⅲ(演)		7	7		6	6
物理学 I	1	4	5	1	4	5
基礎有機化学	2	1	3	1	1	2
水産物利用学	4	8	12	3	7	10
地球科学概論	2	4	6	2	4	6
農場実習 III	2	11	13	1	10	11
農地環境保全学	3	8	11	3	7	10
海洋基礎生態学	10	24	34	5	20	25
地域社会学概論	3	9	12	3	8	11
非営利組織マネジメント論	4	38	42	2	32	34
Academic Writing in English	1	6	7	1	6	7
大学基礎論	4	2	6	3	2	5
障害者支援入門	2	16	18	2	14	16
チームワークを考える		2	2		2	2
課題探求実践セミナー（自由探求学習 I）	3	5	8	2	5	7
環境を考える		1	1		1	1
教育の方法・技術	4	12	16	4	11	15
初等家庭科指導法		1	1		1	1
合計	107	248	355	87	219	306

4. 授業参観記録（コメント登録）

授業参観後に、参観者が Web 上で授業参観記録を作成した。その質問項目と回答の要旨を以下に示す。

【教員】

（1）参観した授業について、教員の授業方法や学生の学習形態等について、特に印象に残ったことはどんなことですか。（自由記述式）

今回公開された授業は、グループワークやその他の学生参加の要素を取り入れた授業が多く、その点を印象に残ったこととして記載している教員が多かった。この他、スライド資料の工夫、課題や資料の事前配付、授業や話の組み立て、レポート等へのきめ細かい指導等に対するコメントが見られた。

（2）授業を参観して、あなたが実施している授業方法や学生の学習形態等についてあらたに気づいたことはどんなことですか。（自由記述式）

（1）への回答と同様、アクティブラーニングに関する記述が多く、さらに具体的に記載されていた。また、教材の使い方についても、スライドを使う場合、事前配付の他、moodle 等を使い常に見える状況にしたり、授業中に PC やスマホを使い資料を見ながら授業を行ったりと、様々な使い方をしている様子などが挙げられていた。さらに e-Learning でも効果的な授業ができそうであるといったコメントもあり、e-Learning への理解も進んだようであった。

（3）参観した授業での授業方法や学生の学習形態等で、自分の授業にも取り入れてみたい、あなたの授業に取り入れることが可能だと思うことはどんなことですか。（自由記述式）

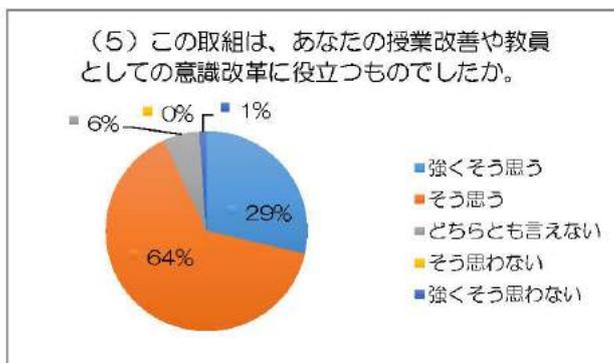
（1）、（2）と同様にアクティブラーニングについて触れられている記述が多かった。可能な範囲で取り入れてみたい、同様の工夫をしてみたいなどのコメントが見られた反面、私の授業では難しいなどのコメントも見られた。また、わかりやすい話し方や詳細な資料作成などというコメントもあり、アクティブラーニングだけでなく講義型授業について気付きがあった教員も多いようである。

（4）参観した授業の授業方法や学習形態について、授業担当者へのコメントがあれば書いてください。（自由記述式）

授業内容に関する記述がいくつか見られた。スライドの作り方、使い方、資料配付の方法などへのアドバイスもあり、授業担当者にとっても有益であると思われる。

（5）この取組は、あなたの授業改善や教員としての意識改革に役立つものでしたか。（5段階択一式）

93%が肯定的な回答をしており、有意義であったことがうかがえる。



	度数	割合
強くそう思う	25	29
そう思う	56	64
どちらとも言えない	5	6
そう思わない	0	0
強くそう思わない	1	1
	87	100

**(6) 来年度の本取組の実施に向けて、忌憚のないご意見・ご要望をお聞かせください。(自由記述式)**

おおむね好意的なコメントが多かった。次のような指摘があり、今後検討が必要である。

- ・告知時期について、直前の教授会で知った。もう少し早く周知してほしい。
- ・キャンパス移動の時間を考えると、一コマだけ授業参観するのはもったいない。参観できる授業が連続してある方がよい。あるいは遠隔で参観できないか。
- ・公開授業の情報について、受講生数を加えてほしい。大人数授業（または少人数授業）を参観したい。
- ・授業検討会の実施、授業終了後に担当者と参観者での意見交換会などを実施してほしい。
- ・選択肢が少ない。あるいは全ての授業を参観可能にすべき。
- ・最後尾が学生で占められていた（前の方には空席あり）。あらかじめ学生に前に詰めて着席させるとか、参観者席を設けるなどしてほしい。

**【職員】**

**(1) 参観した授業で、講義の教育方法や学習形態等について、特に印象に残ったことはどのようなことですか。(自由記述式)**

本設問では参加型授業に関するコメントが多くみられた。教員の授業に触れる機会が少ないことから、授業の進め方や手順に目新しさがあつたと思われる。なお、Webシステムの利用、e-Learning科目の学修内容確認の方法、プレゼン資料の作り方等についてもコメントがあつた。

また、いくつかの授業では、シラバスのスケジュールとは異なる内容の授業が行われていたとのコメントがあつた。事前に受講生に説明済みであつたかもしれないが、シラバスの確認や、説明の重要性が再確認された。

**(2) 参観した授業で、学生の様子について気がついたことはどのようなことですか。(自由記述式)**

コメントを見ると、アクティブラーニングを導入している授業の割合が高いものの、教員の質問や指示に対して、受講生が活発に参加する授業ばかりではないようであつた。今後、アクティブラーニングの参考になるような参観授業を増やすことで、失敗しないアクティブラーニングの導入に繋がると思われる。

その他学生の行動について具体的なコメントが多く、遅刻、自由な入退室、私語、PCで関係ない動画を見ている、スマホの使用（授業に関係あるかないかは不明）、居眠り、内職などの問題行動について記載されていた。TAのいる授業でもこれらの行動が行われている場合があるようで、今後の課題である。

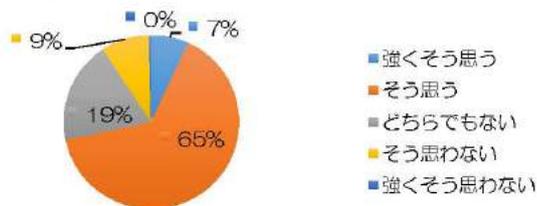
**(3) 参観した授業について、授業担当者へのコメントがあれば書いてください。(自由記述式)**

ポジティブなコメントとして、構成にメリハリがある、声が明瞭である、科学的内容を生活に引きつけた教員のコメントが分かりやすい、資料などの工夫が多くあつた。また、アクティブラーニングについても自分が学生の頃にはなくて新鮮、学生が成長する可能性を感じるなどの記載があつた。この他授業内容が面白く、もっと聞きたかつたなどのコメントもあつた。

**(4) 参観が行われた教室の環境の整備や設備について、学習に適していると思ひましたか。(5段階択一式)**

20名ほどが設備等の問題点を感じている。設問(7)への回答をみると、教室が狭いこと、プロジェクタの位置が低く、前の席に着席している人がいると見えにくいことなどが具体的に挙げられていた。また、開催時期が夏場だったため蒸し暑い教室や、室内にゴミが散乱して汚い教室もあつたようだ。

(4) 参観が行われた教室の環境の整備や設備について、学習に適していると思いませんか。

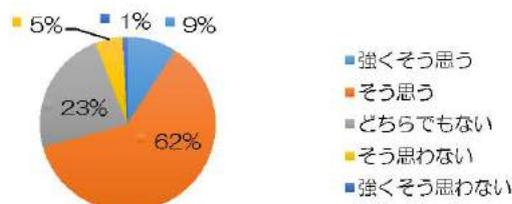


	度数	割合
強くそう思う	15	7
そう思う	140	65
どちらとも言えない	41	19
そう思わない	19	9
強くそう思わない	1	0
	216	100

(5) 授業を参観して、高知大学の教育（授業）を自らの業務に関連づけて考えましたか。(5段階択一式)

肯定的回答は71%であった。

(5) 授業を参観して、高知大学の教育（授業）を自らの業務に関連づけて考えましたか。

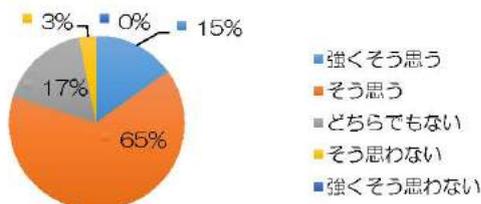


	度数	割合
強くそう思う	20	9
そう思う	135	62
どちらとも言えない	51	23
そう思わない	11	5
強くそう思わない	2	1
	219	100

(6) この取組はあなたの大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となりましたか。(5段階択一式)

肯定的回答は80%であった。

(6) この取組は、あなたの大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となりましたか。



	度数	割合
強くそう思う	33	15
そう思う	142	65
どちらとも言えない	37	17
そう思わない	7	3
強くそう思わない	0	0
	219	100

(7)(4)～(6)の回答の理由や、来年度の本取組の実施に向けての忌憚のないご意見・ご要望をお聞かせください。(自由記述式)

授業内容が業務と関連してヒントとなった、業務に対するモチベーションが上がったという意見とともに、業務内容と関連付けて参観するのは難しいという意見があった。業務に関連付けて参観するとはどういうことかなど、本FD・SDウィークについての理解や認識を共有できるような取組も併せて必要かもしれない。また、具体的に教室の状況や施設設備に関する改善点を指摘するコメントも多数あり、本結果の活用方法も検討課題である。

改善点として、以下の様なコメントがあった。

- ・参観者にもプリントを配布して欲しい。
- ・期間を長くして欲しい、定員があり参観したい授業を参観できなかった。
- ・公開授業を収録し、e-Learningで参観できないか。
- ・申込、コメント登録操作の簡便化。
- ・公開授業が何週目の授業か申し込みの際に分かるようにして欲しい。
- ・参観後のアンケートについて、設問が教員に向けたものか、職員に向けたものか分かり難い。

#### 5. 成果について

参観後のアンケート調査の結果から、本企画の趣旨や目標に対する成果として、次のようにまとめられる。

##### 【授業公開教員】

アクティブラーニングを取り入れている授業の比率が多かったようで、これまでの授業改善の取組が成果を上げている様子がうかがえる。また、参観した教職員から様々なコメントがあり、特に職員のコメントは具体的に学生目線に近いと感じられるものが多く、授業公開教員が授業改善の検討を行う上で参考になる資料が得られたと思われる。

実際に授業改善に結びつけるのは授業公開教員に委ねられているため、事後アンケートの実施も必要かもしれない。

##### 【授業参観教員】

今回の参観授業では、意識改革に役立つものでしたかという問いに、93%が肯定的な回答をしており、アクティブラーニングを取り入れていると思われる授業が多かったことも、その要因一つであると考えられる。また、e-Learning科目についてもこの企画で初めて観た、知ったという教員も多かったようで、効果的なe-Learningの利用についてもコメントが書かれていた。今後もこれらの新しい手法が授業公開教員と授業参観教員の間で共有されていくことが期待される。

##### 【職員】

授業参観を業務に関連付けて考えていた者が多数いた。例えば、設備、教室の状況等を直接業務に関連付けて見た者や、学生対応窓口で業務をしている者にとっては教室での学生の様子などは直接業務に関連する内容として感じ取ったようである。また、業務内容と授業内容が関連していて、もっと授業を聞きたかったというようなコメントもあった。アクティブラーニングの授業を参観した職員の中には、SDの研修方法として授業の進め方に関心を持った者もいた。

他方で、少数ではあるが、業務に関係を感じないとコメントした者もいた。大学は学生を育てる機関であり、全ての業務はそこに直接的、または間接的に必ず結びついている。そのことを理解してもらうための工夫が今後必要かもしれない。

### 3.4 セルフ・アセスメント・シート様式

<平成29年度入学生用>

## セルフ・アセスメント・シート(1年生)

20 年 月 日

セルフ・アセスメント・シートは、みなさんが大学生活の中でどのような能力を身につけつつあるかを記録し、みなさんの大学での学びを支援するためのものです。高校までの学習経験や生活、課外活動などでの経験をもとに、設問の内容が今の自分に身についているかどうかを回答してください。この調査は上記の目的のために記名式で行われますが、その結果がみなさんへの学修支援や本学の教育改善以外の目的で使用されることはありません。

□人文 □教育 □理工 □医学 □農林 □地域 □TSP 学籍番号〔                      〕 氏名〔                      〕

以下のすべての設問に、<身についていない>⇔<身についている>を基準に4段階で回答してください。

		身についていない	あまり身についていない	ある程度身についている	身についている	
論理的思考力	1	文章や資料・データなどを読む際に、一つひとつの部分に関連づけながら全体の構成を理解できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	2	ものごとを一面的に理解するのではなく、立場を変えて、その対極の視点からもとらえることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	3	別々に起こっているように見える事柄や、関係がないように思われる知識について、共通点や背景などを考えながら、関連づけて理解することができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
課題探求力	4	身のまわりに起こっている事柄の中に、誰かから教えられるのではなく、自ら課題を見出すことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	5	自分で見出した課題について、どのような点に原因があるかを説明できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	6	課題を解決するにあたって、適切な方法や手順を考えてから取り組むことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
表現力	7	自分の考えや調べたことを図や表にあらわして説明できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	8	自分が作成したレポートや資料を他者の視点で修正できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	9	口頭発表やプレゼンテーションで、聴き手の立場や状況に応じた表現方法を選択できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
コミュニケーション力	10	他者の言うことを理解したうえで、自分の考えを相手にわかるように伝えることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	11	事実と意見・感想などを区別・整理して相手に伝えることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	12	結論を先に述べるなど、自分の言いたいことをわかりやすく相手に伝える工夫ができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
協働実践力	13	グループでの活動で、自分の役割を認識し、責任をもって発言・行動できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	14	グループでの活動で、多数決に頼らずメンバーの納得や合意を得る努力を続けることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	15	グループでの活動で、活動に貢献してくれた他のメンバーに感謝の気持ちを伝えることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
自律力	16	ものごとに取り組む時、いつまでに何をするかを具体的に決めて実行できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	17	はじめてのことや苦手なことでも、自分や自分のグループのために積極的に取り組むことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	18	結果が出た時に、うまくいったこと、うまくいかなかったことを振り返ることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
倫理観	19	情報やデータが正確であるか、客観的であるかを判断できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	20	情報を発信したりデータを作成する際に、その内容やデータの利用方法に責任を持つことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	21	自らが直面した課題について、それまでに学んだ知識や技能と関連づけて説明できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
働きかけ	22	ある考え方や方法で結果が出せないとき、別の考え方や方法でやってみることを繰り返し試みることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	23	異なる立場や考え方を持つ人々と協力関係を作って物事を進めることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	24	予想外のことや困難な状況に出会っても、周囲と協力するなどして、適切に対応できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

※調査の際は能力名及び色分けを伏せて配布



		項目	1	2	3	4	5
対人	コミュニケーション力	⑩ 他者の言うことを理解したうえで、自分の考えを相手にわかるように伝えることができる。	自分の意見や感想を言うばかりで他者の話を聴こうとしない。	他者の言うことを遮らないで最後まで聴くことができる。	他者の話を、相手が話しやすいように相槌をうったり、柔らかい表情で対応するなどの配慮ができる。	相手の言うことを理解した上で自分の意見を相手にわかるように言うことができる。	複数の相手とのやり取りにおいて、特定の相手との一問一答にならず、全体との対話による意見交換ができる。
		⑪ 事実と意見・感想などを区別・整理して相手に伝えることができる。	事実と意見・感想の違いがよくわからない。	出来事や情報を客観的に相手に伝えることができる。	誰のどのような意見・感想であるか、できるだけあいまいにならない方法を選んで伝えることができる。	自分が伝えようとしていることについて、事実と意見・感想などの区別を意識して話すことができる。	自分が伝えようとすることを区別・整理したうえで、報告・連絡・相談などのうちのどれにあたるのかを意識しながら話すことができる。
		⑫ 結論を先に述べるなど、自分の言いたいことをわかりやすく相手に伝える工夫ができる。	話をしているも、相手に何を伝えようとしているのか、自分でもよくわからないことがある。	自分が何を言おうとしているかを意識しながら話すことができる。	結論を先に述べてその理由を話すなど、言いたいことをわかりやすく相手に伝える工夫をすることができる。	その場の状況や相手によって、どのように話せばよいかを常に意識して話することができる。	相手に自分が言いたいことが伝わっていないと思われる場合に、別の工夫をして話をするすることができる。
	協働実践力	⑬ グループでの活動で、自分の役割を認識し、責任をもって発言・行動できる。	日程が合わないなどの理由でグループの活動を他者にまかせきりにしている。	グループの活動で、自分の役割として与えられた役割を果たすことができる。	グループの中で、自発的に自分の役割を見出し、進んで引き受けることができる。	他のメンバーが困っていることがあれば、相手の役割を尊重しつつサポートできる。	グループの活動が順調でないときに、その理由についてグループ内で話題にして、改善につなげることができる。
		⑭ グループでの活動で、メンバーの納得や合意を得る努力を続けることができる。	人にまかせきりで、自分の意見が異なる場合にも、それをメンバーに伝えることができない。	話し合いの流れや内容に疑問や意見がある場合にも、そのことをメンバーに伝えることができる。	他のメンバーにもさまざまな事情があることを理解した上で、グループでの活動を実現できるように話し合うことができる。	安易に合意するのではなく、粘り強く話し合いを重ねてメンバーの合意や納得を得ることができる。	メンバーが本当に納得しているかどうかを確かめるために、進行している途中でもメンバーの本心を聞き出すことができる。
⑮ グループでの活動で、他のメンバーに感謝の気持ちを伝えることができる。		お互いの役割に無関心で、他のメンバーがどのようなことをやっているのかわからない。	グループにおけるお互いの役割や他のメンバーがどのようなことをやっているのかわかるか理解している。	他のメンバーのグループへの貢献に対して感謝の気持ちを伝えることができる。	グループ内で困ったことがあった時に、解決のためにメンバーのうちの誰かに相談できる。	積極的でないメンバーや困っているメンバーに対して、適切にアドバイスし、グループ全体の成果を高めていくことに貢献できる。	
対自己	自律力	⑯ ものごとに取り組む時、いつまでに何をするかを具体的に決めて実行できる。	レポートや課題などを提出期限までに提出できないことがある。	期限を意識して、それまでに成果を出すことができる。	期限から逆算して計画を立て、それに基づいて行動し成果を出すことができる。	1つの課題について、自分が計画したこと進捗を確認しながら、計画を見直し進めることができる。	いくつも並行して実行しなければならない課題について、適切に時間配分をし、自分で自分の行動を制御できる。
		⑰ 苦手なことでも、自分や自分のグループのために積極的に取り組むことができる。	苦手なことは、無意識のうちに避けている。	苦手なことでも、誰かと一緒にチャレンジできる。	苦手なことにも、自ら進んでチャレンジできる。	苦手なことでも、それによいような意義や価値があるのを見極めてチャレンジできる。	苦手なことでも、それにチャレンジする意義や価値を他者に説明して、一緒にチャレンジできる。
		⑱ 成果が出た時に、うまくいったこと、うまくいかなかったことを振り返ることができる。	成果の良し悪しだけを気にして、そこまでに自分がどのような過程をたどったかには関心がない。	成果の良し悪しの理由を、それまでの過程をもとに説明できる。	成果に至るまでの記録を残しておき、それに基づいてプロセスを振り返ることができる。	振り返りから得られた気づきを次の機会に活かすことができる。	継続的にプロセスを改善して、よりよい成果に結びつけることができる。
	倫理観	⑲ 情報やデータが正確であるか、客観的であるかを判断できる。	本に書いてあること、人から言われたことを鵜呑みにして、そのままレポートや資料に引用してしまう。	情報やデータが正確でないことがあるという危険性を理解している。	情報やデータが正確かつ客観的であるか、出典に遡ったり、自分で検証することができる。	情報やデータの正確さや客観性を保証するために、どのような手続きや作業が必要であるかを説明できる。	自分にとって都合の悪いデータや予想に反するデータを無視することなく、それらにも意味づけすることができる。
⑳ 情報を発信したりデータを作成する際に、その内容やデータの使用方法に責任を持つことができる。		情報を発信したりデータを作成する際に、盗用や剽窃を意識していない。	どのような行為が盗用や剽窃にあたるか理解している。	個人情報の保護のガイドラインなどを確認しながら情報の発信ができる。	情報セキュリティガイドラインにしたがって、適切に情報を管理・利用することができる。	盗用や剽窃を行うことなく、情報を発信したりデータを作成することができる。	

※調査の際は能力名及び色分けを伏せて配布

### 3.5 10+1の能力に関する到達度評価実施要領

#### 10+1の能力に関する到達度評価 実施要領

平成29年10月25日  
大学教育創造センター教育企画会議  
最終改定 平成30年2月28日

#### 1. 主旨

- (1) ディプロマポリシーに基づいて示された10+1の能力評価指標の到達度を測り、これを用いた学生指導を通じて、本学の教育の質を保証する。
- (2) このために、パフォーマンス評価（「統合・働きかけ」のルーブリックを用いた教員による評価と学生による自己評価）と、セルフ・アセスメント・シートに基づいた学生の自己評価を行う。
  - ① 【対課題】の到達度評価については、2（1）に示す内容に基づいて指導を行う。
  - ② 学部等で、教育の質保証のためにすでにルーブリックによる評価を行っている場合は、既存のルーブリック等を用いることとする。
  - ③ パフォーマンス評価の運用については、カリキュラム編成上実態に合わない学部では、その事情に応じて行うものとする。

#### 2. 10+1の能力の評価方法

- (1) 「専門分野に関する知識」「人類の文化・社会・自然に関する知識」「論理的思考力」「課題探求力」「語学・情報に関するリテラシー」（以上【対課題】）の能力指標については、各学部等でその達成度を想定したGPAの水準等、学生に対する指導上の指針となるものを示し、これを用いた指導を行う。
- (2) 「論理的思考力」「課題探求力」「語学・情報に関するリテラシー」（以上【対課題】）「表現力」「コミュニケーション力」「協働実践力」（以上【対人】）、「自律力」「倫理観」（以上【対自己】）の到達度については、大学教育創造センターが作成するセルフ・アセスメント・シートに基づいたルーブリックを用いて学生が自己評価を行う。その際、学生は、自己評価の根拠について、【対課題】【対人】【対自己】の区分毎に、「うまくできたこと」「うまくできなかったこと」「次にどうするか？」の観点からコメントを記述する。

この自己評価は在学中に3回行うこととし、1年次及び3年次は4月に一斉に行い、4年次は（3）の学生の自己評価と同時期に行う。
- (3) 「統合・働きかけ」の到達度については、パフォーマンス評価を行う。パフォーマンス評価にあたっては、各学部等で対象とする授業科目を選定し、学生はルーブリックによる自己評価を行う。その際、学生は、自己評価の根拠となる自らのパフォーマンスについて、「うまくできたこと」「うまくできなかったこと」「次にどうするか？」の観点からコメントを記述する。
- (4) 教員は、学生の自己評価を参照しながら、同じルーブリックを用いて学生のパフォーマンスを評価し、評価結果と所見を学生にフィードバックする。
- (5) （3）（4）の方法による評価を在学中に複数回（原則として3年次及び4年次）行うことにより、10+1の能力の形成的評価、総括的評価とする。

ディプロマポリシーの分類	具体的な能力		評価方法		
【知識・理解】	対課題	専門分野に関する知識	GPA		
		人類の文化・社会・自然に関する知識			
【思考・判断】		論理的思考力		ルーブリックによる 学生の自己評価	
		課題探求力			
【技能・表現】		語学・情報に関するリテラシー			パフォーマンス評価
		表現力			
【関心・意欲・態度】	対人	コミュニケーション力			
		協働実践力			
	対自己	自律力			
		倫理観			
統合・働きかけ	上記の諸能力を内的に統合し、周囲の文化・社会・自然・人間などに外的に働きかけていく能力		パフォーマンス評価		

### 3. ルーブリック評価指標の作成方法

- (1) 各学科・コースの「統合・働きかけ」の能力評価指標について、ルーブリックを作成する。ルーブリック評価指標を作成するのは、学位を授与する単位組織ごととなるが、学部等での合意に基づいて、汎用性のある評価指標を設定することもできる。
- (2) 評価のレベル設定は以下の通りとする。
  - レベル1：まだ達成できていない
  - レベル2：パフォーマンス評価を実施する授業の終了時まで最低限達成していただきたいこと
  - レベル3：卒業時まで最低限達成していただきたいこと
  - レベル4：卒業時まで達成していることが望ましいこと
  - レベル5：卒業時に達成していたら素晴らしいこと
- (3) ルーブリック評価指標は、学生が、「何ができるようになれば、自分にはその能力が身についたといえるか」という観点から、学生の指針となるようなパフォーマンス（「～ができた」）を記述する。その際、過去の優秀な学生のパフォーマンスを参照することが有効である。

### 4. ルーブリックによるパフォーマンス評価を行う授業

- 1回目：3年次第1学期開講科目を目安に、学部等の実情に応じて選択する。
- 2回目：4年次開講科目を目安に、学部等の実情に応じて選択する。

### 5. パフォーマンス評価を通じた教員による指導

- (1) パフォーマンス評価を行う授業の担当教員は、授業中の学生のパフォーマンスに関する所見と学生の自己評価の差異等の観点から、指導・助言を行う。
- (2) 担当教員（アドバイザー教員等）は、パフォーマンス評価を行う授業のルーブリック評価を参照しながら、学生が「次にどうするか？」に記入した今後のアクションなどについて、ディプロマポリシーの達成に向けた指導を行う。指導の内容は、e-ポートフォリオ上のリフレクション面談記録に記載する。
- (3) GPAや学生の自己評価についても、「統合・働きかけ」の観点からリフレクション面談等で必要に応じて指導を行う。

### 6. 実施

- (1) 2 (1) (3) (4) (5) については、原則平成30年度から実施する。但し、理工学部については平成31年度から実施する。
- (2) 2 (2) については、学年進行とし、平成30年度入学生から実施する。

## 3.6 リフレクション面談実施要領

### リフレクション面談 実施要領

平成30年1月24日

大学教育創造センター教育企画会議

#### 1 面談の目的

学生たちが生涯学び続ける学修者として自己を評価する視点を獲得するために、教員が伴走しメタ認知を促進させる支援を行う。

1年生には、入学後自分が何をしたいかを面談を通じて自覚させ、目的意識を喚起することで学修活動への動機づけを高める。さらに、学期ごとの学修目標の設定や振り返りの重要性を認識させるとともに、e-ポートフォリオを活用しながら、4(6)年間の学修を進めていくことを確認する。

2・3年生には、学修成果についての自覚を促し、自分の強みを意識して社会に貢献できる力の集大成に向けた準備を行う。

#### 2 面談の実施時期

- ① 入学時（4～5月）
- ② 1年生終了時（2～4月）
- ③ 3年生時（年度内）

※なお、上記面談は、学部等で実施する学部定期面談等と合わせて実施しても差し支えない。

#### 3 面談の内容

面談者は、学生がe-ポートフォリオに入力した下記『各面談において確認する事項（学修に関する目標及び振り返り等）』及び10+1の能力に関わる振り返り等を参考に面談を実施し、これまでの学修記録の確認と今後の目標設定に関するアドバイスをを行い、必要に応じて目標の修正等を指導する。

##### 【各面談において確認する事項】

- ① 入学時
  - ・卒業時に達成していきたい目標
  - ・今学期の学修目標
  - ・卒業後の進路希望状況
- ② 1年生終了時      ③ 3年生時
  - ・前学期の振り返り
  - ・年度末の総合振り返り
  - ・次（今）学期の学修目標
  - ・卒業後の進路希望状況

#### 4 面談の記録

面談実施後は、e-ポートフォリオの「面談記録」において、上記確認事項を面談内で確認した旨のチェックを行うとともに、面談結果（指導内容、学生の進路希望状況等）をコメント欄に入力する。

# 3.7 卒業生インタビュー調査成果報告

第24回大学教育研究フォーラム

## 地域で活躍する人材をどのように育成するか —高知大学卒業生インタビュー調査 進学時・卒業時の移動に注目した分析—

小島 郷子 (高知大学 大学教育創造センター) 嶋崎 俊彦 (高知大学 大学教育創造センター) 杉田 郁代 (高知大学 大学教育創造センター)  
木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所) 松本 留奈 (ベネッセ教育総合研究所)

### 共同研究の趣旨・目的

高知大学では、大学教育再生加速プログラム(テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」)の一環として、「社会で求められる資質・能力に基づいた、大学の人材育成の効果検証」を課題名とするベネッセ教育総合研究所と共同研究を行っている。

共同研究の目的は、高知大学が、地域活性化の中核的拠点として、地域の課題解決に資する人材育成ができていくかについて明らかにするため、高知大学卒業生の就職先における活躍状況(自己評価と職場評価)およびそこで求められる能力、評価について調査を行い、在学中の学修成果と照らし合わせて検証を行うことにある。

平成29年度には、卒業5年目までの卒業生と職場の上司29組に対して、

1. 高知大学卒業生が社会でどのように活躍しているか?
2. 社会での活躍に、高知大学の教育はどれくらい貢献できているか?

についてインタビュー調査を実施した。

調査にあたっては、高知県に就職した卒業生と首都圏に就職した卒業生を対象としたが、これは、高知県と首都圏では、採用基準や人材育成の考え方の違いが想定されることによる。この点についても明らかにすることで、地域人材育成のための知見が得られるものと考えている。

なお、本共同研究では、今後、インタビュー調査から得られた仮説について量的調査を行い、大学教育のような場面が、卒業生の社会に出てからの活躍に寄与しているかを明らかにしていく。この過程で得られた知見は、大学教育の改善にフィードバックされ、出口の側から見た大学教育の質保証の一翼を担うものとなる。

### 調査の対象と調査フロー

**調査対象**  
卒業後1〜5年目までの、県内および首都圏就職者と職場の方(上司)のペア 29組

●首都圏 就職者 10名 ●高知県内 就職者 19名

専攻	出身地	1年目	2,3年目	4,5年目
文系	県内		3	1
	県外	1	1	1
理系	県内			
	県外	1	2	

**STEP1:事前アンケート**

- 1)社会で「どれくらい活躍」、大学が「どれくらい貢献」しているのか量的に把握
- 2)大学時代の活動について把握
- 3)4年間を振り返り、印象的なエピソードを確認

**STEP2:インタビュー** 卒業生本人 60分 職場の方(上司)30分

- 1)進学・就職を選択と移動の背景を把握
- 2)社会で「どれくらい活躍」しているのかを質的に把握
- 3)社会での活躍に大学が「どれくらい貢献」しているのかを質的に把握

## インタビュー調査の結果と分析 ※10+1の力:高知大学が育成しようとする【対課題】【対人】【對自己】にわたる10の能力とそれらを統合し働かせる能力 ※セルフ・アセスメントシート:上記の能力を学生が自己評価するために開発されたアセスメントツール

### 1. 現在の活躍に貢献していると感じる大学生活の学び・経験

●資料を集めてそれを欲しい順に並べ直す、必要なら図を入れる、ということを経験した。どのような図を作ったかわからないけど、自分でやったことがあるので知っていた。通常のレポート課題の経験も立派だったが、卒論は特にまっさらな状態から、自分で図を考えたのか、どういった資料を引っ張って来たのか自分の思いが書き出されるのか、というのを探るところまでがあり、それは初めてだったのでかなり勉強になった。卒論を書き切ったというのは自分の力で乗り越えた。(K10文系)

●論理的思考力や自主性は、大学で身につけた部分が多いと感じる。大学の中でも相当難しいゼミに所属していて、色々な指導を幸運にも受けてもらった。今になればあの時の経験や言葉がたまってきた。卒論のテーマを決めるときから、「そのテーマで卒論を書いたら大抵的にならない、または行き詰まる」と言われ、先生を納得させるために論理的に背景や仮説を踏まえてテーマを設定するが、先生に認められるのに1年くらい費やした。(S07文系)

●実験などをやる時に、どういことが予想され、どうい結果が生まれるのかを先に考えてから行っていたが、現在の仕事は論理的思考が大切だと思うので、その経験が今役に立っているのではない。(S10理系)

●知識の面では、経営学・経済学のスキルは、営業する上でマーケティングをする必要が出てくるので役に立つのかなと思う。(S09文系)

●専門のゼミでは、「なぜゼミというのがある、ものごとに対して「なぜ、なぜ」と繰り返しで考える、そんな感じで、例えば、「どうして外資の仕事をするのか」に対して、大抵は「感謝される」「高給の役に立つ」など「誰かのために」は考えない、本当は「自分のために」が一番の理由ではないか、といったことをよく考える方だ。(S04文系)

●教育実習を受けたことは非常に大きな経験だった。「教育実習だから責任がない大学ではなく、少しでも子供と接する以上、下手なことを言っていない、お手本にもよう行動しなければいけない等制約もあるし、責任が生じる。働きながら生じる責任というのを学生の段階で知ることができた。(K13文系)

●3年からのゼミ活動で、堅固な農業の手伝いをした。活動にあたっては、教える方も、こちらが元気でハキハキしている方が教えるやすいだろう、販売するにも売れるように役に立てるように、元気な方がいいと思う。(K15文系)

**相当の努力をして課題(単位取得や論文作成)をやりとげる厳しさがあった**

**学問固有の物の見方や考え方に触れられた**

**実社会との接点を感じることができた**

### 3. 社会から求められる人材像—高知県と首都圏の相違に注目して—

職場の方に行った事前アンケートのうち、「あなたの職場で10年後活躍するために必要と思われるものを3つ選んで、番号をお書きください」という設問に対する回答からは、「課題を見出し、他者と協力しながら、解決を進めていく」という、高知県と首都圏に共通する人材像とともに、以下のような両者の相違も見出された。「他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している。このことは、インタビュー調査においても確認されたことだ。さらに、高知県では、「個」を尊重し、「自分らしさ」を発揮して働き、成長することを期待する傾向が強いことに対して、首都圏では、チームメンバーとしての戦力となると期待し、スキルの習得と競争を勝ち抜く積極性を求める傾向が強い。

高知:個を尊重して成長 ↔ 首都圏:チームの一員としての成長

※回答先順位を付けて回答していただいた1番目〜3、2番目〜2、3番目〜1と仮定している	高知	首都圏	相違
1 課題を見出し、他者と協力しながら、解決を進めていく	4	4	
2 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
3 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
4 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
5 自分やチームの強みを生かして、課題を解決していく	1	1	
6 課題を解決するために、必要に応じて他者と協力しながら取り組んでいく	1	1	
7 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
8 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
9 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
10 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
11 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
12 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
13 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
14 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
15 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
16 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
17 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
18 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
19 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
20 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
21 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
22 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
23 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	
24 他者との協力の示す意味が、高知県では、同僚のつながり(感謝の気持ちが伝えられる)であるのに対し、首都圏では異分子のつながり(他者の言うことを理解した上で、自分の考えを伝える)を重視している	1	3	

### 2. 職場の上司による卒業生の評価と課題

●元々専門的な勉強をしている者はいずれは全員そうではない者とも色々なメンバーがいる中で、卒業生は今まで勉強して来たかという点で周りに教わることも多かった。そんな中で自分は教わっているという周りに配属しながらやっていたことはよくわかった。

●進捗システムを入れ替えたばかりなのに、最近の売り上げに繋がらなくてもお客様を積極的にフォローしていかないとダメな卒業生が少なかったことをチームとしてどうしてあげたいのかを積極的に考えられる能力がある。

●スロースターターで初めの頃はうまくいかなかったこともあったと思うが、それに対してちゃんと受け止めて、どうしたらいいのかをしっかりと振り返って考えてきたから、成長してきてくれたのではないと思う。

●今やっていることがいろんなことに関連するということがまだまだわからない部分があるのではないかと思う。会社に入って「初めてのことは感じているよすがで、実際はそうではないよすがで」必要に応じて、その補償ができるよすがで、業務だけでなく、もう少し社会全体を俯瞰的に見られるよすが。

●ある情報やデータについて「正しいです」と言えるかという、裏付けがないと言えないよすが。もう1年経過後はもっとはっきりできるとは思っている。

●自分の考え、思考を相手に理解していただく、伝えるというところが課題になると思う。なぜその情報が必要かを相手に納得してもらえない伝え方、相手の共感を得て承認される伝え方が今後必要になると思う。

**チームで協働する**

**振り返り次につなげる**

**全体を俯瞰する**

**エビデンスを持つ**

**相手を動かすコミュニケーション**

### 4. 卒業生が感じた高知大学・高知県の魅力

●卒業生は、高知大学の「県外出身者8割」の環境を大きな魅力として評価している。

●県内就職者・県外就職者に関わらず、卒業生からは「学生の8割が県外出身者であり、多様な人と出会える・日本全国の人と交流できるネットワークが広がる」と高知大学の大きな魅力が捉えられている。

●全国各地から集まった多様なバックグラウンド・価値観を持つ学生と出会えたことは、自分自身の視野を広げ、挑戦意欲を刺激し、成長させてくれたとの実感が強く、社会に出てからの多様な人とのコミュニケーションが必要とされる環境でも役に立っていると評価されている。

●高知県人の「開放的」な気質が、県外出身者の「高知県への愛着」を育んでいる。

●特に県外出身者は、「アルバイト先の店長や常連さんに可愛がってもらった」「地域イベントに参加した時、地元の方に声をかけてもらった」「ゼミで県外県産品を訪れた際、よくしてもらった」等の経験を話し、高知県人の開放的な気質を「高知の魅力」と感じている。

●首都圏就職者でも、「いずれは高知に帰りたい」「高知に戻ってもいい」「高知になんらかの形で貢献したい」といった意識を持つ卒業生も多く、**「在学中の高知県人との関わりがこうした意識形成に大きく影響している」**

### 5. インタビュー結果から想定される仮説

- ① 大学の正課を通じて学んだ専門的知見や学修のプロセスにおける経験は、卒業後のキャリア形成にも重要な役割を果たしている。
- ② 「県外出身者8割」という環境は学生のコミュニケーション力、協働実践力などを育成する上で一定の役割を果たしている。
- ③ 高知県の自然や風土、高知県人の気質などが、特に県外出身学生の学びに寄与している。
- ④ 高知県と首都圏では、卒業生に期待することが異なり、企業・卒業生が大学教育に期待することも違いがある。
- ⑤ 教員の情動的サポートは、学修成果の向上と学生の進路力の育成に貢献している。(別記実施した卒業生アンケートでは、卒業生の満足度・教員の情動的サポートに中程度の相関が見られた。インタビュー調査でもこの相関を裏付けるデータはなかった。①②の正課の進修での教員の指導的なサポートは、進路支援も期待される)

### 6. 仮説の検証から大学教育の強化・改善に向けて

本研究は、上記の仮説を量的調査(卒業生とその就職先へのアンケート)によって検証し、その結果を大学教育にフィードバックすることで、卒業後のキャリアを見据えた教育改善を企図している。このことは、大学から社会への接続という観点からの教育の質保証に寄与するものである。

### 3.8 シンポジウム資料

<開催案内>

**主催**  **高知大学**  
Kochi University

**共催**  **茨城大学**  **日本福祉大学**  **山形大学**  
Ibaraki University Yamagata University

大学教育再生加速プログラム

本シンポジウムは、大学教育再生加速プログラム（AP）事業・テーマVに採択された高知大学、茨城大学、日本福祉大学及び山形大学の共催により、**大学教育の質保証について、本事業で得られた成果を全国の高等教育機関・高等学校関係教職員に情報発信するとともに、課題の検証を行うこと**を目的として開催します。皆様のご参加をお待ちしております。

# 卒業時における 質保証の 取組の強化

平成29年度 AP事業シンポジウム&ポスターセッション

**13:00~13:15 開会挨拶** 脇口 宏 (高知大学長)

**13:15~13:45 基調講演 I**  
「近年の高等教育政策と大学教育再生加速プログラム（AP）」  
**河本 達毅 氏**  
(文部科学省 高等教育局大学振興課 大学改革推進室改革支援第二係長)

**13:45~14:00 幹事挨拶**  
**中村 信次 氏** (日本福祉大学全学教育センター長・教授/AP事業推進委員長)

**14:00~14:45 基調講演 II**  
「大学教育改革の近未来を考える～正攻法かイノベーションか～」  
**川島 啓二 氏** (九州大学基幹教育院・教授/次世代型大学教育開発センター長)

**14:45~15:00 休憩**

**15:00~15:20 事業報告 I**  
**高田 敏行 氏** (茨城大学全学教育機構・准教授)

**15:20~15:40 事業報告 II**  
**浅野 茂 氏** (山形大学学術研究院(企画部)・教授)

**15:40~17:00 パネルディスカッション**  
「IR、ディプロマ・サプリメントの有用性と学修成果の質保証」  
パネリスト 文部科学省 河本 達毅 氏  
九州大学 川島 啓二 氏  
茨城大学 高田 敏行 氏  
山形大学 浅野 茂 氏  
高知大学 藤田 尚文 氏  
コーディネーター 日本福祉大学 中村 信次 氏

**17:00~17:10 閉会挨拶**  
**藤田 尚文** (高知大学 理事(教育・附属学校園担当)/AP事業実施本部長)

**17:30~ 情報交流会**  
同会場メインホワイエにて開催 19:30頃終了予定

**12:00~19:30 AP採択校によるポスターセッション**  
ポスターセッション在席時間12:00~12:45

**日時** 2017年 **10/28(土)**  
12:00~17:10(受付 11:30~)

**場所** 東京国際交流館 プラザ平成3階  
国際交流会議場  
(〒135-8630 東京都江東区青海2-2-1)

対象: 高等教育機関・高等学校関係教職員  
【事前申込制】180名 参加費無料

**会場**



東京国際交流館 プラザ平成3階  
国際交流会議場

ゆりかもめ「船の科学館」東出口より徒歩約3分

**お申込方法** **10月10日(火)までに下記のWebサイトからお申込みください。**  
(先着順のためお早めにお申込みください)  
<https://fdas.kochi-u.ac.jp/kuap/2017/10/H29sympo-ap.html>

お問い合わせ先: 高知大学学務部学務課教育支援室教育企画係  
TEL.088-844-8143/088-888-8018 E-Mail. kochiap@kochi-u.ac.jp

<ポスターセッション発表テーマ一覧>

高知大学AP事業シンポジウム(平成29年10月28日) ポスターセッション発表テーマ一覧(敬称略)

番号	発表テーマ	発表代表者		共同発表者	AP 事業 採択 テーマ	設置 形態
		氏名	所属			
1	アクティブ・ラーナー育成を目指すFDer養成の取組	馬本 勉	県立広島大学 総合教育センター	川口 博之(県立広島大学 本部経営企画室)	I	県立
2	実践的人材の育成～アクティブ・ラーニングと質保証	千綿 文	福岡工業大学 FD推進機構 FD推進室	長谷川 純一(福岡工業大学 FD推進機構 FD推進室)	I	私立
3	AP実施における学生のジェネリックスキルの向上について	矢島 邦昭	仙台高等専門学校 総合工学科	川崎 浩司(仙台高等専門学校 総合工学科)	I	国立
4	福岡歯科大学における学修成果の可視化	内田 竜司	福岡歯科大学 教育支援・教学IR室	-	II	私立
5	阿南高専におけるコンピテンシー評価の取組	松本 高志	阿南工業高等専門学校 創造技術工学科電気コース	小松 実(阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 電気コース) 山田 耕太郎(阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 一般教養) 川畑 成之(阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 機械コース) 太田 健吾(阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 情報コース) 菊池 弥生(阿南工業高等専門学校 教育開発推進室)	II	国立
6	「学びの好循環」を目指す山口大学AP事業の軌跡	林 透	山口大学 大学教育機構 大学教育センター	篠田 雅人(山口大学 大学教育機構 大学教育センター)	I・II 複合型	国立
7	アクティブラーニングの体系化と学修成果の可視化	坂井 直道	芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター	鈴木 洋(芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター)	I・II 複合型	私立
8	直接評価としての基盤力テストの開発と実施	浅野 茂	山形大学 学術研究院	藤原 宏司(山形大学 学術研究院)	V	国立
9	4階層内部質保証システムの構築を基本とした卒業時の質保証	髙田 敏行	茨城大学 全学教育機構	栗原 和美(茨城大学 工学部(全学教育機構兼務)) 佐川 明美(茨城大学 全学教育機構)	V	国立
10	高知大学における質保証の取組み	小島 郷子	高知大学 大学教育創造センター	杉田 郁代(高知大学 大学教育創造センター)	V	国立
11	e-ポートフォリオを用いた学生の学修成果の可視化について	塩崎 俊彦	高知大学 大学教育創造センター	-	V	国立
12	AP事業 SDウィークの取組について	黒田 さやか	高知大学 学務部 学務課	西田 浩敏(高知大学 学務部 学務課)	V	国立
13	兵庫県立大学AP事業H29年度の取り組み	横山 真衣	兵庫県立大学 総合教育機構	-	V	県立
14	質保証に向けた教育改革の取り組み	石田 雪也	千歳科学技術大学 理工学部	吉本 直人(千歳科学技術大学 理工学部) 池田 弘之(千歳科学技術大学 理工学部)	V	私立
15	卒業生調査を中心とした教育の質保証への取組	横松 力	東京薬科大学 RI・中央分析センター	高橋 勇二(東京薬科大学 生命科学部)	V	私立
16	日本福祉大学のAP事業およびテーマV幹事校事業の紹介	中村 信次	日本福祉大学 全学教育センター	村川 弘城(日本福祉大学 全学教育センター)	V	私立
17	山梨学院短期大学の取組PROPERTIESについて	羽畑 祐吾	山梨学院短期大学 食物栄養科	青柳 宏幸(山梨学院短期大学 保育科)	V	私立
18	”安全・安心志向型”教育プログラム(TCC)の構築と卒業時の質保証システム	天内 和人	徳山工業高等専門学校 総合企画室	-	V	国立

<アンケート結果>

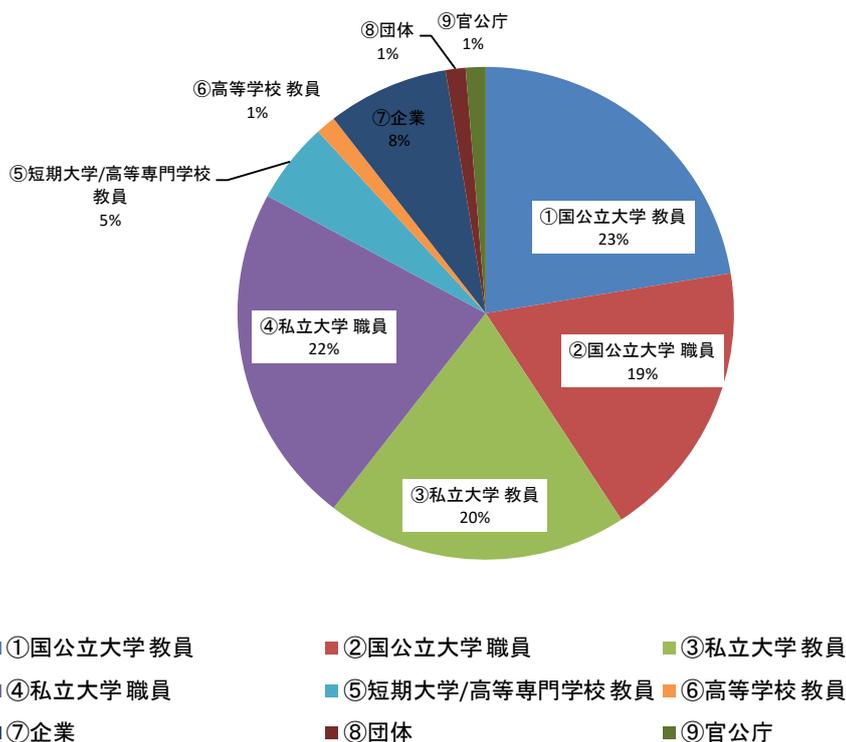
平成29年度 高知大学AP事業シンポジウム 参加者数及びアンケート回答結果

実施日:平成29年10月28日(土)

場 所:東京国際交流館 プラザ平成3階

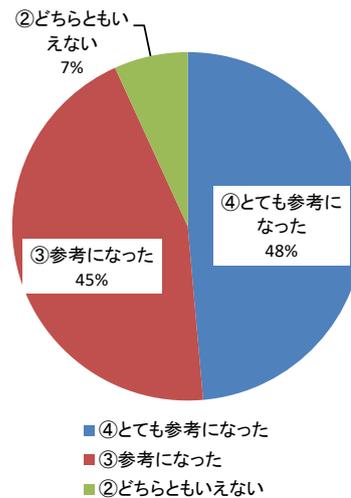
職種	参加者数		アンケート回答者	
	シンポジウム	情報交換会	人数	割合
①国公立大学 教員	47	22	17	22.4
②国公立大学 職員	26	7	14	18.4
③私立大学 教員	32	12	15	19.7
④私立大学 職員	38	9	17	22.4
⑤短期大学/高等専門学校 教員	4	3	4	5.3
⑥高等学校 教員	1	0	1	1.3
⑦企業	8	4	6	7.9
⑧団体	8	0	1	1.3
⑨官公庁	5	3	1	1.3
	169	60	76	100.0

アンケート回答者数内訳



1 シンポジウム全体について、あてはまるところに○をつけてください。

選択肢	人数	割合
④とても参考になった	36	47.4
③参考になった	33	43.4
②どちらともいえない	5	6.6
①参考にならなかった	0	0
無回答	2	2.6
	76	100.0

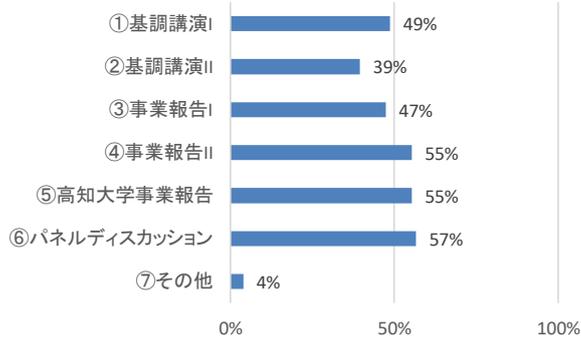


よろしければ理由をお聞かせください。

④	ディプロマ・サブリメントをキーワードに、質保証の理解が深まった。
④	ルーブリック開発に着手しはじめたところなので。また、やたら「標準化する」ことに関してもなんとなく違和感を感じていたこともあり、いろいろと腑におちたように思いました。
④	茨城大学、山形大学の事例
④	「学力の3要素等」の重要性、デザイン志向の視点。
④	藤田先生が率直に学内の課題（ディプロマ・サブリメントの様式について）を共有して下さったことで、全体の議論が表面的にとどまらず、とても深まったように思います。ありがとうございました。
④	講演、報告、パネルディスカッションはもちろんですが、ポスターセッションも充実しておりすばらしかったです。勉強になりました。
④	APプログラムに関連する取組について学ぶ貴重な機会をいただいた。
④	他大学の優れた先行事例を知ることができたため。
④	各大学の個別課題、共通課題を具体的にご説明いただきとても参考になりました。
④	文科省の河本氏のディプロマ・サブリメントの考え方がわかった。
④	新しい取り組みにデータが出てきている。
④	学修成果の可視化について詳しく知りたかったため
④	各報告も含めプログラム全体を通じて大変勉強になりました。
④	ディプロマ・サブリの現状、内容がわかった
④	本学で課題としている点について参考になる情報を多く得られたため
④	すべてpointをついた議論、発表、具体的データを示してのお話など大変良かったです。
④	具体的な発言に加え、ポスターセッションも充実していました。
④	質保証の課題について知る、認識することができた。
③	IRと学生支援との関係(学生支援の役割)について、いろいろと考えることができた。やはり、大学の制度上、学生の修学環境・条件(成績評価、授業目標レベル等)をある程度整える必要がある。それを越えて、学生支援(修学支援)、学習支援etc.だけに役割(対応)が求められてはいけなと思う。
③	内部質保証に資する自己点検評価のあり方を検討しており、先生方のお話はとても勉強になりました
③	卒業時の質保証に取組んでいる複数の大学の先進的な事例を拝見することができて、参考になりました。
③	卒業時の質保証への概念が各大学で多様な定義があることを理解できた。
③	質保証の取組内容を伺って良かった。
③	学修成果を可視化するためにどのようなプロセスでこの問題を考えていけるのか？考えるための視点と問題を教えていただいたと思います。
③	各大学の推進されている担当者の方から具体的なお話があったため
③	様々な立場の方たちによる質保証に対する考え方や背景を知った
③	特にポスターセッションでの各大学のAPの取組み状況が把握出来たため
③	質保証にしるIR、可視化にしる、特に地方の小規模大から相談を受けることが多いので、大変参考になりました。
③	参考にはなったが、国立大学の視点が中心で、私学の課題やとりくみを伺うことが少なかったため。(「とても」を選択しなかった理由)
②	基本的に知っている話でした。茨城も山形も「既に」他の場所で発表しています。
②	課外活動として、学生の学修成果の具体例の事例発表があればよかったと思われる。

2 特に参考になったものに○をつけてください。(複数回答可)

選択肢	人数	割合
①基調講演I	37	48.7
②基調講演II	30	39.5
③事業報告I	36	47.4
④事業報告II	42	55.3
⑤高知大学事業報告	42	55.3
⑥パネルディスカッション	43	56.6
⑦その他	3	3.9



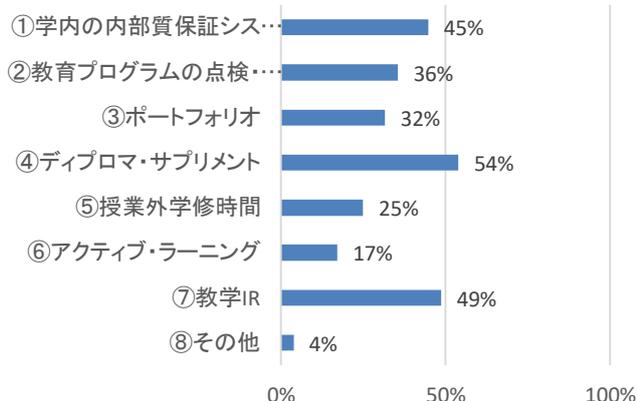
「⑦その他」の内訳	人数
閉会挨拶	2
ポスターセッション	1

よろしければ理由をお聞かせください。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	理由
基調講演I	基調講演II	事業報告I	事業報告II	高知大学事業報告	パネルディスカッション	その他	
				○			知らない話だったから。これをメインで1時間位やっても良かったのではないのでしょうか？
			○				直接評価の事例は少なく、大変参考になりました。
○	○	○	○	○		○	ポスターセッションでの意見交換(はシンポジウムとは異なるのかも知れませんが)
					○		IRにより、今後、何ができるようになるか(目指しているか)が、かなり踏み込んで示された為。同時に、成果や課題の分析、検証がいかに困難か痛感した。
○		○	○				基調講演I: 高等教育に関する政策の流れがよくわかりました。資料を学内でも共有します。事業報告I、事業報告II: 具体的な事例を伺うことが出来て勉強になりました。
			○		○		・具体的なデータも併せて学外も含めた全学の内部質保証の取組が紹介されており、分かりやすく、かつ参考になった。(事業報告I) ・各発表だけでは分からなかった内容や会場からの質疑応答があり、刺激を受けた。(パネルディスカッション)
					○		本日のテーマの趣旨がより深く議論されており参考になった。(ディプロマ・サブリメントのあり方等)
○			○	○			学修成果を可視化する取組が具体的に紹介されていた。
			○				基礎力テストの結果が興味深かったです。
		○	○	○			他大学の優れた先行事例を知ることができたため。
			○	○	○		具体性がありました。
○				○	○		ディプロマ・サブリメントについて学びたく参加したため。
	○						APIに求められるものが、大学の社会的役割があると明確にされた。
○	○	○	○	○			質保証の全体像や具体的な取組の報告が役立つ。
○	○	○	○	○	○		IR実務担当者なので、髙田先生と浅野先生、パネルディスカッションのテーマはとても参考になりました。
			○	○			★豊富なアイデアと検証 ★ICTの効果的な利用 ★その為の専用の教員を採用
○				○	○		I: 現在の教育政策の方向性が参考になった。高知大: 質保証、ディプロマ・サブリの内容が参考になった。パネル: 日本版ディプロマ・サブリの目的について、色々な考え方があることがよくわかった。
			○	○			山形大の直接指標(基盤力テスト)、茨城大のアンケート中での質保証、高知大のポートフォリオとIRの分析例と対照的な方法でありながら学習の質を高めるための効果的手法であることがわかったため。
○	○	○	○	○	○	○	文科省の人の話を聞くことがないため。又、本音や内部事情も少々聞けてよかった。
○	○	○	○	○	○	○	本学で課題としている点と合致している内容だったため
		○	○		○		非常に具体的で(実践的で)わかりやすかった。自校と現状比較しながら大変参考となった。コーディネーターの力量は相変わらずスゴイ。
			○	○	○		基調講演I: 展開が早く主張がクリアに掴みにくかった。基調講演II: 視点は面白かったが、最後にもう少し踏み込みがほしかった。
			○	○			事業報告I: わかりやすかったです。高校でもIR機能が必要と考えています。事業報告II: 5因子論については私も活用を研究しています。学力と情緒安定性(神経症傾向)は私の分析とも一致しました。よい参考になりました。高知大学事業報告: 細かいデータ分析など進路指導担当の高校教員としては大変興味深いです。よい参考になりました。
○	○	○	○	○	○		特に髙田先生のIRの取組についてIRの役割について参考になりました。

3 大学教育の質保証について、特に関心のあるものに○をつけてください。(複数回答可)

選択肢	人数	割合
①学内の内部質保証システム	34	44.7
②教育プログラムの点検・評価	27	35.5
③ポートフォリオ	24	31.6
④ディプロマ・サプリメント	41	53.9
⑤授業外学修時間	19	25.0
⑥アクティブ・ラーニング	13	17.1
⑦教学IR	37	48.7
⑧その他	3	3.9



よろしければ理由をお聞かせください。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	理由
	○			○	○			関係する業務にたずさわっているので。
					○	○		業務に関わる内容だから。
○		○	○				○	可視化と卒業時質保証との関係
	○							IRと学生支援との関係(学生支援の役割)について、いろいろと考えることができた。やはり、大学の制度上、学生の修学環境・条件(成績評価、授業目標レベル等)をある程度整える必要がある。それを越えて、学生支援(修学支援)、学習支援etc.だけに役割(対応)が求められてはいけないと思う。
○	○					○	○	大学における教育、研究、社会貢献活動を点検・評価することで本学の内部質保証につながるようなシンプルかつ効果的方法を求めています。教学IR、研究IRとの関わりにもとても興味があります。
○								全学の内部質保証システムの体制整備は喫緊の課題であると考えているため。
	○					○		教学IRによるデータ分析結果を、どう教育改善に結びつけたのかというプロセスに関心あり
	○	○	○	○	○	○		最初の3つは、本学のAP事業においてもキーとなる取り組みであるため後半の3つは、本学の課題であるため。
		○	○					現在、取り組んでいるため。
						○		所属大学でIR活動が遅れているため
	○							点検・評価を円滑に、かつ実質的に行うにはそれに必要なシステム/組織の整備も必要。
			○	○				すぐ取りかかるためのヒントがほしいため
○	○		○		○	○		質保証の仕方、IRのインパクト、ディプロマ・サプリメントについて、詳しくお話してお聞きできたため。
				○				時間増をどう図れば良いか検討中であるため
		○	○					APで本学が推進中のため。
	○							教育プログラムの評価で、どのような目標を立てたらよいか、有効なデータがあるのか知りたい。
○	○					○		認証評価対応のため
			○	○		○		本学で今後の改革が必要なため
			○	○		○		ディプロマ・サプリメント:いわゆる大学版「調査書」であり、大変興味があります。
		○	○					学生のキャリア支援、就職支援に携わっているため、学修や経験の蓄積、能力の伸長を外にどう見せるかに関心がある。

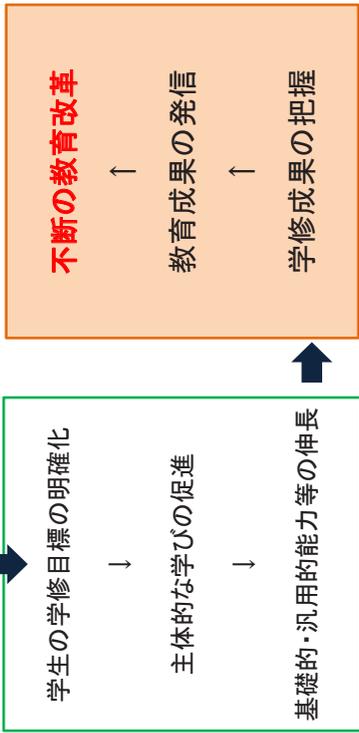
高知大学のAP事業について、ご意見・要望等ございましたらお教えください。

大変参考になりました。ありがとうございました。
高知大学のAP事業について、もっと聞きたかったです。時間切れで残念でした。
おつかれさまでした。ありがとうございました。
少ない人数での取組、苦労も多いと思いますが、ぜひ推進していただきたいと思います。応援しています。
多面的に実行されており、とても参考になります。
お恥ずかしながら、今年4月に大学に入職したのですが、本学がAP事業になぜ手を挙げていなかったのか、とても疑問です。後2年で終わるということですが、引き続き募集をしていただきたいと思います。
日頃の業務改善に結びつく、良い情報の多いシンポジウムでした。ありがとうございました。
企画そのもの、発表者+登壇者ともにパッションが伝わってきて大変良かったです。所用があり、懇親会に参加できず申し訳ありませんが、参加して本当によかったです。他大になりますが、中村先生の司会が見事でした。お疲れ様でした。
私事ですが高知出身であり、今後も応援しています。頑張ってください。北海道から出席させていただいて、よかったですと思います。ありがとうございました。



# 学修成果に基づき内部質保証

「何を教えるのか」→「何が身に付くのか」

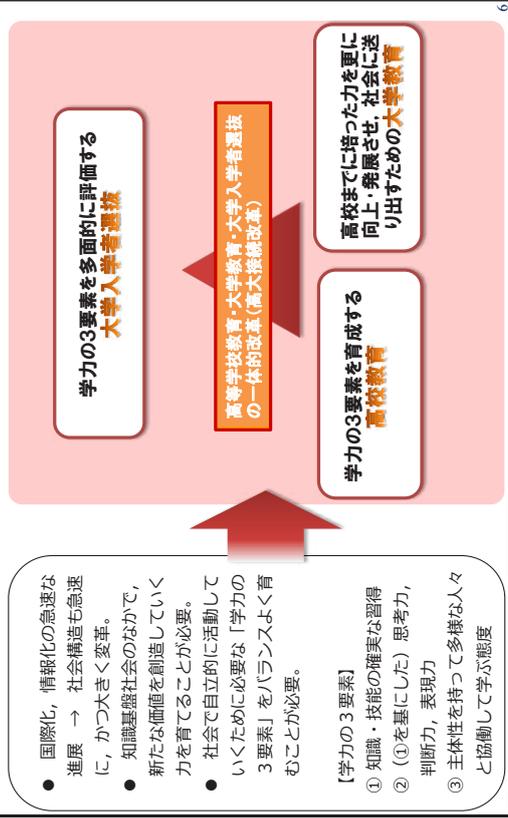


# 基礎的・汎用的能力

主体	生きる力 (1996)	学力 (2006)	キー・コンピテンシー (2000)	社会人基礎力 (2006)
中央教育審議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>変化の激しいこれからの社会を生きていくために身に付けさせたい力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>確かな学力</li> <li>豊かな人間性</li> <li>たくましく生きるための健康や体力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースとして活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をやっていく上で必要な基礎的な能力</li> </ul>
中央教育審議会 (1996)	<ul style="list-style-type: none"> <li>確かな学力</li> <li>豊かな人間性</li> <li>たくましく生きるための健康や体力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>知識・理解</li> <li>汎用的技能</li> <li>態度・志向性</li> <li>統合的な学習経験と創造的思考力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会・文化的・技術的ツールを相互作用的に活用する力</li> <li>多様な社会グループにおける人間関係形成能力</li> <li>自立的に行動する能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>前に踏み出す力 (アクション)</li> <li>考え抜くチカラ (シンキング)</li> <li>チームで働くチカラ (チームワーク)</li> </ul>

他、「就職基礎能力」(2004)、「エンプロイアビリティ」(2001) (いずれも厚生労働省)がある。  
出所)中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会「今後のキャリア教育・職業教育の在り方について(参考資料)平成21年

# 高大接続改革の必要性



## 高大接続改革の全体像イメージ(高大接続システム改革会議最終報告より)

一「高等学校教育」「大学入学者選抜」の一体的改革による「学力の3要素」の伸長

### 学習指導要領の抜本的な見直し

- 育成すべき資質・能力を踏まえ、**基本・科目等の見直し** (基礎的・汎用的能力、専門的・実践的を両立させる(制約内))
- カリキュラム・マネジメントの普及・促進

### 学習・指導方法の改善

- 教員**の意識・態度・指導力**の向上
- 多面的な評価の推進

### 大学入学者選抜改革

《「学力の3要素」の多面的・総合的評価》

- ① 明確な入学者受入れの方針に基づき、**学力の3要素を多面的・総合的に評価する選抜方法** (個別科目の成績だけでなく、ポートフォリオ)
- ② **新たな選抜基準・ツール**の構築
- ③ **「履修率」の取組や「修習履修率」等の取組**

### 大学入学者選抜改革

《「学力の3要素」の更なる伸長》

- ④ 関係者等の改正(「三つの方針」の**実践的な取組**、**評価の透明化**)
- ⑤ **三つの方針**の策定・運用に関する「参考指針」の作成(中核的指針)
- ⑥ **各大学**において育成を目指す人材像や具体的な教育活動の明確化
- ⑦ **入学**から卒業までの、**大学教育を充実させるためのPOAやマイルストーン**を策定

他、「就職基礎能力」(2004)、「エンプロイアビリティ」(2001) (いずれも厚生労働省)がある。

# 認証評価制度の改善

## 【経緯等】

《背景・課題》  
 ○ 大学の質保証については、平成16年に第三者評価制度である認証評価制度が導入され、現在も巡目の評価が実施されているところ、現行の認証評価制度に対しては、以下のような指摘がなされている。  
 ・**学命適合性等の具体的な評価項目が多く、必ずしも教育研究活動の質的改善が中心となっていない。**  
 ・**評価結果を教育研究活動の改善に活かす仕組みが十分にない。**  
 ・**社会一般における認証評価の認知度が十分ではない。**

## 中央教育審議会大学分科会大学教育委員会を中心に認証評価制度の改善に向け検討

《平成28年3月18日》中央教育審議会大学分科会「**認証評価制度の充実に向けて(審議まとめ)**」をとりまとめ  
 →審議まとめを踏まえ、「**学校教育法第百十條第二項に規定する基準を適用するに際して必要な細目を定める省令の一部を改正する省令**」を平成28年3月31日公布、平成30年4月1日施行

## 【省令改正内容】

### ○ 大学評価基準において定める評価事項関連

- (1) **大学評価基準における評価項目の充実**  
**大学評価基準に未達して定めなければならない事項として、以下の点を追加するものとする。**  
 ① **三つの方針※1)に関する事項**  
※1)卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)、教育課程編成・実施の方針(アドミッション・ポリシー)、入学選抜の方針(アドミッション・ポリシー)  
 ② **教育研究活動等の改善を継続的に行う仕組み(内部質保証)に関する事項**  
 (2) **重点評価項目の改善**  
 大学評価基準に定める項目のうち、**内部質保証に関する事項については、重点的に認証評価を行うものとする。**  
 (3) **設置計画履行状況等調査(AO)との連携**  
 認証評価機関はAOの結果を踏まえた文部科学大臣の意見において「是正意見」改善意見が付された大学に対する評価を行うに当たっては、当該意見に対して關した措置を把握するものとする。

# 三つの方針の策定・公表に関する省令改正

## 《学校教育法施行規則の改正》

全ての大学等において、以下の三つの方針を一貫性あるものとして策定し、公表するものとする。

- 卒業認定・学位授与の方針、
  - 教育課程編成・実施の方針、
  - 入学受け入れの方針
- (平成28年3月31日改正、平成29年4月1日施行)

## 大学教育の質的転換



## 《三つの方針の策定及び運用に関するガイドライン》

- (主な内容)
- 各大学の進学の精神や強み・特色等を踏まえた**自主的・自律的な三つの方針の策定と運用の参考指針**
  - 三つのポリシーの策定単位は、学位プログラム(授与される学位の専攻分野)ごとの入学から卒業までの課程)を基本に、各大学が適切に判断。各大学において、
    - ①卒業までに学生が身に付けるべき資質・能力を示すディプロマ・ポリシーと、それを達成するための教育課程の編成・実施の在り方を示すカリキュラム・ポリシー、②これら二つのポリシーを踏まえ、学生を受け入れるためのアドミッション・ポリシーを、それぞれ策定。
    - 三つのポリシーに基づき、大学教育の諸活動を実施するとともに、その結果の自己点検・評価とそれを踏まえた改善に取り組むが、大学教育の内部質保証システムを確立。
    - 三つのポリシーとそれに基づく教育の実績等を分かりやすく体系的に情報公開することで、高校の進路指導を改善するとともに、産業界からの理解を得て連携を強化。

# 認証評価制度の改善

- **評価の質の向上**  
 (1) **認証評価機関の自己点検・評価の義務化**  
 認証評価機関は、大学評価基準、評価方法、評価の実施状況並びに継続及び運営の状況について**自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする。**  
 (2) **認証評価機関におけるフォローアップ**  
 認証評価機関は、評価の結果、改善が必要とされる事項を指摘した大学の教育研究活動等の状況について、当該大学の求めに応じ、**再度評価を行うよう努めるものとする。**  
 (3) **評価における社会との関係強化**  
 認証評価機関は、その評価方法に、**高等学校、地方公共団体、民間企業等の関係者からの意見聴取**が含まれるものとする。  
※高等学校の教育研究等の総合的な状況に係る認証評価(個別別評価)においても、上記省令改正内容について、準用する。

## 【中教審審議まとめを踏まえた取組】

- **各大学等が、教育研究の質の確保に資する内部質保証の体制の構築等に取り組む際、また認証評価機関が大学評価基準等を見直し、認証評価を行う際には、以下のような事項に取り組む。**
- ・内部質保証に関する事項について、優れた取組等を実施している大学等に対し、**次回評価において評価内容及び方法の強化により評価の効率化を図ること**。また、法令遵守事項については、評価書やチェックシートへの確認など**方法の簡便化**を図ること。
  - ・大学の自己点検・評価の段階から**客観的なデータや指標の積極的な活用**、認証評価機関においても**定量的な評価の実施やエビデンスの取集強化**に取り組むこと。
  - ・教育の質的転換を促進するため、各大学等が**学生の学修状況の把握・評価の実施状況**についての**評価**に取り組むこと。
  - ・評価の過程において、**認証評価と社会との関係強化等の観点から、高等学校、地方公共団体、企業、学生等からの意見聴取**に取り組むこと。
  - ・重点評価項目である**内部質保証**について**段階別評価の活用**など、**評価結果を社会一般に対して分かりやすく公表**すること。
  - ・ともに、特に優れた**取組を積極的に公表**すること。
  - ・**認証評価に係る各大学等の負担の軽減**のため、国立大学法人評価などの**他の評価における教育研究に関する評価資料及び結果も活用した評価**に取り組むこと。



# 高等教育の質の向上

- 我が国の高等教育については、教育課程や教育方法の改善、学修に関する評価の厳格化、社会人の受入れなどについて課題が指摘。
- 各大学における教育の質向上の取組や教育研究の特色化等の取組は進みつつあるものの、学生の学修時間は伸び悩み、知的な貢献が十分でないなど引き継ぎ多くの課題が存在。
- 産業構造の変化等のなかで、地域や産業界のニーズに高等教育が適切に対応できていないとの指摘。
- 教育方法に関してもICTの活用をはじめとする改善を図っていくことが必要。



## 今後の課題

### 学問の進展・社会の変化に対応した教育や、学生本位の視点に立った質の高い学修の実現

#### ◎学修の質を向上させるため、以下のような課題について、設置基準、設置審査、認証評価、情報公開の在り方を含め総合的かつ抜本的に検討。

- ・既存の学科等の枠を超えて大学の特色を生かした柔軟な教育課程編成を可能とし、学生や社会のニーズに対応するための制度見直し
- ・密度の高い教育実現のための学生と教員の改善
- ・ICTの効果的な利活用
- ・外国人留学生の受け入れ、日本人学生の海外留学の促進、大学間連携の促進

# 学修成果の測定に係る情報

学生個人の学修成果の測定に用いることができる可能性のある情報の例	大学全体の成果の測定に用いることができる可能性のある情報の例
学修時間	入学志願者の数・倍率
単位の取得状況 ※成績・ルーブリックによる評価を含む	学修時間の状況(平均や傾向等)
GPA	—
アセスメントテストの結果	アセスメントテストの結果
学位の取得状況	—
資格や褒賞等の取得状況	特定の資格の取得率、褒賞の取得件数
学外試験のスコア	外部試験のスコアの状況
進路の決定状況	進路決定率(就職率、進学率) ※特定の進路への決定率を含む
学内外からの評判	学内外からの評判
—	学生による成長実感・大学教育への満足度

備考 上記情報の例については、大学教育再生加速プログラム(API)の指摘をもとに考察。

出所:中央教育審議会(大学教育再生加速ワーキンググループ)(第2回、2017.8.9)配布資料、産業界により一部加工

# 我が国の高等教育に関する将来構想について(諮問)(平成29年3月6日)(概要)

## 1. 高等教育の将来構想を検討する必要性

### 社会経済の大きな変化

- 【第4次産業革命】は既存の産業構造、就業構造、さらには人々の生活を一変させる可能性
- ・本格的な人口減少社会の到来により、高等教育機関への将来的な進学数も大幅減少(2005年:約137万人 → 2016年:約119万人 → 2030年:約100万人 → 2040年:約80万人)

### 高等教育の質の果たすべき役割

- ・我が国は、高度経済成長期に比べて、社会の経済的成長、発展、人類社会の調和ある発展のためには、人材育成と知的創造活動の担い手である高等教育機関が果たすべき重要な役割を担っている
- ・我が国は、高度経済成長期に比べて、社会の経済的成長、発展、人類社会の調和ある発展のためには、人材育成と知的創造活動の担い手である高等教育機関が果たすべき重要な役割を担っている
- ・我が国は、高度経済成長期に比べて、社会の経済的成長、発展、人類社会の調和ある発展のためには、人材育成と知的創造活動の担い手である高等教育機関が果たすべき重要な役割を担っている

## 2. 主な検討事項

高等教育機関が求められる役割を果たすことができるよう、これまでの政策の成果と課題について検証するとともに、高等教育を取り巻く状況の変化に対応して、これからの我が国の高等教育の将来構想について総合的に検討を行う

### ①各高等教育機関の組織の強化に向け早急に取り組むべき方策

- ・第1期中央教育審議会(大学分科会)が示した「教育の質の向上に向けた早急に取り組むべき方策」のなかの事項を中心として検討
- ・教育課程や教育方法の改善
- ・学修に関する評価の厳格化
- ・社会人学生の受け入れ
- ・他機関と連携した教育の高度化

### ②家への対応や職種の創造等を実現するための学修の質の向上に向けた制度等の在り方

- ・「個別プログラム」の位置付け、学生と教員の比率の改善などについて、設置基準、設置審査、認証評価、情報公開の在り方を含め総合的、抜本的に検討
- ・学位等の国際的な通用性の確保、外国留学生の受け入れ、日本人学生の海外留学の促進、効果的な連携のための高等教育機関間の連携

### ③今後の高等教育全体の組織も視野に入れた、地域における質の高い高等教育機会の確保の在り方

- ・今後の高等教育全体の組織も視野に入つつ、地域における質の高い高等教育機会を確保するための抜本的な構造改革について検討(例えば、高等教育機関間、高等教育機関と地方自治体・産業界との連携の強化など)
- ・分野別・産業界別の人材育成の必要状況を十分考慮するとともに、国公私立の役割分担の在り方や設置者の枠を超えた連携・統合等の可能性なども念頭に検討

### ④高等教育の改革を支える支援方策

- ・①～③を推進した、教育研究を支える基礎的経費、競争的資金の充実、その配分の在り方の検討
- ・学生への経済的支援の充実など教育費負担の在り方の検討

※「野心的」は、この構想を推進することを目指す。この構想を推進するにあたっては、必要に応じて、関係機関と連携して取り組むべき方策を講ずる必要がある。

# 学修成果の可視化を図る前提

学修成果の可視化を図る前提として、

- ・ 例えば、学生が身に付けた資質・能力が大学の定めるディプロマ・ポリシーに記載する内容にどれだけ近づいたか等を検証できるように、**3つのポリシーはできる限り具体的なものであること**
- ・ **カリキュラム・ポリシーに基づいた具体的な教育課程の編成・実施が実際に行われるとともに、厳格な成績評価が行われること**
- ・ 学修時間の測定やルーブリック、学修ポートフォリオ等の**教育成果の可視化に資する手法を、予め効果的に組み込むこと**

などが必要になるのではないか。

出所:中央教育審議会(大学分科会制度、教育改革ワーキンググループ)(第2回、2017.8.9)配布資料、下線・文字色は筆者

## 大学教育再生加速プログラム(AP)における指標例

### 1. 必須指標

- 【テーマⅠ：アカデミック・ラーニング】
- アクティヴ・ラーニングを導入した授業科目数の割合
  - アクティヴ・ラーニング科目のうち、必修科目数の割合
  - アクティヴ・ラーニングを受講する学生の割合
  - 学生1人当りアクティヴ・ラーニング科目受講数
  - アクティヴ・ラーニングを行う専任教員数
  - 学生1人当りアクティヴ・ラーニング科目に関する授業外学修時間
- 【テーマⅡ：学修成果の可視化】
- 退学率
  - プレズメントテストの実施率
  - 授業満足度アンケートを実施している学生の割合
  - 上層アンケートにおける授業満足率
  - 学修行動調査の実施率
  - 学修到達度調査の実施率
  - 学生の授業外学修時間
  - 学生の主な就職先への調査
- 【テーマⅢ：入試改革】
- 多様な評価尺度による入学選抜を経た専任教員の割合
  - 入学選抜に従事する役割分担別教職員の割合
  - アドミッションオフィサー
- 【テーマⅣ：高大接続】
- 高校関係者との意見交換の実施数
  - 高校生を対象とした大学レベルの教育機会の提供数
  - 上層教育機会を総た学生の単位認定数
- 【テーマⅤ：長期学外学修プログラム(ギャップイヤー)】
- 長期学外学修プログラムに参加する学生の割合
  - 上記プログラムを終った学生の成績評価
  - 退学率
  - 学生の授業外学修時間
  - 進路決定の割合
  - 学生が企画する活動数
- 【テーマⅥ：卒業時における質保証の取組の強化】
- 学生の成績評価
  - 学生の授業外学修時間
  - 進路決定の割合
  - 卒業計画に参画する教員の割合
  - 質保証に関するFD・SDの参加率
  - 卒業生追跡調査の実施率

出所：中央教育審議会大学分科会制度・教育改革ワーキンググループ(第2回、2017.8.0)配布資料、発表資料、発表資料により一部加工

20

## 大学教育再生加速プログラム(AP)における指標例

### 2. 各大学による任意指標(例)

- (1) 学生の状況を示すもの
- 卒業率
  - 離職率
  - 留年率
- (2) 学生の力を示すもの
- アセスメントテスト(外部テストなど)実施率
  - 成長実感(知識・能力)
  - 「学生の能力獲得に係る直接指標」(ディプロマ・ポリシー達成度、アセスメントテストなど)
  - TOEICスコア
  - 学修成果のアセスメント実施率
  - 国家試験の合格率
  - アセスメントテスト成績上位者(1年⇒3年)の割合
  - 学生の卒業論文の学会発表数
  - 語学の必達目標の達成率

出所：中央教育審議会大学分科会制度・教育改革ワーキンググループ(第2回、2017.8.0)配布資料、発表資料により一部加工

21

## 大学教育再生加速プログラム(AP)における指標例

### (3) 大学の教育力を示すもの

- FD・SD参加率・実施回数
- (学修成果の可視化、教員マネジメントなど)インテリジェンス実習先数、参加学生数
- アクティヴ・ラーニング回数
- ラーニングプロセスの定着率、利用者数など
- 正課外プログラム数、参加学生数、関与教員数
- ポートフォリオ導入率、利用率
- ルーブリック導入率、受講学生数
- 学外実習科目数、受講学生数
- e-learning教材、授業収録システム等利用率
- IR回数
- LMS利用率
- PBL科目数
- TA等学生スタッフ数、活用科目数
- アクティヴ・ラーニング設置数
- クリカク導入率
- ティーチング・ポートフォリオ等作成者数
- ナンパング・サブメント等発行率、活用率
- ナンパング導入率
- ハワイマンナ評価実施率
- ベスト・ティーチャー賞授与数
- 学生リアルアクション実施科目数
- 学生満足度
- 企業アンケート実施件数
- 教育支援スタッフ等の人数
- 教育実習に係る論文発表、報告等の本数
- 授業コンパニオンプログラム実施回数
- 授業公開科目数
- 授業満足度アンケートを実施している科目の割合
- 新入生アンケート実施率
- 成績評価基準の標準化科目数
- 卒業生アンケート実施率
- 卒業論文提出率
- 入学満足度
- 反転授業導入率
- 父母アンケート実施率
- GPA以外の学修評価到達評価が可視化できる科目数
- ティプロマ・ポリシーに適合する科目数
- 学外学修等に対する外部からの財政支援額
- 学修成果別の成績評価の実施割合
- 卒業生業績数(算額)(教育改革)
- 教員向け授業方法アンケート回答率
- 教信用データの収集率
- 授業支援アドバイザー数
- 授業参観提供科目数、参観教員数
- 図書館利用状況、満足度
- 正課外アクティビティを正課科目化数
- 優れたリターナーシップを持つ学生の養成数

出所：中央教育審議会大学分科会制度・教育改革ワーキンググループ(第2回、2017.8.0)配布資料、発表資料により一部加工

22

## 学生の学修成果→大学の教育成果

大学の質保証の強化という観点に加え、大学の教育成果に期待し、大学の教育研究と連携を深めつつある地域社会・企業等に対して大学の説明責任を確保・向上するため、**大学全体の教育成果の可視化の取組**を促進するための方策についてもあわせて議論する必要がある。

出所：中央教育審議会大学分科会制度・教育改革ワーキンググループ(第2回、2017.8.0)配布資料、下線、文字色は発表者

↑  
学生の学修と、大学教育について数多くの指標を設定し取組を展開している大学教育再生加速プログラム(AP)における先進的な事例は、「成果の可視化」を軸とした次期政策を牽引するものとして期待。

23

御清聴ありがとうございました

## 大学教育再生加速プログラム(AP)

### テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」 幹事校挨拶 および 幹事校事業紹介

日本福祉大学 中村信次  
AP事業推進委員長 全学教育センター長

## 幹事校の役割

- ◆ テーマV採択校間の連携(課題共有・解決)
- ◆ テーマI～IV幹事校との協働(情報共有・発信)
- ◆ 社会への成果発信

## テーマV幹事校2016年度実績

- ◆ キックオフ・シンポジウム  
(テーマV採択校対象、  
2月 東京 建築会館)



- ◆ テーマVポータルサイトの開設

## テーマV幹事校2017年度事業計画

- ◆ 全国シンポジウム
- ◆ テーマVポータルサイトでの情報発信
- ◆ 地域別研究会

## 全国シンポジウム

- ◆ 全国の大学、短期大学、高等専門学校等を対象に2月頃に東京で開催予定
- ◆ テーマI～V採択校間の情報および知見の共有
- ◆ 他のテーマ別幹事校とも連携

## テーマVポータルサイトでの情報発信

- ◆ テーマV採択校の取組紹介
- ◆ 成果の情報発信

## テーマVポータルサイトでの情報発信



<https://www.n-fukushi.ac.jp/ap-portal/>

## 地域別研究会

- ◆ 全国3カ所でテーマV採択校を対象に開催
- ◆ 卒業時の質保証に関するテーマを設定
- ◆ テーマV採択校間の情報共有と事業推進における課題解決

## 第1回地域別研究会

◆ 2017年8月31日（木）13:00～17:00

於：日本福祉大学名古屋キャンパス



## 第1回地域別研究会

◆ 事例報告

- 東海大学短期大学部  
学長 補佐 山本 康治 氏  
児童教育学科教授 桑原 公美子 氏
- 山梨学院短期大学  
食物栄養科長 羽畑 祐吾 氏
- 大阪工業大学  
教育センター長 棕平 淳 氏

## 第1回地域別研究会

◆ 話題提供

「学教育の質保証－エキスパート・ジャッジメントで繋ぐ  
学位プログラムの学修成果と科目の学習成果－」

講師 深堀 聡子 氏

(国立教育政策研究所 高等教育研究部長・  
チューニング情報拠点代表)

## 第1回地域別研究会

◆ ワークセッション

コーディネータ 日本福祉大学 佐藤 慎一、村川 弘城  
APテーマVの事業推進に当たり、上手く進んでいる取  
組、課題、不安について、小グループに分かれて実  
務・実運用レベルでの情報交換を行った。ここで挙げら  
れた課題を、今後の地域別研究会での取り扱い内容  
の候補としていく。

平成29年10月28日(土)  
AP事業シンポジウム  
於：日本学生支援機構国際会議場

## 大学教育改革の近未来を考える ～正攻法かイノベーションか～



川島啓二(京都産業大学)

## 自己紹介

- 2015.3月まで 国立教育政策研究所高等教育研究部長
- 2015.4月から、九州大学基幹教育院教授、2016.8月から次世代型大学教育開発センター長
- 専門：高等教育論、教育行政学  
最近は、教育組織、FD、学生支援など
- 九大での仕事：初年次教育科目(152クラスを統一シラバスで「均質」に展開、マインドセット型初年次教育)の運営&「次世代型大学教育開発センター」の運営
- 2017.9月から京都産業大学共通教育推進機構教授・学長特命補佐

2

## 本日の内容

1. 大学教育改革の現フェイズ
2. 政策課題としての「質保証」
3. 大学の在り方としての「質保証」
4. 社会の中の大学
5. 予測困難な時代と新しいアプローチ

3

## 1. 大学教育改革の現フェイズ

4

## 「大学教育改革」を長いスパンで見えてみると… (今の体制はどのようなようになってきたのか)

- 1998年10月『21世紀の大学像と今後の改革方策について  
—競争的環境の中で個性が輝く大学—』(答申)(大学審議会)  
【課題探求能力】
- 2005年1月 『我が国の高等教育の将来像』(答申)【21世紀型市民】  
大学教育で育成される能力、人材像を概念的に提示
- 2008年12月 『学士課程教育の構築に向けて』(答申)【学士力】  
学習成果という大学教育で達成されるべき目標とそれに関連する仕組みの提示
- 2012年6月 『大学改革実行プラン～社会の産業のエンジンとなる大学づくり～』  
教育プログラムによって達成されるべき学修成果とそれのためのシステム構築
- 2012年8月 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』(答申)  
教育内容・教育方法への関与政策の「成功」

主体的な学び

5

## 第5期科学技術基本計画 (平成28—32年度)

一方で

- 失敗を恐れず高いハードルに果敢に挑戦し、他の追随を許さないイノベーションを生み出していく営みが重要である。既存の慣習やパラダイムにとらわれず、社会変革の源泉となる知識や技術のフロンティアに挑戦し、社会実装を試行し続けていくことで、新たな知識や技術を生み出し、そこから画期的な価値を創出することが求められる。そして、そうした価値は、既存の競争ルールを一変させ、競争力に大きな影響を与えていくものである。このため、従来型の研究開発に加えて、アイデアの斬新さと経済・社会的インパクトを重視した研究開発に挑戦することを促す仕掛けを取り入れ、**非連続なイノベーション**の創出を加速する。また、様々な異なるアイデアの苗床なくしてこれらの政策は成り立たない。したがって、より創造的なアイデアと、それを実装する行動力を持つ人材の研究開発プロジェクトの形でアイデアの試行機会を提供する。さらに、これらの特性を意識して効果的なプロジェクトの運営管理を実施できる人材の育成・確保を図る。p9

6

## 科学技術基本計画と大学

- 大学改革と機能強化  
大変革時代に対応するためには、いかなる状況変化や新しい課題に直面しても柔軟かつ的確に対応できるよう、多様で優れた人材を養成するとともに、多様で卓越した知を創造する基盤を豊かにしていくことが不可欠であり、大学はその中心的役割を担う存在である。さらに、大学の役割は、新たな知を、産学官連携活動などを通じて社会実装し、広く社会に対して経済的及び社会的・公共的価値を提供するところにまで広がっている。p49

主たる対象として想定するのは理系大学生やポスドク。学士課程とは異なるが…

7

## 漸進的イノベーションと 破壊的イノベーション

- KAIZENの長所と短所
- 機能別組織から商品別組織へのシフト
- 大学改革にアナロジーできるか
- 制度、政策等を勘案すれば、大学業界はアナロジーしにくい要因だらけ?

8

## 2. 政策課題としての「質保証」 ～学修成果を焦点とするロジック～

9



## 学校教育法における「大学」規定

第八十三条 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

2 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

大学の制度理念。教育の目標を明示したものではない。

11

## 課題探求能力

(「21世紀の大学像と今後の改革方策について」1998)

主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力。

12

## 21世紀型市民(「我が国の高等教育の将来像」2005)

専攻分野についてはなく、幅広い教養を身に付け、  
**高い公共性・倫理性**を保持しつつ、時代の変化に合わせて**積極的に社会を支え、あるいは社会を改善**していく資質を有する人材。

13

## 「学士力」(中央教育審議会大学分科会 2008) ～学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針～

1. 知識・理解(専攻する学問分野に関する知識+……)
  - (1) 多文化・異文化に関する知識の理解
  - (2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解
2. 汎用的技能
  - (1) コミュニケーション・スキル
  - (2) 数量的スキル
  - (3) 情報リテラシー
  - (4) 論理的思考力
  - (5) 問題解決力
3. 態度・志向性
  - (1) 自己管理能力
  - (2) チームワーク、リーダーシップ
  - (3) 倫理観
  - (4) 市民としての社会的責任
  - (5) 生涯学習力
4. 統合的な学習経験と創造的思考力

14

新たな未来を築くための大学教育の**質的転換**に向けて～生涯学び続け、**主体的に考える力**を育成する大学へ～(答申)平成24年8月28日

### プログラムと授業科目

課題の解決には以下の諸点の改善が求められる。まず、成熟社会において学生に求められる能力をどのようなプログラムで育成するか(学位授与の方針)を明示し、**その方針に従ったプログラム全体の中で個々の授業科目は能力育成のどの部分を担うかを担当教員が認識し、他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的に教育を展開すること、その成果をプログラム共通の考え方や尺度(アセスメント・ポリシー)(※)に即って評価し、その結果をプログラムの改善・進化につなげるという改革サイクルが回る構造を定着させることが必要である。また、学位授与の方針に基づいて、個々の学生の学修成果とともに、教員が組織的な教育に参画しこれに貢献することや、プログラム自体の評価を行うという一貫性・体系性の確立が重要である。**

15

## AP事業の展開

- GP等を含めて改革実践の「舞台」構築→様々な“化学反応”が発生
- But・・・「仕分け」
- 「国公立私立大学を通じて大学教育改革の支援の在り方について(意見まとめ)」平成25年8月30日(国公立私立大学を通じて大学教育改革の支援に関する調査検討会議)

16

## 主体的学修の二義性

プログラムの中で**主体的学びと、予測困難な時代を生  
き抜く態度としての主体性**

1. 授業の予習・復習は指示されなくてもする  
(先を見通す力、計画性、授業への参加意識)
2. 予習・復習**以上**の学習にも取り組み組む(知的好奇心、進路選択への意識)
3. ◎ (授業に**触発されて**) 授業以外の学びの機会  
に参加する(授業サイクル外) = **大学らしい**教育効果
4. (授業とは関係なく) 自分の進路・将来・関心に即  
した学びの機会に参加する(授業サイクル外)  
→ **イノベーション人材との関係は?**

17

## 3. 大学の在り方としての「質保証」

18

## 質保証とディシプリン

- 3つのポリシーと学校パッケージ
- 学位プログラムとの関係
- チューニングからの問いかけ: ス  
テークホルダーからの信頼獲得こそ  
が「質保証」
- ディシプリンと大学教育

19

## 学位プログラムとは

学生による学修成果を重視する観点か  
ら、学生が学士・修士・博士・専門職学位  
という学位を取得するに当たり、それぞ  
れの学位のレベルと学問分野に応じて  
達成すべき能力を明示し、その能力を学  
生が修得できるように体系的に設計され  
た教育プログラム

(筑波大学「機能強化に向けた組織改革」より)

20

## 着想のきっかけの幾つか

- 「改革の時代」としての一般的括り(1991～)  
＝「大綱化」から四半世紀
- 教育内容・教育方法への関与政策の不思議な「成功」
- それはいつから？どのように？
- 質保証のつかみどころの難しさ
- 質保証とデザインプリン
- 大学の意味を根源的に問い直す「チャンス」でもある……

21

## 質保証を軸として振り返る場合、どのような観点が必要か

- 質保証の意味
- 質保証によるスピニアウト群
- 交錯する諸領域の構造化
- 重要な一領域としてののみならず、新しい局面を招来
- 政策課題と個々の大学にとっての課題はどこまで一致するのか

22

## 4. 社会の中の大学 （「大学と社会」ではなく）

23

「大学改革実行プラン」  
(2012、民主党政権下)



大学の機能的再編成の文脈

24

## 大学改革実行プラン 全体像

図としての大学改革の基本方針「大学セージョン」の解説

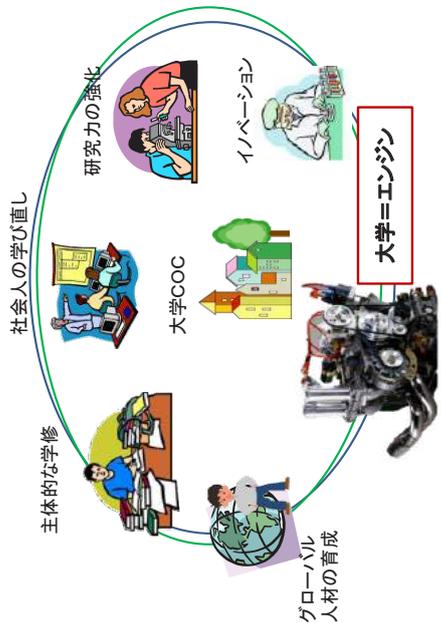
### I. 激しく変化する社会における大学の機能の再構築

- 1 大学教育の質的転換と大学入試改革**
  - 本邦初に専ら「専攻」を担う人材を養成する大学、大学院教育への転換（専攻制の導入）
  - 専攻制の導入による「専攻」の多面的・総合的な評価に基づく入試への転換の促進
  - 専攻制の導入による新たな専攻二学位制の導入の促進
- 2 クロージング化に対応した人材育成**
  - 専攻制の導入による専攻制の推進、日本に先駆ける海外の専攻制の導入
  - 入試に際しては「DEFL TOEFL」の活用、英語による授業の促進
  - 専攻制によるグローバル人材・イノベーション人材の育成の促進
  - 専攻制の導入によるグローバル人材の育成
- 3 地域再生の担い手となる大学づくり(COOC (Center of Community) 創設)**
  - 地域と大学の連携強化
  - 大学の社会学習環境の変化
  - 地域の雇用創出・地域再生への貢献

### II. 大学の機能の再構築のための大学ガバナンスの充実・強化

- 5 国立大学改革**
  - 国立大学の様々なミッションの再定義と「国立大学改革プラン」の策定・実行
  - 国立大学のミッションの再定義、より効果的かつ持続可能な運営体制の構築
  - 大学の体・字の刷新を促す「再編促進」機軸の活用
- 6 大学改革を促すシステム・基盤整備**
  - 大学構内の公募の徹底（大学ポーター）
  - 評価制度の抜本的改革
  - 学費の削減のための新たな行政法人の創設
- 7 財政基盤の確立とリハビリある資金配分の実施**
  - 大学の構造的な再編・再編促進
  - 公取支援の充実とリハビリある資金配分
  - 多面的な資金調達の確保
- 8 大学の質保証の徹底推進**
  - 学費削減・学費削減型可変型・アットホーム型・短大併合型・学費削減型による質保証の徹底推進
  - 学費削減型可変型・アットホーム型・短大併合型・学費削減型による質保証の徹底推進
  - 学費削減型可変型・アットホーム型・短大併合型・学費削減型による質保証の徹底推進

## 大学改革実行プランにおける大学像



26

## 教育基本法における「大学」規定

### 第七条

大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

2 大学については、**自主性、自律性、その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない。**

- 平成18年の改正で新設！

27

## 変わりゆく局面

2008年のストーリー＝大学のストーリー

＝ 大学教育の内実を強化

説明責任、「見える」化、アウトカム重視、プロセス管理へ→大学教育の内的構造が焦点

2012年 高等教育の構造と機能の再編成

大学それ自体の価値がまずリスペクトされるのではなく、どのような社会的機能を担ってくれるのか、という観点から評価

28

## 5. 予測困難な時代と新しいアプローチ

予測困難な時代への対応能力の育成は、現代教育改革の最重要キーワード

29

## 教育に係るイノベーションとは

- 大学教育改革の枠組みがイノベーションを生みにくくしている？
- イノベーションをどのように生み出していくのか
- そのための組織文化とトライ&エラー：質保証カルチャーとの兼ね合い

30

## 対照的なアプローチ

仮説検証・分析型アプローチ

問題解決型

評価や分析を改善につなげる

デザイン思考型アプローチ

問題発見・潜在的要因の探究

ユーザーとの共感プロトタイプング



31

## デザイン思考のプロセス

共感：テーマ設定、参与観察

課題定義

アイデア・コンセプト創造

プロトタイプング（試作・試行）

ユーザーテスト

32

## ストーリーテリングと組織

ストーリーテリングにおいて捉えられる組織観は、これまでのものとは大きく異なってくる。組織は、もはや権限と責任によって機能的に結び付けられ、中心となるブレインがいて、環境を把握し、戦略を策定するものではない。組織では様々な場所で行うストーリーテリングが交錯しており、この時、組織がストーリーテリングを行うのではなく、ストーリーテリングという実践によって組織が構成されるのである。（『ストーリーテリングが経営を変えろ：組織変革の新しい鍵』J.S.Brown et al., 2007、同文館出版）

組織観の転換

33

## 私の問題意識

- 大学改革プロセスの目標管理主義、公式主義の功罪
- 仮説検証型の方法論（それが悪いわけではない）の相対化
- 制度的決定による同質性の保証と、理解による「共有」との差異
- デザイン思考的だったGP事業

34

ご清聴ありがとうございました

keiji@cc.kyoto-su.ac.jp

35

## 茨城大学における 教育の質保証の取組

茨城大学 全学教育機構  
嶋田 敏行

## はじめに

2

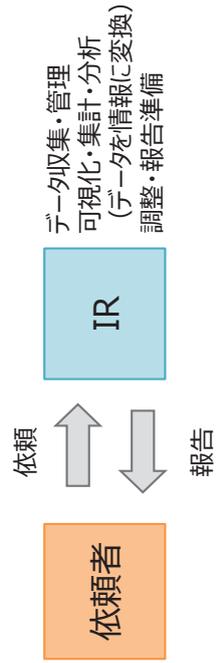
- 本学は「卒業時の質保証＝内部質保証システムの構築と運用」と考え、学修成果の測定・把握、それら教育改善関連情報の流通の高度化を目指している。
- 教育の内部質保証システムの定着は、教職員が教育の質に関する議論を日常的に行っている状況として、そのための支援をIRが行う、という基本設計である。
- これらの取り組みの現状と課題について「4 階層質保証システム」、「学修成果の可視化」、「地域との協働による質の向上」という3つのキーワードで報告したい。

Department of Assessment and Planning for Higher Education, Ibaraki Univ., 2017

3

## IRとは何か

- IRというのは、Institutional Research の略。
- IR業務とは（リクエスト等にもとづき）、1）必要な時に、必要な情報を、必要とする依頼者に提供する業務、2） そのためのデータの情報への変換業務である。



Department of Assessment and Planning for Higher Education, Ibaraki Univ., 2017

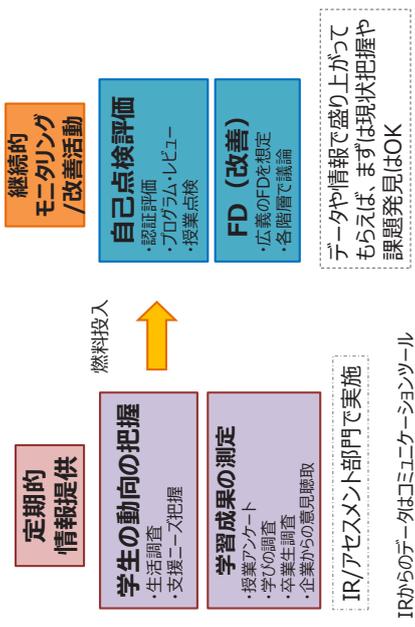
4

## 内部質保証の課題と解決

- ささまざまな活動は行っており、パーツはかなりある。
- それが体系的、組織的に行われていないのが課題。  
↓ (本学ではAP事業の支援を受けて改善)
- 自己点検評価（現状把握）のための教育目標 (DP) の設定を実施。
- 現場の負荷を上げずに教育改善を進める支援組織（全学教育機構総合教育企画部門）の設置。
- 全国モデルケースとなるよう情報を他大学へ発信。

Department of Assessment and Planning for Higher Education, Ibaraki Univ., 2017

## 継続的な改善のために

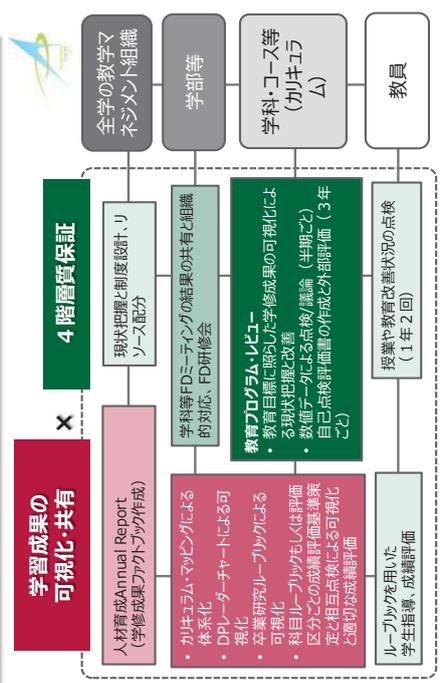


## 茨城大学について

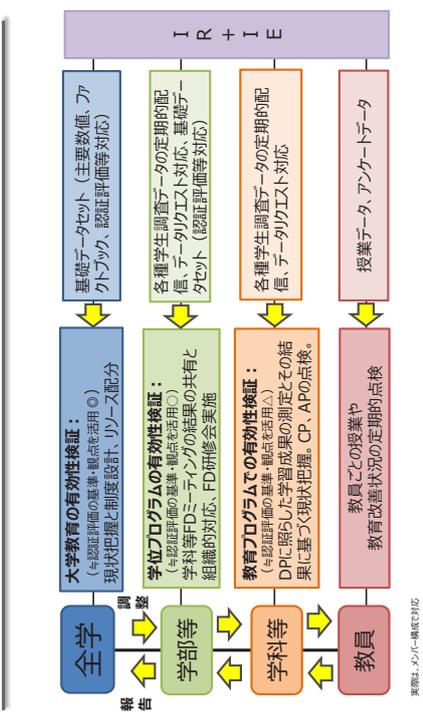
- 昭和24年に設置。
- 5学部4研究科。学部は人文学部、教育学部、理学部（水戸市）、工学部（日立市）、農学部（阿見町）。
- 学部学生6,976名、大学院生1,134名。（H29.5.1現在）
- 役員7名、大学教員546名、附属学校教員87名、職員277名（常勤のみ；H29.5.1現在）



## 教育の質保証システム



## 4階層での質保証システム



## 9 教育プログラム単位での質保証

9

- チームで教育活動を議論する
  - 教育目標 (DP) を明確化 → 指標化できるとよいが、数値になれていないなら、引っ張られるのでほどほどに。
  - 科目群を体系的に配置 → カリキュラムマッピングとシークエンスやカバレッジの確認 (CP)。
  - APとの関係の整理はなかなか難しい？
- 学習成果の確認
  - 日常的にIRやアセスメント部署からの様々な情報にもとづき現状把握、課題発見のための議論を行う。(モニタリング)
  - 何年分かつまとめて振り返りを行い、どのような成果が得られたのかを把握。(レビュー)

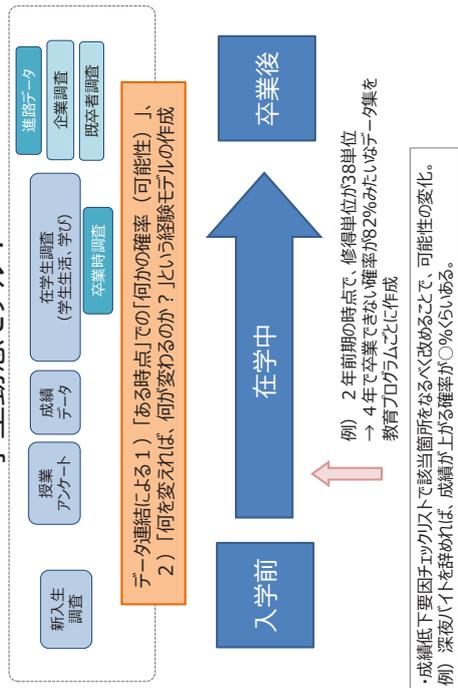
## 10 総合教育企画部門からの支援

10

- 教育目標の達成状況に関連する資料の提供
  - 各種調査の可視化と提供。= 話題・素材の提供
  - 学修成果を複数の切り口で議論してもらう。
- 学生の動向の確認の支援
  - 学籍番号で学修成果のデータと連結し、複合的に考察
- 卒論レビュー
  - 卒業研究 = 4年目に行う総合的学習と捉えて、出口の質を確保するために評価の「ものさし」を明示化。
  - 「ものさし」は学外の方 (アドバイザリーボード) にも見ていただき、地域とともに教育の質を保証。

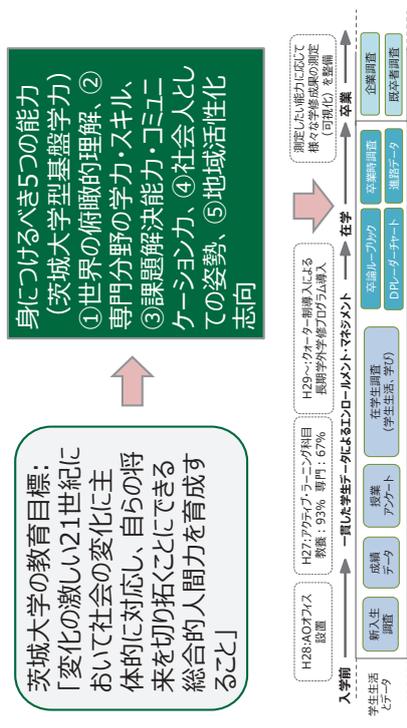
## 11 学生支援の支援を行うための学生動態モデル？

11



## 12 茨城大学の教育目標

12



# 全学のDP (学士課程)

13

(世界の俯瞰的理解) 自然環境、国際社会、人間と多様な文化に対する幅広い知識と俯瞰的な理解

(専門分野の学力) 専門職業人としての知識・技能および専門分野における十分な見識

(課題解決能力・コミュニケーション) グローバル化が進む地域や職域において、多様な人々と協働して課題解決していくための思考力・判断力・表現力、および実践的英語能力を含むコミュニケーション力

(社会人としての姿勢) 社会の持続的な発展に貢献できる職業人としての意欲と倫理観、主体性

(地域活性化志向) 茨城をはじめとする地域の活性化に自ら進んで取り組み、貢献する積極性

問22 続いて学習の成果について伺います。本学での学生生活によって以下の知識や能力、スキルや考え方を身に付けつつあるかを自己評価してください。もっとも当てはまる部分に○を記入してください。

14

要素	← 身に付けつつある	まだ十分ではない→
自然環境に対する幅広い知識	1 2 3 4 5	5
国際社会に対する幅広い知識	1 2 3 4 5	5
人間と多様な文化に対する幅広い知識	1 2 3 4 5	5
世界を俯瞰的にとらえるための視点、視野および素養	1 2 3 4 5	5
課題解決のための思考力	1 2 3 4 5	5
課題解決のための判断力	1 2 3 4 5	5
課題解決のための表現力	1 2 3 4 5	5
グローバル化が進む地域や職域において多様な人々との協働を可能にするコミュニケーション力	1 2 3 4 5	5
グローバル化が進む地域や職域において多様な人々との協働を可能にする実践的英語能力	1 2 3 4 5	5
社会の持続的な発展に貢献できる職業人としての意欲	1 2 3 4 5	5
社会の持続的な発展に貢献できる職業人としての倫理観	1 2 3 4 5	5
社会の持続的な発展に貢献できる職業人としての主体性	1 2 3 4 5	5
茨城をはじめとする地域の活性化に自ら進んで取り組み、貢献する地域活性化志向	1 2 3 4 5	5

# 成績の推移と進路情報

15

(必須データ)

- 学籍番号 (もしくはそれに代わるキーコード)、1) 学期ごとのGPA、2) 進路などの現在の状況

(選択的データ)

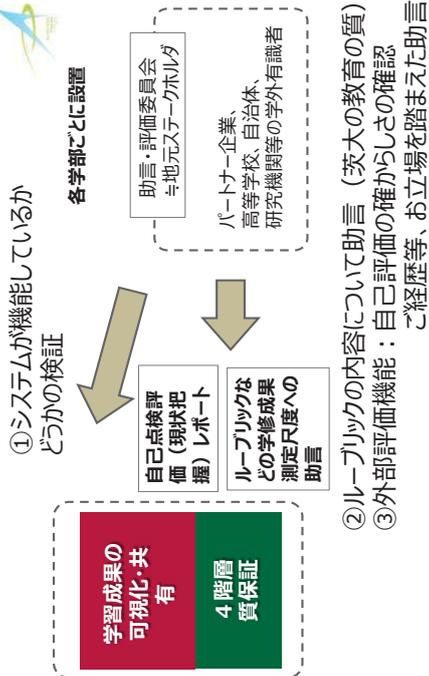
- 性別、入試区分、在学月数、奨学金の有無、自宅・アパート等・寮など、部活・サークル、進路の産業分類コード

1	2	3	4	5	6	9
3.0-	2.5-3.0	2.0-2.5	1.5-2.0	1.0-1.5	0-1.0	対象外

16

学部	学系	専攻	単位	GPA	進路	性別	入試	在学	奨学	部活	サー	産業	コード
理	理	理	理	3.48	120	1	1	1	1	1	1	1	1
理	理	理	理	2.93	124	1	2	2	2	2	2	2	2
理	理	理	理	2.73	131	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.62	126	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.99	123	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	3.17	122	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.69	146	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.33	126	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	1.94	124	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.7	142	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.65	126	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.37	123	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.39	131	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.45	123	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	2.29	123	1	3	3	3	3	3	3	3
理	理	理	理	1.69	124	1	4	4	4	4	4	4	4
理	理	理	理	1.69	126	1	4	4	4	4	4	4	4
理	理	理	理	1.69	126	1	4	4	4	4	4	4	4
理	理	理	理	1.65	126	1	4	4	4	4	4	4	4
理	理	理	理	1.45	132	1	4	4	4	4	4	4	4
理	理	理	理	1.32	126	1	4	4	4	4	4	4	4
理	理	理	理	1.25	123	1	4	4	4	4	4	4	4
理	理	理	理	1.13	61	1	4	4	4	4	4	4	4

## 学外のみなさまのご協力



## まとめ

- 本学における「卒業時の質保証」(AP事業)とは、**内部質保証システムの整備**である。
- いずれかの学部等で既に進めている教育改善の取り組みの**全学的展開と組織的・継続的に行うための仕組み作り**、そして**IR機能による支援**である。
- 我が国の教育の内部質保証システム構築の課題は、さまざまな取り組み(ツール)がシステム化、組織化されておらず、「継続的改善」にながっていないことであることなので、本学の取り組みをモデルケースとして、我が国の高等教育の発展に寄与したい。



山形大学  
YAMAGATA UNIVERSITY



大学教育再生加速プログラム(AP)  
(Acceleration Program for University Education Reinforcing - AP)

# 山形大学AP事業の 概要と現状

山形大学 学術研究院  
浅野 茂

高知大学 平成29年度AP事業シンポジウム報告資料  
2017年10月28日(土) @東京国際交流会館

## 報告の構成

1. AP事業の概要
2. 基盤カテストの概要
3. 基盤カテストの実施と分析事例
4. まとめ



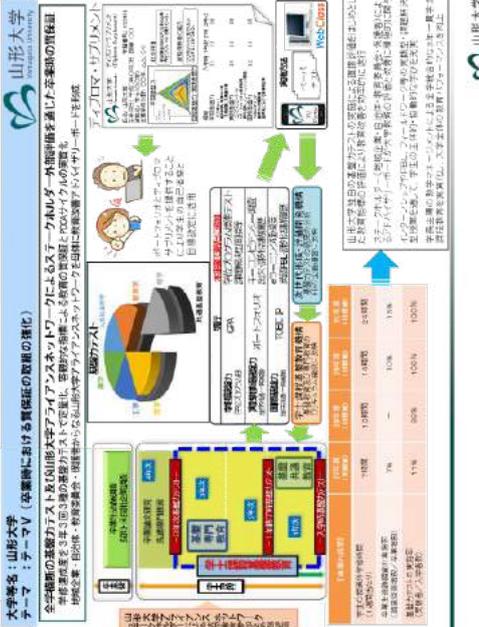
山形大学  
1

## AP事業の概要

大学名：山形大学  
テーマ：チーフ・レビュー (卒業生における履修保証の強化)

全国展開の基盤カテストとして、山形大学がAP(アメリカン大学入学試験)の資格保証を推進する。これは、卒業生の履修保証を強化し、卒業生の就職率向上に貢献することを目的とする。

AP(アメリカン大学入学試験)とは、アメリカン大学入学試験の資格保証を推進する。これは、卒業生の履修保証を強化し、卒業生の就職率向上に貢献することを目的とする。



AP(アメリカン大学入学試験)とは、アメリカン大学入学試験の資格保証を推進する。これは、卒業生の履修保証を強化し、卒業生の就職率向上に貢献することを目的とする。

AP(アメリカン大学入学試験)とは、アメリカン大学入学試験の資格保証を推進する。これは、卒業生の履修保証を強化し、卒業生の就職率向上に貢献することを目的とする。



山形大学  
2

## 基盤カテストの概要

- **学問基盤力** — 自律的に課題に取り組み、専門力・専門知識の体系的習得と実践的な運用体験  
総合大学の学際的強みを生かした応用力の獲得
- **実践地域基盤力** — 社会でリーダーシップを発揮する人間力  
力強い学びを保証するキーコンピテンシーの育成  
地域課題に挑戦し生涯学び続ける自己学習力獲得
- **国際基盤力** — 実践的な英語で多様性に挑戦する国際力  
基盤としての英語力を4技能・専門別に習得  
英語PBLの実施、様々な活動を通じた国際理解



山形大学  
3

## 基盤力テストの概要

### 開発体制

- 基盤力テストWG(基盤教育企画部の各専門分野の教員4名)

### 分野

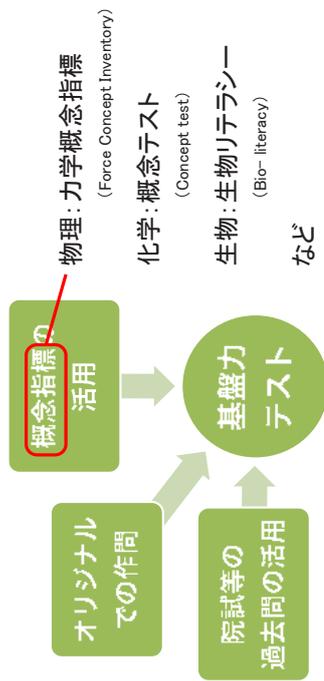
- 数的文章理解、数学、物理学、化学、生物学
- 各分野で、30～45問程度を作問

### 開発方針

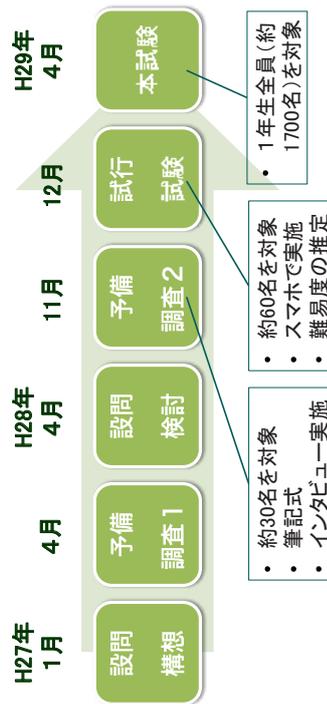
- 知識だけではなく、概念まで定着していることを測定できるテストを開発する

## 基盤力テストの概要

### 様々なリソースの活用



## 基盤力テストの実施と分析事例



## 基盤力テストの実施と分析事例

### 試験形式

- スマートフォン(YU Portal)を使用
- 試験時間は**5科目で30分程度**を想定
  - 出題数は各分野、**5問ずつ**
  - 設問毎の制限時間:**3分**



### 出題形式

- 項目反応理論(Item Response Theory, IRT)による、受験者の回答に応じた難易度調整

### 基盤力テストの実施と分析事例

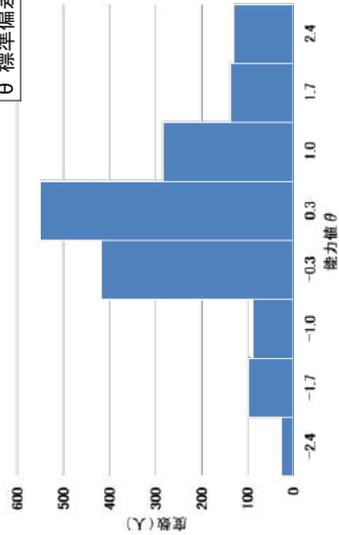
	数的文章 理解	数学	物理学	化学	生物学
対象学部	全学部	進系のみ (文系は対象外)			
対象者数	1731	1242	1242	1242	1242
受験者数	1719	1230	1230	1230	1233
受験率	99.3%	99.0%	99.0%	99.0%	99.3%

※平成29年4月のオリエンテーション実施時の受験率

### 基盤力テストの実施と分析事例

#### 学問基盤力：数的文章理解

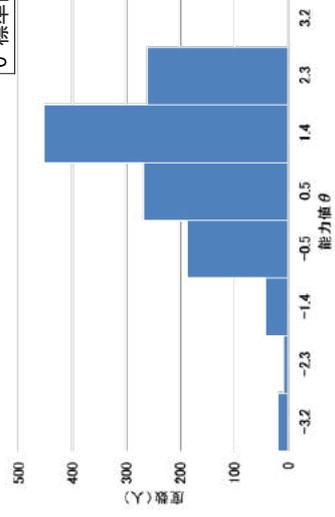
標本の大きさ	1721
$\theta$ 平均値	0.350
$\theta$ 標準偏差	1.08



### 基盤力テストの実施と分析事例

#### 学問基盤力：数学

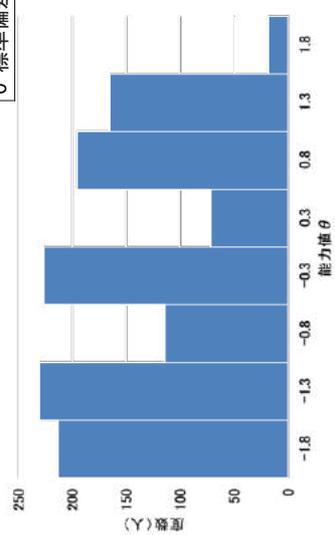
標本の大きさ	1232
$\theta$ 平均値	0.964
$\theta$ 標準偏差	1.18



### 基盤力テストの実施と分析事例

#### 学問基盤力：物理

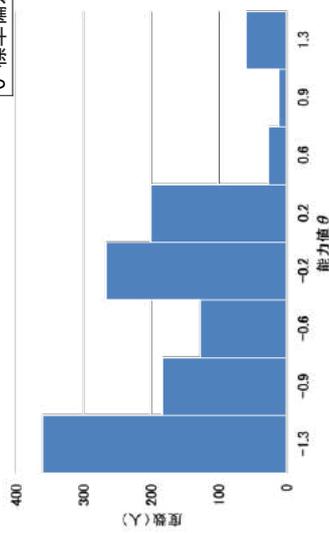
標本の大きさ	1232
$\theta$ 平均値	-0.332
$\theta$ 標準偏差	1.08



## 基盤力テストの実施と分析事例

### 学問基盤力：化学

標本の大きさ	1232
$\theta$ 平均値	-0.518
$\theta$ 標準偏差	0.73

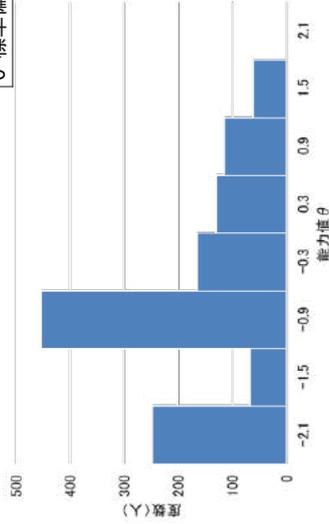


12

## 基盤力テストの実施と分析事例

### 学問基盤力：生物

標本の大きさ	1234
$\theta$ 平均値	-0.750
$\theta$ 標準偏差	1.07

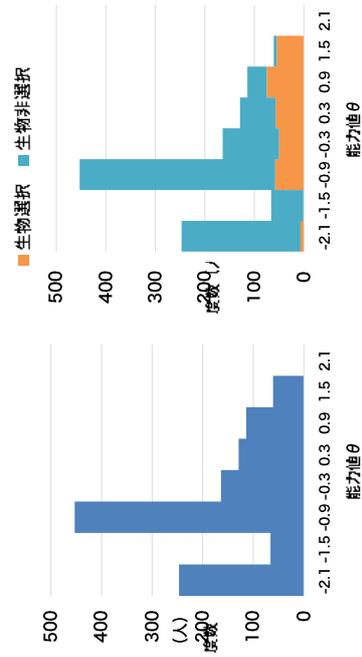


13

## 基盤力テストの実施と分析事例

### 学問基盤力：生物 (妥当性の検証)

センター試験での選択を考慮した分析(生物)



14

## 基盤力テストの実施と分析事例

### 実践地域基盤力：5 因子性格検査

#### ■ 収集データ

#### 1. キーコンピテンシー調査

(Big Five Personality Test)

- ・ 外向性 (Extraversion)
- ・ 協調性 (Agreeableness)
- ・ 勤愼性 (Conscientiousness)
- ・ 情緒安定性 (Neuroticism)
- ・ 知的好奇心 (Openness to experience)



#### 2. 出欠・課外活動履歴

- ・ ICリーダ and/or ビーコンシステムによる出欠情報の収集



15

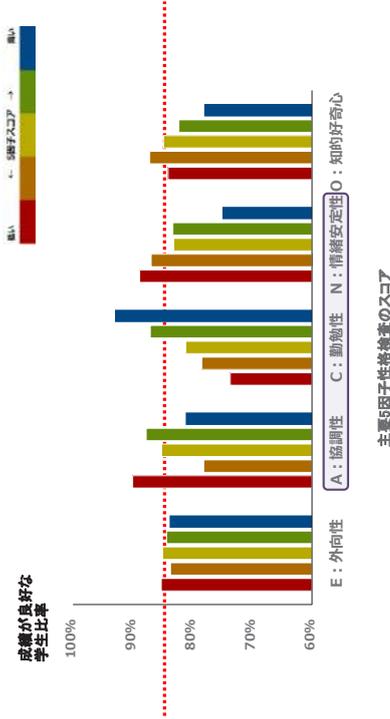
## 基盤力テストの実施と分析事例

### 実践地域基盤力：5 因子性格検査

- 基本的な問い
  - ・ 各5因子スコアと学業成績の間に関連性はあるのか？
- 分析に使用する学業成績データ
  - ・ 2017年度前期におけるスタートアップセミナー(2単位)の出席状況と成績
- スタートアップセミナーとは？
  - ・ 大学生として必要な学習スキルの向上を図ることを目的とした大学導入科目
  - ・ 基本的な学習スキル：調査や情報収集、議論、口頭発表、レポート作成の能力など
  - ・ 米国における「First-Year Experience (FYE)」と同じ効果的に成功体験を積ませる(失敗から学ぶ)

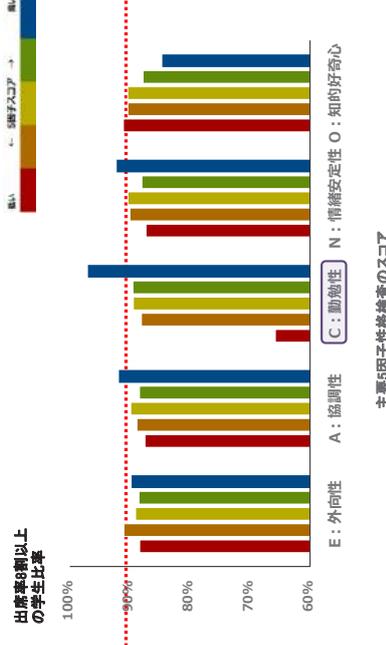
## 基盤力テストの実施と分析事例

### 実践地域基盤力：5 因子性格検査



## 基盤力テストの実施と分析事例

### 実践地域基盤力：5 因子性格検査



## 基盤力テストの実施と分析事例

### 実践地域基盤力：5 因子性格検査

- スタートアップセミナーの成績および出席状況と関連性があるかもしれない因子
  - > C: 勤労性
    - ・ vs. 成績
    - ・ vs. 出席状況
  - > N: 情緒安定性
    - ・ vs. 成績
- 今後の展望
  - > 山形大学版Early-Alert (Early-Warning) Systemsの開発
    - ・ 学生への介入プログラムを効果的に実施
    - ・ 必要な時に必要な行動特性を示す「適応」を指導

## まとめ

### ■ 分析結果の活用

- 1年終了時、3年終了時の基盤カテスタの結果を用いたカリキュラムの点検・評価
- APの成果指標：学生の授業外学習時間、卒業生追跡調査の実施率、基盤カテスタの実施率のモニタリングと活用
- 学生へのフィードバック、ディプロマ・サブリエメント



## まとめ

### ■ 質保証

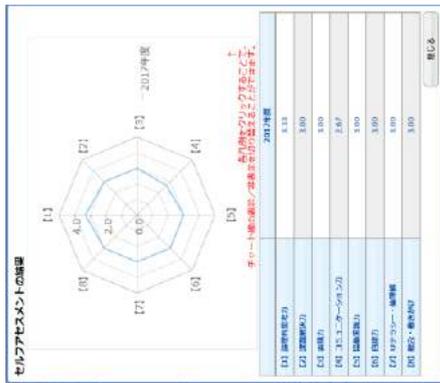
- カリキュラム・チェックリスト+基盤カテスタの結果を用いたプログラム・レビュー
- 3つのポリシーの実質化
- 継続的改善の循環プロセス(IE)の定着化

科目名	授業の到達目標	学位課外方針 (DP)				
		DP1	DP2	...	...	DPn
スタートアップセミナー	この授業を履修した学生は、 ① 自ら学ぶ姿勢(自律性)を身に付けている。【知識、理解】 ② グループで協働的に関わり、対話と議論を通じて課題を解決し、共同で解決目標を達成することができる。【態度、習得】 ③ 自分自身の学びの進捗を把握し、情報、資料を積極的に発信することができる。【技能】					
ガイダンスセミナー	専門に特化した基礎知識と専門性を修得し、専門分野の発展的探究が可能な、日英語に堪能になり、書く、聞く、読むなどの高度な使いこなすための基本的能力を身に付けている。					
自然科学特選I	自然科学の基礎知識を基盤として、専門分野の発展的探究が可能な、日英語に堪能になり、書く、聞く、読むなどの高度な使いこなすための基本的能力を身に付けている。					





#### 4-4. e-ポートフォリオの導入(活用事例4)



・全学部1年生と3年生にセルフ・アセスメントを4月に実施

・自己評価の変化をチャートで表示

#### 4-5. e-ポートフォリオの導入(活用事例5 教員)

高知大学 e-ポートフォリオ

担当授業の受講者数、成績評価分布等の確認が可能

担当学生のポートフォリオ情報が閲覧可能

#### 5. ディプロマ・サプリメントに向けて

・ディプロマ・ポリシーを達成したことを保証するもの

・個々の学生が学位取得のために学修した内容等について本学が保証するもの

ディプロマ・サプリメント		プレ・ディプロマ・サプリメント	
発行形態	証明書(公文書)	e-ポートフォリオ上で随時、学生が閲覧・印刷可	
発行時期	卒業時	1年次第1学期の成績公表後から卒業時まで常時	
用途	証明書(学位記補完、学びの履歴書)	学生(本人)振り取り用	
内容	検討中	「高知大学プレ・ディプロマ・サプリメント(案)」のとおり	

e-ポートフォリオ・サマリーとしての性格

- ① 学生情報
- ② 取得予定学位
- ③ 学位授与の要件
- ④ 学修成果
- ⑤ 正課外活動振り返り

#### 6. 高知大学プレ・ディプロマ・サプリメント(案)

**【学生情報】**

- 氏名・学籍番号
- 所属学科・コース等
- 副専攻等名

**【取得予定学位】**

学位授与の方針  
(ディプロマ・ポリシー)

学位授与の要件  
(要卒単位数)

**【学修成果】**

- 高知大学が養成する10+1の能力
- 評語・成績分布
- 単位数推移・全科目のGPA
- ペネンゼキヤリア大学生基礎カレポート
- 地域関連科目 修得単位数
- 地方創生推進士養成科目 修得単位数
- 外国語能力試験

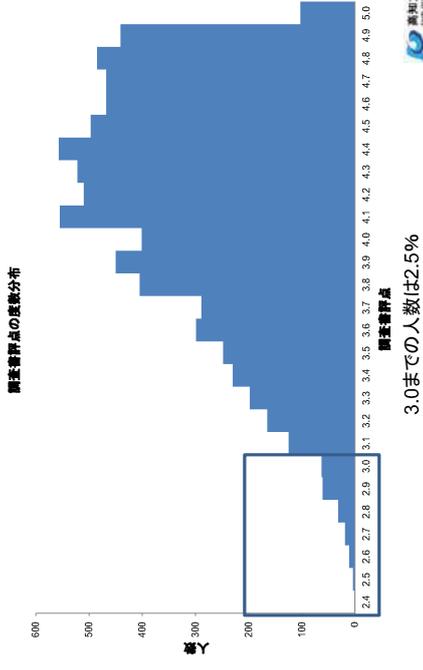
**【正課外活動振り返り】**

- 進正課活動・部活動・サークル活動
- ボランティア活動等・学内資格等

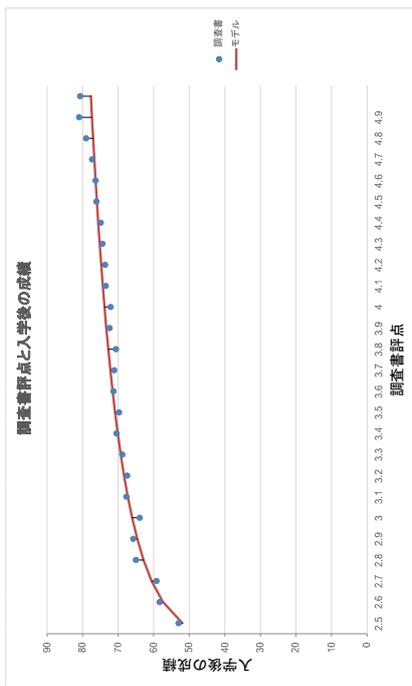
# 高知大学AP事業の質保証の取組

## 大学全体の質保証の取組

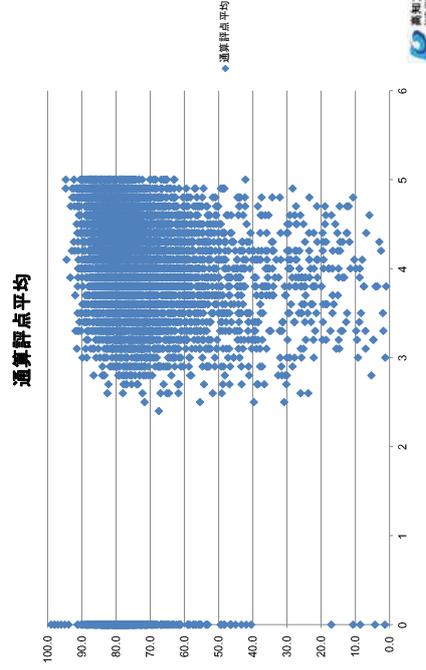
### 7. 入試データの分析 調査書評点の度数分布



### 8. 入学時の調査書評点と 入学後の成績の関連



### 9. 調査書評点の予測力 一即断は禁物！



## 10. 調査書評点と入学後の成績 —直列モデル

発表スライド参照



## 11. 入試データと入学後の成績

発表スライド参照



## 12. 入試区分、調査書評点と3年次の成績

発表スライド参照



## 13. 成績評価厳格化へ向けて 2017年度第1学期各授業の成績評価分布の開示

- 学部ごとに各授業の秀優良可不可の成績分布が適正なものになっているかどうかを検討中
  - 学部間の相違
  - 試験方法 (試験・レポート・客観試験・論述試験)
  - 試験回数 (中間と期末、期末のみ、毎回小レポート)
  - 授業外学修時間
  - 教育方法 (講義のみ、アクティブラーニング頻度)
  - 受講人数



ご清聴ありがとうございました



---

文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）  
テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」事業報告書（平成 29 年度）

発 行：2019年2月

発 行：高知大学 大学教育創造センター

印 刷：有限会社 三宮印刷

<本報告書に関する問い合わせ先>

高知大学学務部学務課教育支援室教育企画係

〒780-8520 高知県高知市曙町二丁目5番1号

TEL：088-844-8143, 088-888-8018

Mail：kochiap@kochi-u.ac.jp

URL：https://fdas.kochi-u.ac.jp/kuap/

---